

---

# DAWN OVERTURE -head-

早村友裕

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D A W N   O V E R T U R E   -   h e a d   -

### 【Nコード】

N 2 7 8 9 F

### 【作者名】

早村友裕

### 【あらすじ】

セフィロト国とグリモワール王国の戦争から4年。セフィロト国からの脱出を試みるラックとアレイは、ひょんなことから歌劇団で働くことに……。二人は無事国境を越えることができるのか？

L  
O S T C O I N シリーズ第二幕放浪編、第一部です。

・・・ はじまり ・・・ (前書き)

この作品は「LOST COIN」シリーズの「第二幕・放浪編」にあたります。

ここから読み始める事もできますが、もしよろしければ「第一幕・滅亡編」からどうぞ。

「LOST COIN」まとめページ

<http://sky.geocities.jp/lostcoin/lostcoin.htm>

ブログ「また、あした。」

<http://d.hatena.ne.jp/lostcoin/>

- - - はじまり - - -

4年前、戦争が終結した。

悪魔を崇拝するグリモワール王国と、天使を崇拝するセフィロト国との凄惨な戦は、グリモワール国土を破壊しつつ、一つの王国の存在を消し去った。

現在この大地を支配するのはセフィロト国      天使を崇拝する光の国。

そして、多くの天使達が見守るこの国の片隅で、小さな物語が始まろうとしている。ただの序章でしかなかったその小さな物語は、やがて多くの人々を巻き込み、新たな世界の創造へとつながっていく。

そんな小さな物語の始まりの事は、まだ誰も知らない

ふつと振り向くと、これまで歩いてきた道が足元から地平まで続いていた。

生まれた土地を遥か遠くに置き去りに、自らの手足だけを頼りにここまで来てしまった。今更悔やんだところで戻れはしない。自分の手に染み付いてしまっている罪も消すことなんて出来ない。

それでも、今も胸に溜まったままの望郷の念は、隣を歩くヒトによつて随分と緩和されたのだった。

「もうすぐ国境だね、アレイさん」

そう言つて、目線を合わせようと見上げると、すぐ隣を歩いている今、首をいっぱいにしないと彼の顔を見る事が出来ないのだった。

端正に整えられた顔立ちと、切れ長の眼に収まる紫水晶<sup>アメジスト</sup>。すらり

と均整のとれた長身は、何度見ても綺麗だなあと思う。歳は確か、

えーと、そろそろ30歳になるような年齢だったと思うのだが、20代の前半と言っても差支えがない容貌をしている。表情が少ない分近寄りがたい雰囲気があるけれど、それも眺める分には凜とした空気に存在感を添えているのだった。

昔は腰ほどまでもあるストレートの黒髪だったのだが、今ではバツサリと切ってしまい、耳の辺りまでしかない。

もったいないな。彼の黒髪は非常に手触りがいいから伸ばしてくれるととても嬉しいのだけれど。

代わりに自分の髪は背中まで伸びた。あと3年もすれば昔のアレイさんと同じくらいの長さになるかもしれない。肩越しに自分の黒髪を一房、弄びながらそんな事を思う。

自分はどうかやら見た目だけなら文句なしに『美少女』と呼ばれる部類に入るらしいので、髪を伸ばしてからの評判は上々だった。

まあ、そんな事はどうでもいい。このヒトが隣にいてくれるだけで満足なのだから。

「阿呆面をするな、くそガキ。見ているこっちまで気が抜ける」

「もう、『くそガキ』って呼ぶの、やめてよ！ おれにだってラックっていう名前があるんだから」

「お前などくそガキで十分だ」

表情も変えずばさりと切り捨てたアレイさんは、こちらに視線を向けもせず黙々と歩いている。

でも、コンパスの違いにも関わらず急ぎ足にならないという事は、それなりに気を使ってくれているんだろう。もう一度だけ紫の瞳を見上げてから少しだけ微笑んだ。

「だから阿呆面をするなと言っているんだ」

「阿呆面って言うな！」

ぷつと膨れて見上げると、彼は唇の端をあげてようやくこちらを見た。

「お前はいつたい幾になった？ 24か？ 初めて会った時から6年も経つというのに全く変わらないな」

「うつ、うるさいなっ！」

予期せぬ微笑みに動揺してしまう自分がいる。

落ち着け、心臓！

何度見ても、このヒトの微笑みに慣れる事が出来ない。それはきつとこのヒトがとんでもなく無表情だっていうのと深い関係があると思う。

心を落ち着けようと前を見ると、見上げるほどの城壁に囲まれた都市が目の前に迫っていた。

「もうすぐ国境都市のリンボだ。いつものように日が暮れてから入るぞ」

「……分かってるよ」

セフィロト国をまっすぐ東西に貫く街道の先にある国境都市リンボ この都市の少し先にある関所を越えれば、隣国のリユケイオんだ。

「見つかってしまえば元も子もない。皆に迷惑をかける訳にはいかんからな」

「そうだね」

自分たちの負った枷を忘れているわけではない。セフィロト国に自分たちの存在を知られてしまえば、確実に始末の対象になるだろう。その前にこの国を出なければならぬ。

左腕の籠手の下に隠された痕を押さえ、唇を引き結んだ。

恐らくこれまでの旅で最大の難関になるであろう国境の関所を睨んで。

戦争が終了した4年前から、おれたちにはセフィロト国からの追手がさし向けられていた。

罪状は、簡単にいえば殺戮だ。

戦争だったとはいえ、セフィロト国に甚大な被害をもたらしたおれたちは、今や押しも押されぬ第一級犯罪者だった。

そう、もし、お前は本当に人間なのか、と問われれば、おれは即答する事が出来ないだろう。

その理由はもちろんいくつもある。隣にアレイさんがいてくれるから普段は考えなくて済むけれど、その不安と罪の意識は油断するとむくむくと頭を擡<sup>もた</sup>げてくるのだ。

何より大きな要素は、おれが悪魔を召喚するということだろう。それも、最上級も最上級、魔界の王とまで呼ばれた最強の悪魔を

- - - はじまり - - - (後書き)

簡単に推敲したので、最初から連載をし直すことになりました。  
手前勝手に申し訳ありません。  
これからもよろしくお願いいたします。



## SECT・1 国境都市リンボ

夕刻、西に傾いた太陽が朱色を呈し、暗灰色の石が積まれてできた城壁を仄かに色付ける。国境都市リンボとその周辺地域を治めるパリエース家の屋敷が城壁から見え隠れし、独特の形の影を緋の空<sup>あけ</sup>に映し出した。

接しているのが他国との交流をほとんど持たない民主主義国リユケイオンとはいえ、ここも国境であることに変わりない。

ディアブル大陸唯一の民主主義国であるリユケイオンは、王制をしている他の国との交流が少ない。特に戦争となると全く干渉はなく、国際問題にもほとんど口出しをしない。4年前に集結したグリモワール王国とセフィロト国の戦争の際も動じる事はなかった。北の大国ケルトは食糧支援を、隣国クトウルフは難民の受け入れを主に援助したというのに。

逆にいえば、そのお陰でリユケイオンはいくつもの戦争を回避してきたともいえる。

最もリユケイオンが不干渉主義とはいえ、他の国教都市の例にもれず、古くからこの地を治めるパリエース家は軍備に優れ、国家騎士団とは別にかんりの規模の軍事組織を有しているというもっぱらの噂なのだが。

余所者を拒むこの高い城壁もその一環と言って差し支えないだろう。

さらに時を経て、月の明かり以外何もなくなった頃、二人で城壁に近付いた。見張りには悟られないよう、闇が手伝ってくれる。

近くで見ると国境都市を守る城壁の高さが実感できた。それも、きつちりと組まれていて足場はほとんど見当たらない。これを登る事は不可能だろう 普通の人間ならば。

「どうやって越えるの？」

「……飛ぶより仕方あるまい」  
「だよね」

ひよい、と肩を竦める。

ずつと羽織っていた丈夫なフード付きマントを脱ぎ、短衣とショートパンツというラフな格好になる。両腰には一本ずつショートソードを括っていたが、それはそのまま。

準備運動とばかりに大きく伸びをして、腰に手を当てる。

「んじゃ、行こうか」

「絶対に見つかるなよ」

念を押したアレイさんに分かってるよ、と言いつ返してから、先ほどまで担いでいた荷物とマントを胸に抱きかかえた。

そして。

「ルシファ」

目を閉じて、美しい悪魔の名を呼んだ。

額が焼けるように熱くなり、背に大きく一對の翼が広がって、全身に加護がいきわたる。暗闇だった周囲の景色がはつきりと見えるようになり、聴覚が、触角がみるみる鋭敏になっていった。

魔界の王、リュシフェルの召喚。

額には黒々としたリュシフェルの紋章が浮かび上がっているはずだ。

そのまま翼を広げ、漆黒の空へと飛び立った。

城壁を難なく飛び越え、静まり返った夜の城下街に降り立つことが出来た。

ふわり、と音もなく着地すると、背に広がっていた大きな一對の翼を折りたたんで、全身を包んでいた加護を解く。すると先ほどまで感じていた額の熱さが消失した。同時に、加護によって最大限に開かれていた感覚や身体能力も収束していく。

先ほど召喚した悪魔が魔界に帰ったことを確認し、きよろきよろ

とあたりを見渡した。人目につかぬよう裏道に降り立ったのだ。誰にも見られてはいないはずだ。

舗装されていない裏道から城壁と同じ暗灰色の石畳が敷き詰められた道に出ると、迫る様にして両側に家が立ち並んでいる。のっぺりとした壁に窓がついただけのシンプルな住居はこれまでとそれほど変わりなかった。ただ、ここが国境都市であるからだろう、これまでの街より店や宿が多い。

いかに隣国リユケイオンが周囲との交流をほとんど持たないと言っても、接しているこの街には多くの人が訪れ、多くの交易品が集まるのだらう。

それほど大きな街とは言えないが、その分エネルギーがぎゅっと詰め込まれたような街だった。

いったいどんな店があつて、どんな人が暮らしているんだろう？

探検するのが楽しみだ　思わず頬が緩む。

「うまく入れたね」

後を追ってアレイさんが上空から降りてきた。

その背に閃かせているのは　純白の翼。

地に足が着いた瞬間、その翼は背から消失した。マントを取り去った彼は黒衣を纏っている。装備は少ないが、腰には長剣を携えていた。

そしてその両手には大量の荷物を抱えている。

「全く、少しは荷物を持て！」

アレイさんはもともとそんなに愛想が良くない顔なのに、さらに眉間に皺が寄っている。

「ごめんって」

ちゃんと謝ったのに、ますます眉間の皺が増えた。

「待て、くそガキ。街の散策をする前に宿をとるぞ。宿に入るのがあまり遅いと怪しまれるからな」

「はい」

探検しようと思ったのに……そんな安易な考えはアレイさんには

見抜かれていたか。

まあいいや、探検するのはまた明日でも。

少しずつ意識が浮上する。

瞼を閉じていても刺すような光が差し込んできた。

「カーテン閉めるの忘れた……」

喉の奥から絞り出すような声が漏れる。20歳少々の女性が出すにしては掠れ過ぎているが、まあ寝起きだから仕方ない。もともと声はそんなに高い方ではないのだ。

「ねえ、アレイさん、カーテン閉めてよう……」

隣のベッドにいる筈の彼に声をかけたが、返事がない。

もう剣の稽古に行ってしまったんだろうか？ 彼は毎日の早朝稽古を絶対に欠かさないから。

仕方がないのでもそもそとベッドから這い出して服を着る。ゆるい若草色の短衣に膝上のスパッツ。両腰にはショートソードを下げて。

一番動きやすい服なのだが、これもまた22歳の女性がする格好ではないとよく言われる。

ふつと見ると鏡が目に入った。大きな黒瞳、鼻と唇がバランス良く配置された顔は賛美の対象ではあるらしい。

でも、おれなんかよりアレイさんの方がずっと綺麗だと思うけどね。もつと笑えばいいのに。

いつも眉間に皺が寄っている旅の連れを思い出して、くすりと微笑んだ。

「お腹すいたっ！ アレイさん探して、朝ご飯にしよう」

履き慣れたショートブーツに両足をつっ込んで、部屋を後にした。そして、階段の踊り場にある窓から外を見ると、宿の裏庭で黒髪の男性が剣を振っているのが見えた。力強く流れるような剣技は、彼の師匠から継承したもの。毎日続けた型は、体に馴染んでまるで

美しい舞いのような。すらりと引き締まった長身と彼の愛剣は一体となり、見る者の目を惹きつける。

「アレイさん！ 朝ご飯にしようよ！」

窓からそう叫ぶと、彼は眉間にしわを寄せ、大きなため息をついた。

朝食を終えて、剣とヒップバックだけを携えた軽装備で街へと繰り出した。連泊するので荷物は部屋に置いたままだ。

一応部屋に鍵はかけてあるが……まあ、盗られても支障のない程度のものしか置いてない。

「とりあえずさ、市場に行こうよ！」

紫の瞳を見上げてそう言うと、彼はまたも大きなため息をついた。「お前は本当に今の状況が分かっているのか？ これから……」

「分かっているよ。でも、国境を越える手立てを考える時は、まず情報収集じゃない？」

そう言うと、アレイさんはもう一度大きなため息を重ねた。

「……鳥頭のくせに、何故そう核心だけは外さないんだ」

その言葉に首を傾げると、彼はおれを置いて歩き出した。

「あつ、待つてよ！」

おれも慌てて彼の背中を追いかけた。

## SECT・2 中央広場の邂逅

セフィロト国では、どの街でも規模の大きさに差はあれ、午前中には市が開かれる。大方は幅の広い道の端や広場でテントを張った様々な行商人が好き好きに店を構えるという簡素なものだ。街の商店街が仕切っているはずだが、場代も安く、旅の商人たちは好んで利用する。国もその市を奨励しているために補助が出る事もある。

国境都市であるリンボの市場も早朝から熱気に包まれていた。

海から遠い内陸部に位置するこの国境都市においては少ない水で育つ根菜類と寒さにも強い小麦が主食だ。他にも、遠くから運ばれてくる魚介の加工品、リユケイオンから流入する美しい工芸品などが多く見受けられる。

ただ、国境に沿って建てられた城壁に張り付くように半円の形を描く都市の特性上だろうが、普通なら街の中央を貫くはずのメインストリートが外円部の城壁に沿って横たわっている。メインストリート沿いに露店が多いのだが、半円の中心に位置する国境の関からメインストリートに向かって放射状の大道路が何本も伸びている。

また、都市の玄関口と隣国の関所とのちょうど中央に、大きな広場があった。放射状の道をいくらか遮る様にして横たわっている。物見せの大きなテントや出店の並ぶ大きな広場。

広場へと向かう道の途中、天使をかたどった装飾や家の扉に取り付けるお守りが多く目に入った。かつてのグリモワール王国で、悪魔の像を多く見たように。

「本当にセフィロトの人は天使さんの事が好きなんだね」  
すると隣にいた彼も静かに口を開いた。

「そうだな、建国以来およそ1000年、セフィロト国は天使信仰の歴史と共に歩んできた。それはひとえに、天使を召喚してその力を借りる事の出来る『セフィラ』という神官が存在したからだ」

セフィロト国には『セフィラ』と呼ばれる国家神官が10人存在

するのだが、彼らは天界から天使を召喚し、その力を使役する。  
セフィロト国が常に強大な国であり続けられたのは、その天使、  
ひいては神官の力によるところが大きかった。4年前の勝利にも、  
その神官たちが多大なる貢献をしていた。

広場の中央には天使ミカエルを象った彫像が佇んでいた。  
アレイさんと二人、その広場の中央へとたどり着き、乳白色の像  
を見あげて、ぽつりと呟いた。

「ミカエルさんだけじゃないけどさ、天使さんは綺麗だね」  
そう言うと、アレイさんは渋い顔をした。

どうしたんだろう、おれは何か変な事を言ったかな？

「……お前は面食いだからな」

「うん、まあ、そうなんだけど」

面食いだ、と言われて否定する気はさらさらない。

綺麗な人が好きだ。天使さんもそうだけれど、アレイさんも、そ  
れから、たくさんの悪魔たちも。

「セフィロト国は天使さんたちに守られているんだね」

「そうだな」

ぽん、と頭に手を置いて、アレイさんは同意した。

その言葉にはいろいろな感情が含まれていて、おれは思わず口を  
噤んでいた。

4年前までディアブル大陸には、対立する二つの国家があった  
天使を祀るセフィロト国と、悪魔崇拜の王国グリモワール。

1000年の歴史を持つセフィロト国の隣にグリモワール王国が  
誕生したのは、今から約450年前だ。その時から2国の歴史は互  
いに争いあう凄惨な関係に埋め尽くされていた。

当時セフィロト国から独立する際、初代グリモワール国王ユダⅡ

ダビデⅡグリモワールは魔界から悪魔を召喚し、加護を受ける術を手に入れた。

魔界の王リユシフェル、刻の悪魔メフィストフェレス、空間の悪魔ベルフェゴール、戦の悪魔マルコシアス、灼熱の獣フラウロス…数を挙げればキリがない悪魔達の中で、初代国王ユダⅡダビデⅡグリモワールは72人の悪魔を選んで召喚した。未来を知り、水や炎を操り、凄まじい身体能力を持つ悪魔達の力を借りる契約を交わすと同時に、その証として72枚のコインを創ったのだ。

それを助けたのが稀代の天文学者ゲーティアⅡグリフィス。彼は悪魔と並はずれた親和性を示し、悪魔の召喚方法や悪魔学の基礎を確立したのだった。

グリモワール王国独立後、初代ダビデ王は『レメゲトン』と呼ばれる72人の天文学者を任命し、コインを与えた。

そして、グリモワール王国は繁栄のときを迎えた。

しかし、悪魔の力を借りて繁栄を極めたグリモワール王国にも衰退の時は訪れた。

時を経るにつれてコインが失われていき、そのコインで悪魔を使役する天文学者も減っていった。

そして、4年前の戦争へと繋がったのだ。

相容れぬ二つの国は衝突し合い、2年に満たない短く凄惨な戦争の果てにグリモワール王国が倒れた。

だが、グリモワール王国は4年前に倒れた。悪魔は表舞台から姿を消してしまったのだ。

普段は忘れていた罪状を目の前に突き付けられ、おれは俯いた。  
ああ、悪い血が全身でぐるぐると渦巻いているかのようだ。腹の中心からせり上がってくる痛みと嫌悪で、思わず目を閉じた。



傍から見れば、二人で天使ミカエルの像の前に佇み、祈りを捧げているように見えただろう。

それは間違っていないけれど、きつとおれとアレイさんの中に渦巻いていた感情は、その場にいた誰にも分らないはずだ　普通の人は、自分の両手が真つ赤に染まっている夢を見てはつと目覚める事なんてないだろうから。

そうやって真摯な眼差しで天使の像を見つめ佇むおれたちは、少しばかり目立っていたらしい。

気がつけば周囲の視線を釘付けにしていた。何が悪かったのか、遠巻きに見つめて何か噂話でもしているようだ。

もしかして、正体がバレてしまったんだろうか？

アレイさんもそれに気づいていたらしい。

「すぐにここから離れるぞ」

「うん」

しかし、少しだけ遅かった。

好奇の目から避けるように二人で像を離れようとすると、一人の男性に声をかけられた。

「あの、すみません。旅の方ですか？」

振り向くと、温和そうな眼鏡の青年がこちらに向かって微笑みかけていた。

淡い茶の髪は後ろで一つに束ねている。この暑い時期に首まできつちりとしたケルト地方の民族衣装を纏っていた。ケルト地方の民族衣装は、首周りと袖、それに前部分のボタンを隠すように美しい刺繍がなされた幅広の布を縫い付けてあるのが特徴だ。基本的に生地は白で、ゆるい上着を腰の紐で止める短衣チュニックタイプの服だった。下はこれまたゆるいサイズの黒ズボン、足元は黒ブーツ。

セフィロト国の人間よりさらに彫りの深いくつきりとした顔立ちをしているのは、ケルト人の特徴だ。

国境都市で異国の人間に会うのが珍しいわけではないが、自分た

ちに声をかけてきた事は警戒に値する。

「何か？」

アレイさんが極寒の視線をその男性にくれる。少し不機嫌なだけなのだが、非常に人相がよろしくないなので、残念ながらおれはその表情が好きじゃない。何より、無意味に相手を怖がらせてしまうのだから始末に負えない。

が、その男性はそれに臆する様子もなくにこにこと笑いかけた。

「初めまして、突然申し訳ありません。私、歌劇団ガリゾントの座長を務めております、モーリと申します。以後、お見知りおきを」  
「歌劇団？」

首を傾げると、メガネの男性はにこり、と笑った。

「ええ、街から街へと渡り歩き、娯楽を提供する歌劇団です」

モーリ、と名乗った男性が指さした先には、広場の一角を占める大きなテントが立っていた。

「旅の方とお見受けしますが、少々お時間よろしいでしょうか？」  
歌劇団と言うと、歌や踊りなどを見世物として各地を渡り歩く劇団の事だ。

おれは見た事がないけれど、噂には聞いた事がある　非常に煌びやかで華やかなその舞台を見ると二度と忘れられなくなる、と。

「ねえ、アレイさん」

行こうよ、と言おうと思ったのに、アレイさんはため息でもっておれの言葉を分断した。

「どうせ止めても行くと言っただろう？」

さすがアレイさんだ。

嬉しくなって、思わず微笑んだ。

### SECT・3 歌劇団ガリゾン

モーリ、と名乗った歌劇団の座長は、おれたちをテントの中へと迎え入れた。

外から見たとおり、いや、それ以上に広大な空間を有するそこでは、真ん中に大きく丸いステージが置かれており、周囲を取り囲むようにして何重もの客席が取り巻いていた。階段状になった客席にはおそらく1000人近くを収容する事が可能だろう。さらに、ステージを彩る色とりどりのカーテンが翻り、華やかな照明が床や柱に刻まれた複雑な紋様を照らし出す。

豪華というよりも荘厳な印象を受ける雰囲気圧倒された。

「……すっげ」

思わず口をぽかりとあけて外から見るよりずっと高い天井を見上げた。

その瞬間、ステージの照明が一斉に点灯した。

思わず釘付けにされたおれたちの目の前に、鮮やかな衣装を纏った踊り子が舞い降りる。

すべての光を一身に浴びた踊り子は、周囲の視線を一斉に引きつけた。

そこへ、舞台から美しい声が響く。

「フレスヴェルクの丘に 朝露が輝く

あの丘でフィヨールが 真実の愛を教えてくれた

愛を忘るる事など出来はしない

愛しきフィヨールのためならば

死など怖れず 命を捧げよう」

緩やかに響いたのは、北の大国ケルトの民謡。

生まれの違いで引き裂かれた恋人が相手を想い唄ったのだという。美しい旋律と、どこか悲しい響きに、胸がぎゅっと締め付けられ

た。

細くしなやかな手足を惜しげもなく晒して、踊り子はくるりくりと舞った。鮮やかな衣装を翻し、身を飾る宝石を光に煌めかせながら。

どこからともなく聞こえる伴奏は、きつと耳でなく心が捕えた音なのだろう。

たった一人の踊り子の姿に、心が震えた。

唄うたいの愛の深さに胸が締め付けられ、思わず隣にいたアレイさんの袖をきゅっとつかんでいた。

歌が終わり、踊り子はゆっくりと優雅に一礼した。

澄んだ青い瞳、雪のように白い肌　ケルト人の特徴をよく反映した彼女は、整った顔に微笑みを浮かべ、こちらに笑いかけてきた。一緒に舞台を見ていたモーリは軽く拍手しながら彼女に笑い返す。

「やあ、ルウナー。今日も美人だね」

「貴方のストレートなお世辞は聞き飽きたわ、モーリ」

踊り子は肩をすくめた。

それよりも、とおれとアレイさんを物色する。

「誰なの？　まさか、またその辺で拾って来たんじゃないでしょうね」

踊り子さんは思ったよりも気の強いヒトみたいだ。

腰に手を当て、眉根を寄せてモーリを怪訝な表情で見た。

「そうなんだ、新しい演目にぴったりだと思わないか、ルウナー」

「……まったく、貴方って人は……」

ルウナーと呼ばれた踊り子は、大きいため息をついた。

モーリは対照的ににこにこ笑いながらおれたちの方を見た。

「彼女はルウナー。この歌劇団『ガリゾント』の歌姫です」

「ルウナー＝ミタールよ。初めまして」

にこりと微笑んでお辞儀をした踊り子は、唄った時と同じ、美しい声で名を告げた。はきはきとした口調に似合う、利発そうな女性だった。歳はおれと同じくらいだろうか。

おれも女の子の中に入れば大きい方なんだけれど、ルウナーはそれよりさらに拳一つ分くらい大きかった。それも、顔が小さくて手足が長く、すらりとしているから遠目に見るともつと背が高く見えるだろう。

透き通るような青い瞳を見て、育て親に習った『行儀のいい挨拶』を早速実践する。

「はじめまして、ルウナーさん。おれ、グレイシャー＝ロータスといます。よろしくお願いします!」

「グレイシャーね。貴方、私と同じくらいの年かしら? 私のことはルウナーでいいわよ」

「んじゃ、おれのこともグレイスって呼んで!」

そう言うのと、ルウナーは少しだけ首を傾げた。

その仕草がたまらなく愛らしい。

「グレイスって、自分のこと『おれ』って言うのね。こんなにきれいなのに、変なの」

「そう?」

ずいぶん前からそうだからあんまり気にしていない。アレイさんもやめろって言わないし。

育て親はずっとやめろって言うていたけれど。

「それに、さつきは同じくらいの年に見えたのに、話してみるとなんだかすごく年下に見えるわ」

「んー、そう?」

「お前は阿呆の鳥頭だからな」

アレイさんが目も合わせずにぼそりと言い放った。

言い返そうと見上げたが、文句を言う前にルウナーの可愛い笑い声が聞こえた。

「わ、笑わないでよ、ルウナー」

「ごめんなさい、グレイス。ええと、その方は? 兄妹……には見えないわね。貴方の恋人かしら?」

「ん、恋人って言うか……えと」

別に、口に出す事に抵抗があるわけじゃないんだけど、未だに現実離れしていて、口に出すのを妨げていた。

「名乗り遅れた……ウォルジェンガ」ロータスだ」

少し躊躇っていると、ため息をつくような調子でアレイさんが告げた。

「ロータス？」

ルウナーがびっくりした顔でおれとアレイさんを交互に見た。

おれが名乗ったのは『グレイシャー』ロータス』そして、アレイさんは『ウォルジェンガ』ロータス』 兄妹ではないのなら、結論は一つしかない。

「……結婚、してるの？」

「ええと、ん……はい」

うわあ、改めて口に出すとすごく恥ずかしいんだけど。

確かにおれとアレイさんは2年前に結婚してるし、実は遠くに置いてきた子供もいる。そろそろ2歳になる、男の子と女の子の双子だ。

それは紛れもない事実なのだが、わけあって未だに夫婦、という関係には違和感があるのだった。

「そうなの、とっても素敵ね！」

「あ、ありがとう」

それでもにこりと微笑んでくれたルウナーが可愛くて、おれも一緒に笑ってしまった。

歌姫ルウナーと団長のモーリを交えて談笑していると、ステージでは打って変わって剣舞の練習が始まった。

剣舞には、本物の剣技とはまた違った美しさがある。魅せるために作られた派手な動きは、戦いには向かないがどこか踊りに似ている。

それでもおれは、実用を兼ね備えた本物の剣の方が好きだ。生き残るため、自らの大切な物を守るために振るわれる剣の美しさの方

が、おれの心を捕えて放さない。

ふいとアレイさんを見上げると、眉間のしわの数が減っていた。天才的な剣技を持つ彼も、剣を使った舞踏は気になるらしい。

「アレイさんの方がもっと綺麗だよ？」

思わずそう言つと、彼は綺麗な顔を引きつらせて何とも言えない表情を見せた。

本当に、心の底からそう思ってるんだけど、信じてもらえてないのかな？

そう思つた時、歌劇団の団長を名乗つたモーリが唐突に切り出した。

「ウォルジェンガさん、グレイシャーさん。お二人にお願いがあります」

「……何だ」

アレイさんは、いつもおれに敬語を使えと口を酸っぱくして言うくせに、自分は敬語を使おうとしないんだ。

それが理不尽でならない。

「私たち歌劇団ガリゾントは、今回、この街でケルトの伝説を舞台にしようと思っています」

「ケルトの伝説って？」

「言うなれば、セフィロト国で言う天使たちにあたる、私達ケルトの民が信仰する『王族』と呼ばれるモノの紡ぎ出す物語です」

「へえー」

何処の国にも、セフィロト国の天使のように信仰の対象があるのだろうか。

いつか、そんなモノたちに会ってみたいと思うのは、おれの我儘だろうか。

「そこで、お願いします」

モーリが身を乗り出した時、アレイさんにはだいたいの次の言葉が予想できていたんだろう。

もともとそんなによくない目つきがさらに不機嫌さを増して、モ

ーリを睨んだ。

アレイさんの極寒の視線を浴びながらも動じず、にこにこ言い放ったモーリはすごいと思う。あの眼を向けられながらワガママを言うのはとっても難しい事だからだ。

「私達の歌劇団の次の演目で、舞台に出ていただけませんか？」



## SECT・4 戦女神フレイア

ひよい、と下から表情を覗き込むと、アレイさんは、それでも何かを考えているみたいだった。

どうしたんだろう？　いつもなら、すっぱりと断ってしまいそうなもののに。

「……考えてみよう」

「うえっ?!」

思わず変な声が出た。

なだめるように、アレイさんの大きな手がおれの頭を撫でていった。

きつと何か考えがあるんだろう、だとしたら黙ってた方がいい。

「本当ですか？」

承諾したわけではないけれど、アレイさんが一蹴しなかったことで、モーリはぱつと顔を輝かせた。

するとアレイさんは、いつものように無愛想な顔をしておれを見下ろした。

「おい、くそガキ」

「ガキって言うな」

「お前はここに残って詳しい話を聞いて来い。俺は先に戻る」

「えーっ？　それはひどいよ、アレイさん!」

思わず言い返したのに、アレイさんはまるで聞こえていないかのようにすたすたと去っていく。

モーリが慌てて後を追いつ、アレイさんに話しかけているのが見えた。

そんな二人の後姿を見送りつつ頬をふくりましたおれを見て、ルウナーがくすくすと笑う。

「じゃあ、私がこのテントの中を案内しましょうか、戦女神<sup>フレイア</sup>？」

「フレイア……?」

「ええ、次の演目で重要な役目を負った王族の一人よ。『戦女神  
フレリア 戦では全軍の先頭に立つ勇猛な剣士、そして、すべて  
の男性を虜にしたとされる美しい女性なの』」

「へえー、きつときれいなヒトだったんだろうね!」

「ええ、そうね。ケルトでは最も愛される王族の一人よ」

戦女神とも呼ばれる、万人を虜にしてやまない、絶対に揺るがぬ  
精神を持つ美しい女性 おれは、そんな人を一人だけ知っている。

「もし貴方がよければ、フレリアを演じる事になると思うわ」

「おれがそのフレリア? 似合わないよ、そんなの」

それが似合う女性は、もうこの世にいない。

「ふふ、でもきつとモーリはそのつもりよ。ウォルジェンガ、と言  
ったかしら。彼にはフレリアの兄、豊穰神フレイを当てる気だわ」

「そのフレイ、っていうのもその……『王族』の一人なの?」

「ええ、今から200年前、ケルトの革命があつただけけれど、そ  
の時に多大な貢献をした少女リオート」シス「アデーインに助力し  
たとされるのが、その豊穰神フレイと戦女神フレリアの兄妹だった  
と言われているわ」

ルウナーはおれを伴って歩きながら、ゆつくりと話してくれた。

「今回の演目は、その革命少女リオートを主人公にした、革命の物  
語なのよ」

「じゃあ、ルウナーがそのリオートを演じるんだね」

「ええ、そうよ」

にこりと笑ったルウナーは、可愛らしいけれど、どこかに芯の通  
った強さを持つ魅力的な女性だ。

「こんなに可愛らしい戦女神なら大歓迎だわ、グレイス。私からも  
お願い。一緒に、舞台に出てみない?」

舞台。

鮮やかに、煌びやかに、美しく、灯すように。

さっきのルウナーみたいに、おれもあんな風に踊れるかな?

「うん、おれも、やってみたい」

にこつと笑ってそう言うと、ルウナーは本当に華綻ぶように微笑った。

あれれ、アレイさんは『考えてみる』って言ったのに、もしかしてこれは、おれが勝手に引き受けちゃったことになって、後で怒られちゃったりするのかな？

ま、いいか。

アレイさんは、おれがやりたいようにやっても、ため息をついたりいくらかお説教したりするだけで、ぜったいに『おれを見捨てたりはしない』それは、彼の誓いだから。

おれはその誓いを信じているし、彼がその誓いを破ることなんてないだろう。

「行きましよう、グレイス。案内してあげるわ！」  
ルウナーがおれの手をとって、ひく。

うん、ま、アレイさんには後で謝ればいいか。

「でもさ、おれに出来るの？ 踊りも歌も、ぜんぜんやったことないよ？」

そういえばそうだ。なんでモーリはおれたちに声をかけたんだろう。全く芝居なんて経験ないのに、どうして誘おうと思ったんだろう。

どうして、と、ルウナーに聞くと、彼女は少し首を傾げ、でも、すぐに答えてくれた。

「きつと、モーリには貴方たちがフレイアとフレイに見えたのよ」

「……？」

その言葉の意味が分からずに眉を寄せると、彼女は笑いながら続けた。

「私にも最初、そう見えただから」  
「やっぱり分かんない。」

「豊穡神フレイと戦女神フレイア 彼らは王族。人間ではない存在なの。それは見た目でもあるし、演技でもある。でも、それより何より、持っている魂がとっても重要なもの」

「魂？」

「そう。そこにいるだけで視線を集めてしまう存在感、何者にも屈しない、凜とした空気を背負っている。貴方たちには、他の人にはない何かがあるのよ。私はぜんぜん武道に詳しくないから分からないけれど、きっと強いんでしょう？」

「ん……まあ、それなりに」

腰に差した二本のショートソードをマントの上から撫で、確認する。

「美しいのよ、グレイスも、ウォルジェンガさんも。その正体がいいたい何かは分からないけれど、そこに在るだけで人の心を揺さぶる存在なの」

ルウナーは真剣で、とてもおれをからかっているようには見えなかった。

でも、そんな風に言われるとすごくすぐつたい。

「おれはそんなにすぐくないよ」

「ふふ、私は思った通りに言っただけよ。きっと二人とも、舞台に映えるわ」

「そうなのかなあ？ アレイさんはともかく、おれはきっと違うよ」  
そう言つと、ルウナーは首をかしげた。

「グレイスはウォルジェンガさんのことを『アレイ』って呼ぶのね」  
「あ、うん。アレイって、ウォルの……ウォルジェンガの昔の名前なんだ。ちょっとわけがあつて名前が変わっちゃったの。でも、詳しくは言えないんだ」

「そうよね、グレイスだって戦争を乗り越えたんだもの、たくさん  
のことがあつたわよね……ごめんなさい」

「大丈夫だよ、気にしないで」

おれとアレイさんの大罪の証を残しているのは、悪魔の紋章以外にはもうこの名前だけだった。

ラックⅡグリフィス、そしてアレイスターⅡクロウリー。この名  
でセフィロト国全土に指名手配されている。おれがグレイシャーⅡ

ロータス、アレイさんがウォルジェンガ「ロータスを名乗るのには  
そういう理由があったのだ。

そこで、ふと周りを見渡すと、いつの間にかテントの外まで出て  
いた。

あれ、いつの間に。

と思つてきよるきよると、少し離れたところで剣を交える二  
人の姿が目に入った。

さっきまで舞台上で剣舞を披露していた二人だ。どうやら、舞いだ  
けでなく剣術そのものの心得もあったらしい。

「ね、ルウナー、あの二人の所に行つてみたいな」

いいわよ、と笑つたルウナーの手を引いて、打ち合う二人の青年  
の元へと駆けた。

近寄つて行くと、二人は剣を納めてルウナーに向かつて頭を下げ  
た。

「二人とも、今日も元気ね。仲よくしてる？」

「ルウナー嬢、オレっちとこいつと一緒にしないでつていつも言つ  
てるじゃん！」

「……全くだ」

二人は即刻言い返してきた。

「こいつよりオレっちの方が百倍、上達してるもんねっ」

金髪に黒のニット帽をかぶつた方の青年が腰に手を当て、隣に佇  
む紺色の髪の青年を指す。

ストレートの藍色髪で右目を隠したもう一人の青年は、特に表情  
も見せずちらりと睨んだだけだった。眠そうにしているのは気のせ  
いだと思つが、なぜだか眩しそうに少し目を細めていた。

二人とも舞台衣装と思われる紅の衣に身を包んでいた。

「相変わらずね、フェリス。シドも、言い返していいのよ？」

「馬鹿に返す言葉はない」

黒髪の方　おそらく、シドは愛想の欠片もなくぼそりと言いつつ放った。

それを聞いた金髪黒ニツトのフェリスは、間髪入れずに言い返した。

「言つとくけど、それオレっちの台詞だからねー?!」

「ほら、二人とも、喧嘩しない。モーリが連れて来た『戦女神』<sup>フレイア</sup>を紹介するわ」

ルウナーの言葉で、二人の視線が一斉にこちらに降ってきた。

それを見てにこりと笑いかける。

「はじめまして、グレイシャー」ロータスです。よろしく願います!」

「かーわいい娘じゃん。オレっち、フェリス。今回はたぶん、革命少女リオートが恋慕した將軍、サヴァール」ヴァイナーをやると思うよ!」

ネコみたいなセルリアンの瞳は、笑うときゆつと目じりが上がって、ホントに人懐こいネコみたいだった。

「フェリスか。よろしくね! おれの事はグレイスって呼んで。それと、えーと、シド? だっけ。よろしく!」

まるでアレイさんのみたいにさらさらの髪を少し揺らして、シドも会釈した。

二人とも、歳は20歳前後だろう。

さつき見ていた限りで、剣を扱う事にはかなり慣れているようだった。剣舞だけでなく、普段から剣術の稽古をしているはずだ。

「ねえ、フェリス、シド。せっかくだからさ、稽古、一緒にしない?」

そう言いながら、ばさりとマントを取り去った。

「えっ、グレイス、剣使えるの? 危ないよ?」

「だいじょうぶ、少なくとも、おれは戦争前から剣を振ってるよ」

両腰のショートソードをすらりと抜いて構えて見せると、二人は声を失った。

「だっておれは、『フレイア戦女神』なんだぜ？」

## SECT・5 『ケテル』

シドとフェリス、それにルウナーは一瞬声を失った。

しまった、ちよつと脅かし過ぎたかな。

どうやらおれは、自分で思ってるよりもちよつとばかり強いらしくって、それをあんまり悟らせるなとアレイさんは口を酸っぱくして言っただけだ。

「何者だ」

シドがぼつりと呟き、おれへの警戒心をあらわにした。

対照的にフェリスは嬉しそうに笑った。

「へっへー、カッコいいじゃん、剣も使える美少女なんて！ お手合わせ願えますか、戦女神<sup>フレイア</sup>？」

「いいよ」

アレイさん以外の人と組手するのは久しぶりだ。

でも、鍛錬は欠かしてない。

ルウナーとシドから距離をとり、長剣を手にしたフェリスと向かいあった。

おれは、両手のショートソードを強く握り、古体術の構えをとる。

「珍しい武器と構えだねえ、ラック。そんな型は始めて見たよ！」

「剣はほとんど独学のこたませ流派なんだ……師匠はいるけどね」

今は亡きグリモワール王国で悪魔騎士とまで呼ばれた人と、魔界随一の剣士と呼ばれた悪魔、その二人が師匠だ。

とてつもなく厳しく、優しく、そして強い彼らは、おれの師匠であり、目標でもある。

「じゃあ、いくよ」

この緊張感が心地よい。

相手と対峙し、見合い、間合いをはかるこの一瞬。駆け引きの中にある、張り詰めた空気。



その空気の中で、おそらくフェリスが自ら仕掛けてくる事はないだろう、と判断した。

きつとそれは、おれの見た目に理由がある。見た目だけならどこにでもいる普通の女の子に見えるのだから、その容姿で相手を油断させるのも一つの戦術だ。そう言ったのは、旅を共にする仲間であり、長い生涯を共にする伴侶であり、また自分の剣の師匠でもある彼だったが。

先手必勝。

「はっ」

短い気合いと共に地を蹴った。

体格差による間合いの違いを考慮し、一気に距離を詰める。

思いもよらなかったであろう速度で飛びこんだおれに動揺したフェリスは、それでも横にステップして初太刀を避けた。

一步、フェリスが退く。

長剣の間合いをはかるための一步だ。

もしアレイさんだったら、おれが一足で突っ込んでくることはお見通しで、すぐにカウンターが飛んでくるのだけれど、どうやらフェリスは様子を見ているらしく、間合いをきつただけだった。

常に自分より強い相手と闘ってきたおれの中に、『手加減』という文字はない。

戦闘だけでなく、普段の稽古でさえも自分より数段上の腕を持つアレイさんとはかり組手をしている。時にはマルコシアスさんが教鞭をとるけれど、どちらも本物の剣士で、未熟なおれに対してもちゃんと手加減して稽古を付けてくれていた。

とても恵まれているのだと分かっている。

そして、おれは今、それがどんなに難しい事なのか、今ようやく思い知っている。

手にしているのはショートソードだけれど、この手合わせで刃を使うのは論外。かといって打撃も危険だ。

だとしたら、どう攻撃しようか。

困惑が伝わったのか、おれに剣を向けているフェリスがわずかに剣先を下げて笑った。

「困ってるみたいだねえ、戦女神<sup>フレイア</sup>」

「うん、怪我させないようにするにはどうしたらいいかなって」

あまりにこれまでの敵と違い過ぎて 敵？ 敵だって？  
違う。

フェリスは敵じゃない。

はたとその事に気付き、おれははっとした。

「あー……そっか」

だからうまく戦えないんだ。

フェリスは、敵じゃない。刃を向けるべき相手じゃない。

ようやく納得して、腰の鞘にショートソードをおさめ、徒手空拳の古体術の構えをとる。

「え？ 何？ 戦線放棄？」

「違うよ。これはフェリス、おまえを傷つけないためだ」

肩をぐるんとまわして、拳を突き付けた。

複雑そうな表情をしたフェリスは、さすがに丸腰の相手に斬りか  
かれないと思っただのか、シドの持っていた木刀に持ち変えた。

「こい、フェリス」

「怪我しないでよ、グレイス」

余裕の笑みで、フェリスは勢いよく木刀を振った。

手元を見ながら視界の隅に木刀をとらえ、懐に飛び込んで腹部に  
軽く掌底の一撃。

さすがによく鍛えてあるので、軽くよろけただけだった。

が、その攻撃の速度に、フェリスの気配が変わった。

「油断していると、フェリスの方こそ怪我するよ」

「……そうみたいだね」

フェリスの打ち込み速度が変わった。

素手で剣を相手にする時は、間合いを詰めた方がいい。

フェリスの剣筋を読み、紙一重で避けながら懐に飛び込んだ。

左手の籠手で木刀を横から弾き飛ばし、帰ってきた刃は完全に見切り、しゃがんでかわした。

立ち上がる時の勢いを使ってそのままフェリスの顎を下から掌底で打ち上げる。軽く当てたつもりだったが、フェリスはそれで体勢を崩した。

その体勢の崩し方に、ふと違和感を覚える。

さっきはこんな程度の衝撃でよろけたりしなかったはずなのに？

「……」

一筋の違和感、しかし、そんなものにかまけている余裕はない。

両の拳を強く握りしめ、自分から突っ込んだ。

警戒したフェリスは冷静だった。

おれの力を利用して倒そうというのだろう、突っ込んだのに合わせて木刀をまっすぐに突き出した。

お前の攻撃は真っ直ぐだな。

彼がいつも口を酸っぱくするほど繰り返した台詞が脳裏をよぎった。

飛んできた切っ先を体をひねってかわし、その回転を利用して大きなモーシヨンで顔に踵を打ちこむが、さすがに後ろにステップしてかわされた。

が、そこは計算済み。

そのまま軸足を浮かせ、蹴りの軌道を変えて木刀の刀身を蹴り飛ばした。

驚いたフェリスの顔。

おれは、着地と同時にフェリスの足を払っ

「?!」

その瞬間、凄まじい殺気を感じて、おれは一瞬にしてその場を飛び退った。

全身を射抜くような激しい視線。

その視線から逃れ、距離を置き、離れたところからおそるおそるフェリスの顔をあげた。

「うわあ、びつくりしたつ。急に視界から消えるなよ、グレイス！」  
そこには、先ほどと同じようににこにここと笑うフェリスの姿。  
何だろう、この違和感。そして殺気と、敵意

「じゃあ、そこまでにしましょう」

ルウナーの声でなんとか身体の呪縛は解けたけれど、まだ心臓が  
ばくばくと鳴り響いている。殺気の残滓が全身を震わせる。

あんな殺気を受けたのは、戦争の時代だ。

フェリスは、真紅の舞台衣装についた土をぱたぱたとはたいて落  
とし、手にしていた木刀をシドに返した。黒のニット帽を、少し深  
めにかぶり直していた。

猫のようなセルリアンの瞳は、変わらずキラキラと光っていた。

「ねえ、ルウナー嬢、グレイスもここに泊まるの？ 女性部屋、残  
ってる？」

「グレイスは、素敵な旦那さんが宿で待ってるのよね」

「え、なに、グレイス、結婚してるの？！ 歳はいくつなの？！

旦那さんってどんな人？！」

「えーと、結婚してるよ。んー、2年前かな？ だから今年で23

歳くらいで……」

「23歳？！ オレっちより5つも年上じゃん！」

しどろもどろと返答していると、詰め寄るフェリスの後ろ襟を、  
シドが掴んで引き戻した。

「落ち着け、この馬鹿」

「そこ引つ張んなよ、シド！」

じゃれあうような二人を見て、ルウナーはくすくすと笑った。

「やっぱり二人とも、仲良しじゃない」

もちろん、フェリスとシドが間髪いれず反論したのは言うまでも  
ない。

その後も、たくさんの人に挨拶をして、大きなテントの中を隅々

まで歩き回って。

明日もまたここへ来るという約束をして、おれは歌劇団『ガリゾーント』のテントを離れた。

座長のモーリ、歌姫ルウナー、それに剣舞をしていた黒ニットの金髪フェリスと、藍色髪のシド。

楽しくなりそうだ。

わくわくする気持ちを抱えながら、おれはアレイさんの待つ宿への道を急いでいた。

が、大通りを横切って行こうとすると、大きな人だかりができていて、すんなりとは通れそうにない。朝は市をやっているから仕方がないとして、なぜこんな昼も過ぎた夕刻近くに？

「ねえ、何かあったの？」

隣にいたおじさんに聞くと、彼は興奮した様子でこう言った。

「何かあったの、だと？ いまこの国境都市リンボに、新しく神官セライラになったケテル様がいらしてるんだよ！ 本当に突然の訪問だったが、一目見たいもんだ。なにしろ、天使様の一番近くおわに坐す御方なんだからな！」

ケテルだつて？！

その名を聞いた瞬間、全身の血がざつと引くのが分かった。

光の矢。狡猾な笑みと、金冠、血

ぐらりと身体が傾いた。

心臓の真上に刻まれた、もう治ったはずの傷跡が疼く。

ダメだ。思い出しちゃダメ。

目の前の景色が薄れる。

がくりと膝をついて倒れることだけは何とかこらえた。

呼吸が速い。

「お嬢ちゃん、大丈夫かい？！」

おじさんの声が遠くに聞こえる。

大丈夫だ、大丈夫。あれからもう、4年もたってるんだから。胸のあたりがぐるぐると回る。キモチワルイ。

『ケテル』 セフィロト国で崇拜される、国に使える神官セフィラのうち、一人。天使を召喚することができるといわれる彼らは全部で十人、うち、ケテルが召喚するのは天界の長とも呼ばれる強大な天使、メタトロン。

そして、おれの大切な人の仇でもある。

人だかりの向こう、かすかに途切れた群集の隙間から、真っ白な神官服が見えた。

## SECT・6 国境を越えて

大きな音で心臓が鳴り響いている。

見つかつてはいけない。

だって、おれもアレイさんも、セフィロト国から追われる大罪人なのだから。

疼く左胸を右手でぐっと抑え込み、唇をかみしめて顔をあげた。  
逃げなくちゃ。

まとったマントの裾を握って、人だかりにくるりと背を向けた。

「いいのか？ ケテル様に会えるなんて、一生に一度あるかないかだぞ？」

後ろからおじさんが声をかけてきたけれど、一生に一度どこか会いたくもない2度目・3度目を重ねてきたおれにとって、ケテルとの邂逅はむしろ断固避けるべき事態だった。

と、そこでいったん思考を停止。

おじさんの言葉を思い出す 『新しく神官セフィラになったケテル様が

いらしてるんだよ！』

忘れていた。

おれの知っているケテルはすでにケテルではない。2年前にアレイさんが撃破し、天使の加護をひきはがしてしまったはずだから。

と、いう事は新しくメタトロンと契約した人間がいるんだ。

それはいつたい、どんなヒトなんだろう？

「どんなヒトなの？ 新しいケテルって」

おじさんはおれがケテルに興味を示したことでご満悦だった。

聞いてもいないのに、ぺらぺらとしゃべりだす。

「今回の神官様は特別だ。国家騎士だった方がメタトロン様に見初められ、契約を行ったんだと！ だから、親兄弟もいる、人生も持っている、本当に新しい神官様さ！ 何てことだろうね、神官様が私たちと同じように生きているなんて、まるで夢のようだ！」

まるで本当に夢でも見ているような恍惚とした表情で、そのおじさんは語った。

「国家騎士が神官に……?!」

本来、神官は過去を持たず、親兄弟も持たぬはずだから……それは、ただ過去を消し、親兄弟の記憶からも消してしまっただけのことなのだけだ。

セフィロト国の人たちにとって、それは神官が特別である証なのだ。

「じゃあきつと新しいケテルは強いんだろうね」

先頭に不慣れだった前のケテルとは違っただろう。

「ああ、そうだろうな。何しろ、若くして国家騎士団の副団長だった方だ」

「へえ、すごいんだねえ。まるでアレイさんみたいだ」

「アレイサン? 誰だい、それは」

「あつ、うっん、なんでもないっ!」

あわてて首を横に振り、

「ありがとう、おじさん」

人ごみのはるか向こうに、純白の神官服を確認しながら、おれはおじさんに礼を言っただけでその場を立ち去った。

グリモワール王国時代、弱冠20歳にして炎妖玉騎士団の部隊長を務めていた彼が、悪魔と契約してレメゲトンになったように、新しいケテルは騎士としての心と力を持ちながらにしてセフィラと成った。

今はまだだけれど、いつか相対した時、きっと強敵になりうるだろう。

早くアレイさんに会って伝えなくちゃ。

いや、こんな情報、アレイさんならとくに知っているだろうか?

「アレイさん!」



大きな音を立てて宿の部屋の扉をあけると、いつもにも増して不機嫌な様子のアレイさんが迎えてくれた。

「何だ、騒々しい。部屋に入る時くらい静かに帰ってこられんのか、お前は。今年で幾つになると思っている？」

「23歳だよ。いいじゃん、そんなこと！ それより、もっと話したいことがあるんだよ！」

窓の横あたりにもたれかかっているアレイさんに詰め寄り、顔をぐいっと近付ける。

近くで見るとアレイさんの眉間にはますますしわが寄っていて、不機嫌さが前面に押し出されていた。普通のヒトは見分けられないかもしれないけれど、ずっと一緒にいた自分にはわかった。こんなにも不機嫌なことは珍しいくらいの不機嫌さだ。よっぽどのがあつたに違いない。

一瞬でケテルのことを忘れ、首をかしげる。

「何かあつたの？ アレイさん」

「何も無い」

「じゃあなんでそんなに不機嫌そうなの？」

そういうと、アレイさんはひどく驚いた顔をした。

けれど、なぜだか分らなかつたけれど、そのすぐ後には不機嫌さが一瞬で瓦解して、それこそ本当に珍しいことに、優しく笑った。

まさか笑ってくれると思わなかつた。

「本当にお前は……変な奴だな」

アレイさんは、もたれかかっていた壁から上体を起こし、ぽん、とおれの頭に手を置いた。

そして、ふう、と小さくため息をついてから口を開いた。

「つい先刻、『ケテル』と遭遇した」

「あっ！」

そう、おれもそれを報告したかつたんだ！

アレイさんは、大きな声を出したおれをちらりと見ただけで、話を続けた。

「新しくケテルが就任したことは知っているな？　これまでと違い、過去を記憶し、国家騎士という前歴も持つ異例のセフィラだ」

「あ、うん、実はさっき聞いたんだけどね」

そう答えると、アレイさんは眉間にしわを寄せた。

ああ、やっぱりこれは有名な話だったらしい。もしかすると、いつかアレイさんの口から話題として出ていたのかもしれない。

そんなおれの考えることなんてお見通しなんだろうか、アレイさんはもう一度深いため息をついて、その息と一緒に告げた。

「あれは……危険だ」

「危険？」

「先程、ケテルと遭遇した」

「あ、おれも見ただよ！」

「違う。行幸を見たわけではない、あれは、俺とお前に会いに来たんだ。道の真ん中で祀り上げられていたのは影で、本人は堂々と俺に話しかけてきた」

「！」

思わず息をのんだ。

ケテルが、おれたちに会いにきた？

「何を考えているかは不明だ。が、今回のケテルは前任のヤツとは大違いだ。気配で俺とお前を探し出すことができる」

「えっ？　じゃあ」

もう逃げられないんじゃない……

「ケテルは、俺達を捕まえる気などない」

「……どういうこと？」

「分からん。もし本気でヤツが俺達を捕える気なら、一人で俺に接触するはずがない。何より、ヤツ自身が『捕える気はない』と言った」

おれとアレイさんは4年前に終結したグリモワール王国とセフィロト国の戦争で、セフィロト側に多大な被害をもたらした戦犯として、第一級の指名手配犯となっている。

国の要であり、また、悪魔の力を使うおれたちと唯一対等に戦えるセフィラの長であるケテルが、おれたちを捕える気がないとは、いったいどういう事なんだろうか？

全くわからない。

アレイさんが不機嫌だったのも、それが分らなかったからだろう。アレイさんにわからないことをおれが考えたって無駄だ。

「ケテルが本気かどうかは別にして、居場所がヤツに知れた以上、早くセフィロトを出なくては」

「……そうだね」

いったいアレイさんは、ケテルとどんな話をしてきたんだろう。

同じように騎士出身で、唐突に人の持ちえないはずの天使の力と悪魔の力を持った二人。

セフィラとレメゲトン。

親近感を抱いたりするんだろうか。それとも、同族嫌悪を感じたりするんだろうか。

おれにはきつと、わからない世界だ。

「おい、くそガキ」

「ガキって言うな！」

いつものやり取りを繰り返し。

「歌劇団はどうだった？」

「あ、うん、それがね、舞台に出るって約束しちゃったよ」

正直にそう言つと、アレイさんの眉間にしわが寄った。

あ、怒ってる。

「勝手に決めて、ごめんなさい」

素直に頭を下げると、アレイさんは大きくため息をついた。

「まあ、いい。どうせそうするつもりだったんだ」

「珍しいね、アレイさん、お芝居とかそういうの、あんまり好きじゃなさそうなのに」

「好きなわけがないだろう」

「だよねえ」

そういうと、アレイさんは、おれの頭をぺしんと叩く。

「分っているなら勝手に決めるな、この鳥頭」

そのままぐりぐりとおれの頭を撫でまわした。

「で？ その歌劇団はどうだった？」

「あつ、すつごく楽しかったよ！ ルウナーは可愛くってね、フェリスとシドは強かったし、モーリさんは優しいヒトでね、リンゴもらっちゃった！」

「……そうか」

少しばかり考えている様子のアレイさんは、ふと、尋ねた。

「もし、俺達が秘密裏にこの国を出たいと言ったら、セフィロト国に通報などせず、手伝ってくれるような人間だったか？」

その言葉で、おれはようやくアレイさんの真意を知った。

歌劇団ガリゾントはもとも北の大国ケルトから来たと言っていた。この国境都市リンボにいるからには、隣国リユケイオンへと向かう可能性が高い。

もし、その一行にまぎれることができたら？

二人だけで国境を超えるより、ずっと成功する確率が高いだろう。思わず、にこりと笑った。

「うん、きつとモーリとルウナーは手伝ってくれると思うよ！」

## SECT・7 リオート「シス」アディーン

次の日、おれとアレイさんは、揃って歌劇団のテントへ向かった。朝市が開かれている大通りを過ぎ、中央広場へ。

中央のミカエル像は昨日と変わらずそこに佇んでいた。朝日を浴びて柔らかな乳白色の滑らかな肌を惜しげもなく晒しながら。

「グレイス！」

「あつ、おはよう、ルウナー！」

駆け寄ってきた歌姫に笑いかけると、ルウナーも笑い返してくれた。

「ウォルジェンガさんも、来てくださってありがとう。モーリも喜ぶわ」

「……こいつが勝手に決めた事だ」

アレイさんは不機嫌そうに呟いた。

「そろそろ稽古が始まるの。フレイとフレイアが決まってなかったから台詞や場面がいくらか抜けたままだけれど、今日は通し稽古をするってモーリが言ってたわ。きつと、貴方達に見せるために」

「ほんと?!」

「だから、グレイスは客席の方で見ている」

練習とはいえ、歌劇団の舞台を見るのは初めてだ。

わくわくしながらテントに入り、通し稽古が始まるのを待った。

静かなステージに、ぴいん、と張った弦の音が響いてきた。

その旋律に合わせるように、コツリ、コツリと靴音が響いてくる。暗いステージの中に、ふっとルウナーの姿が浮かび上がった。灯りを手にしたルウナーは、視線を上げた。

その真っ直ぐな瞳に、思わず釘づけになる。

「私は、夢を見たのです」

凜とした声。

ルウナーではない。

あれは、この物語の主人公、革命少女リオートⅡシスⅡアディン。

「戦女神フレイアのお声を聞きました。サヴァールⅡヴァイナー將軍の元へ参じ、尽力せよと」

200年前、大国ケルトに革命を引き起こした現ノルディック王家の元へと現れたわずか16歳の少女は、革命軍の先頭に立ち、勝利へと導いた。

その瞬間、舞台がぱつと明るくなった。音楽も、弦一本から重厚なモノへと変化する。

舞台上ではリオートを取り囲む多くの騎士たち。そして、その中心でリオートと見えるのは、巨躯の騎士だった。

巨躯の騎士が堂々とした声で問う。

「面妖な事を。戦女神がお主のような弱き者を遣わすと言うか」

「私はフレイアの意志を確信しております」

ざわりざわりと騎士の間に疑惑が走る。

リオートは、そんな周囲を一掃するように、芯の通った声で告げた。

「必ずや、革命軍に勝利をもたらしてみせます」

押し殺した笑いが漏れる。

このような少女に何が出来るのか、という嘲笑だった。

「幼く、力なき少女よ。戯言はそれまでに、早々にこのサヴァールⅡヴァイナーの元を立ち去るがよい」

取り付く島もない巨躯の騎士は大剣をリオートの鼻先に突きつけた。

「戦女神の名を騙った罪、軽くはないぞ」

「虚言などではありません」

鋭い剣先を突き付けられても、リオートは退かなかった。

「私は戦女神フレイアから宣託を賜りました」

それどころか、ますます鋭い眼光で巨躯の騎士を睨みつけた。

「貴方こそ、サヴァール・ヴァイナー將軍の御名を騙るのはおやめください」

その瞬間、舞台の空気が変わった。

二人の周囲を取り巻いていた騎士たちのざわめきがなくなり、全員が幼いリオートに釘づけになる。

彼女は巨躯の騎士にくるりと背を向けた。

取り囲んでいた騎士たちはリオートの視線から逃れるように一団となって舞台の端へと追いやられていく。

リオートは、その一団ににこりと微笑みかけた。

「サヴァール將軍、私は、貴方に会うために此処へやってきました」  
すっと跪いたリオートは、騎士の一団に向かって手を伸ばした。

「どうか、私が貴方の傍で尽力します事をお許してください」  
すると、騎士たちがいつせいに跪いた。

その中で、一人だけその場に立ったまま跪くりオートを見下ろした人物がいる。

フェリスの演じる、サヴァール・ヴァイナー將軍その人だった。

騎士たちの間を縫って、跪くりオートの眼前に立った。

「配下に紛れていた俺を見つけ出したな、名も知らぬ、幼き少女よ」

「戦女神は、貴方の元に、とおっしゃいました」

「あくまで自分は戦女神の傀儡だと主張するか。いいだろう」

サヴァールは、リオートの手をとった。

「この瞬間から、お前は戦女神が俺に遣わした勝利の刻印だ」

「光栄にございます」

いつしか舞台には、リオートとサヴァールだけが残されていた。

「名乗れ、少女。俺は戦女神の遣いの名を知らねばならぬ」

「リオート・シス・アディーンと申します、サヴァール・ヴァイナー將軍」

舞台暗転。

おれはずっと舞台に釘づけになっていた。

戦女神の声を聞き、サヴァール將軍の元へ向かったリオート。帝國軍との戦いの中で、何度も傷つき倒れそうになるが、いつしか恋慕の情を抱くようになったサヴァール將軍と、夢の中で助力を与える戦女神フレイア、またその兄の豊穰神フレイが彼女の支えだった。そんな彼女の元に、シドの扮する一人の青年が現れる。

ロキ、と名乗った黒衣の青年は、あの手この手でリオートの不安を誘い、革命をやめさせようと画策する。

日々、憔悴していくリオート。

そんな中、サヴァール將軍が病に倒れた。

悲しみに沈むリオートの元に、ロキが再び現れた。

「やあ、リオート。將軍が倒れたって？ よかったじゃないか、これで革命軍もお終いだね」

漆黒の衣を纏い、闇にとける姿で革命軍本部最上階の窓から何の苦もなく入り込んだ。

昨日のシドの様子からは考えられないセリフの多さだった。

「ロキ、貴方はきっと人間ではないのね。だって人間は飛べないもの」

「僕が誰なのか、なんていうのはどうでもいい事さ、戦女神の愛娘リオート。フレイアは、君のサヴァール將軍を助けてはくれないのかい？」

「いいえ、フレイア様は……」

「君はこれほどフレイアのために働いているっていうのに、フレイアは君の為に何もしてくれないの？」

僅かな不安と疑念をえぐりだされ、リオートは揺らいでいた。

言葉巧みに革命をやめさせようとするロキは、少しずつリオート



の心を削いでいく。

少しずつ、少しずつ。

連日の戦闘とサヴァール將軍の病で憔悴しきっていたリオートは、ロキの誘いに傾いた。

「一緒に逃げよう。さあ、リオート」

ロキは手を差し出した。

リオートはその手を

「リオート！」

そこへ、鋭い声が飛び込んできた。

はっとするリオート。

そこには、大きな剣を手にしたサヴァール將軍の姿があった。が、剣を支えに、かろうじて立っている様子だった。

「將軍、お身体が」

「リオート、そいつから離れる」

リオートが舞台の端に寄ると、サヴァール將軍とロキの フェリスとシドの剣舞が始まった。

大剣を振り回すサヴァール將軍、細身の剣でそれを避けるロキ。

激しい音楽が鳴り響き、剣戟が交差する。

どうやら本物の刃がついた剣を使っているらしい。飾り剣ではないようだ。

あんな大きな本物の剣を振りまわすなんて、フェリスは思ったよりも、昨日手合わせした時よりもずっと強いのかも。おれが女だからって、まだ手加減していたんだらうか。

と、思った時だった。

「ここまでだ、ロキ！」

台詞と共に、鋭い殺気が放たれた。

これは、本物だ。本物の殺気

サヴァール將軍の剣がロキを貫いた。  
驚いたロキの シドの表情。

舞台上に、鮮血が飛び散った。

## SECT・8 ルウナーⅡミタール

静まり返った舞台上、最初に動いたのはフェリスだった。

「うつ……うわあああああ！」

絶叫と共に引き抜いた大剣を放り投げ、血に染まった両手で頭を抱えた。

「シド！」

続いて舞台袖から座長のモーリが飛び出してきた。

目の前で起きた惨劇に、ルウナーが放心している。

「動かすな！」

アレイさんが客席から一喝した。

「腹部を貫通している。おそらく臓器にも損傷があるだろう。動かさず、傷口を押えて……引き抜いたせいで出血がひどい。とにかく止血するのが先だ」

長い間、本物の戦場にいた彼だから、きっと処置の仕方もあるのだ。  
「おいこそガキ、そこで放心してる主役をとつとここから遠ざけろ」

「わかった。……ねえ、アレイさん」

別れる瞬間、耳元にこつそりと。

「フェリスに、気をつけて」

アレイさんは、分かっている、とでも言いたげな表情でシドの方に向かった。

おれは茫然としたルウナーの手を引いて舞台を後にした。

フェリスがシドを剣で貫いた。

驚いた顔をしていたけれど、あの瞬間に放った殺気は本物だ。

昨日の組み手の時もそうだったけれど、フェリスはきっと飄々とした仮面の下に、何かを隠しているようだ。

テントの外、中央広場の噴水の縁に座ったところで、ようやくルウナーが口を開いた。

「もう大丈夫よ、 그레이스。ありがとう」

言葉通り、蒼白ではあったが先程よりかなり落ち着いているように見えた。

「大丈夫だよ、アレイさん、お医者さんじゃないけど処置には慣れてるよ。それに、ここは戦場じゃない、大きな街だからきつとすぐにお医者さんに診せられる」

貫いたのが胸じゃなくて良かった。おそらく、シドが直前で殺気を察して無意識に急所を避けたからだ。

出血は多かったが、処置が早ければ命は助かるだろう。

「……少しびっくりしただけよ。大丈夫」

ルウナーは陰りのある笑顔を見せた。

その笑顔で少しほっとした。

どうやら本当に、驚いたという感情が一番大きかったらしい。

ルウナーはすぐに落ち着いたがいまだ処置が続けられているだろうテントへ戻るわけにもいかず、しばらくルウナーといろんな事を話した。

ルウナーがモーリのお父さんに誘われて歌劇団に入り、故郷のケルトを離れた時の事。そのお父さんが病気になって、モーリが団長になった事。

それから苦勞の連続。

でも、大国ケルトを出て各国で巡業するようになって、いろんな国の団員が増えていつて。

「モーリは役者に向いていそうな人を見つけると、すぐに連れて来ちゃうのよ。ほら、昨日、 그레이スとウォルジエンさんを連れてきた時みたいに」

「シドやフェリスもそうなの？」

「ええ。シドは、旧グリモワール国領のトロメオという都市で仲間になったの。フェリスはもう少し前ね、旧王都のユダイスコキユ

ートスで……二人とも、モーリがどこから勝手に連れてきて。この歌劇団に入ってから半年くらいになるかしら」

「へえー。半年であんなに上手になるんだね」

「二人とも、もともと武術の心得があつたのよ。あの二人がいたからこそ今回の演目をやるう、とモーリが言いだしたのよ。フェリスとシドなら、サヴァールとロキの役を演じる事が出来るもの」

「確かにあの剣舞はかなり上手じゃないと無理だもんね」

「お陰さまで、フレリアとフレイの役を出来る人がいなくて困つたのよ。何しろ、王族の役なんて恐れ多くてみな、尻込みしてしまつて。モーリときたら本当に考えなしなんだから」

「それで、おれと……えと、ウォル、に？」

ルウナーはにこりと笑つた。

「そう。今、歌劇団ガリゾントは、セフィロト国を東西に横断して、リユケイオンを通つてケルトに戻る、丸二年以上かけた興業の途中なの。ほら、大きな戦争があつたから、少しでも楽しい気分をわけてあげられたら、と思つて。一生懸命モーリを説得して」

大きな戦争。

セフィロト国が、グリモワール王国を侵略し、喰い尽くした戦争。その爪痕は、まだ各所に残されているはずだ。

「ケルトにも住む場所を失つたグリモワールやセフィロトの民が多く流入したわ。それだけじゃない、戦争で多くを失つた人は本当にたくさんいると思うの。だから、私は少しでも何かしたくつて」

ルウナーの瞳は真剣だつた。

真剣だけれど、その瞳が放つ灯りはとても優しくつた。

「私はリオートみたいに剣を学んでいるわけではないし、革命をする心の強さなんて持つてない、ましてや、戦女神の声を聞く事も出来ない。隣に最強の将軍がいるわけでもない。でも、歌と踊りと、それから演技で、誰かの心に訴える事は出来るわ」

そう言つたルウナーは、まるでさつき、舞台の上で見たリオートのように凜とした眼差しで前を見つめていた。

「私、リオートの役、好きよ。リオートは強いけれど、いつも迷っているの。戦女神のフレリア様は革命の手助けをとおっしゃるけれど、本当にこれでいいのかしら、革命を起こして、たくさんの方の命を賭ける事が、本当にみんな望んでいる事なのかしら、って」

ルウナーは微笑んだ。

「それでも、何かをしようと精一杯に頑張っているリオートの姿は素敵だと思うわ。だから、私も何かを頑張りたい」

「うん、おれもそう思うよ」

リオートだけじゃない、ルウナーもとっても強い。

「グレイスもきつとそうなんでしょう。戦争で悲しい事がたくさんあったはずだわ」

「おれは」

一瞬、言葉に詰まった。

いろんな感情が一瞬でおれの中を駆け抜けていった。

「……うん、おれも、たくさんの方のモノを失くしたよ。おれの力が足りないばかりに取り返しのがない事もしちゃった」

心の底から一番大切だったヒトを亡くした。本物の戦女神のように強く、美しく、気高く、そして誰より優しかったヒト。おれに『ラック』という名前をくれて、職を与えて、生きる場所をくれたヒト。

すでに自分のものでない左腕。そして箒手で隠した右腕には、多くの刻印が刻まれている。

左手の甲に埋まったコインだけではない。この2年で旧グリモワール国領からセフィロト国を横断する旅をする中で発見したコインを破壊、出来る限りで紋章契約を行ってきた証が多く刻まれていた。額にリュシフェル。

左手の甲にラースのコイン。

そして、右腕には5つの悪魔紋章。

両腕に装備している箒手を外してしまえば、目を背けるような状態の腕が姿を見せる。

今のところ、コレを知っているのは一緒に旅をしているアレイさんを除けば、旧グリモワール国領の南端に身を隠している革命軍のトップ、サン＝ミユレク＝グリモワール、そして戦争時には同じレメゲトンだったライディーン＝シンの2人だけだった。

これは、おれの罪の証であり、誓いだ。

左手の甲をぐつと抑える。

革命を起こす事が本当にいいことなのか　リオートの葛藤は、まるでそのままおれが迷っている事を言葉にしたみたいだ。

「だから、すごく嬉しいよ。ありがとう、ルウナー。おれたちみたいに戦争を経験した人の為に、何かしてあげたいと思ってくれて。こんなに遠くまで、本当に来てくれて」

本当に、心の底から嬉しかった。

すごく遠い土地で戦争の傷を知ったヒトが、こんなに近くまで来てくれて。

「おれにはきつと出来ない事だから、ルウナーに頑張ってほしいよ」  
そう言つと、ルウナーはにっこりと笑った。

「大丈夫よ、グレイス。貴方だつて同じ力を持っているわ。貴方もきつと、悲しんでいる人に、少しでも楽しい気分を与えることが出来るはずよ……そうでしょう？　フレイア」

「……おれはフレイアになれるかなあ？」

「なれるわ。だって私やモーリは最初からグレイスが戦女神に見えるたのよ」

「ありがとう、ルウナー」

ルウナーはとってもかわいい。

ルウナーはとっても強い。

ルウナーはとっても……優しい。

「おれ、本当に、ルウナーに会えてよかったと思うよ」

「私もグレイスに会えて嬉しいわ」

同じくらいの年の友達なんて、騎士団で修行してた時にヴィッキ―たちと友達になって以来だったから。

本当に嬉しくて、心から微笑んでいた。

だからきつと、ルウナーにはちゃんと聞けると思った。

「あの、こんなこと聞いていいかわかんないけどさ……」

「なあに？」

「フェリスとシドって仲が悪かったの？」

大丈夫。

ルウナーは強くて優しくて正直で、一生懸命だから、聞いても大丈夫。

ずばり、と聞くと、ルウナーは少しだけ停止したが、すぐに長く息を吐いて落ちついた。

「いいえ、そんな事は……確かに喧嘩ばかりしていたけれど、もともと、グリモワール出身のシドがセフィロト出身のフェリスに対して、あまりいい感情を持っていなかったというだけの話よ。初めて会った時からシドがフェリスと喧嘩を　でも、違う。あの二人は、本当は仲が良かった」

まるで自分自身を落ちつけるように、ルウナーは呟いた。

「あの場面では、偽物の剣を使う事になっていたの。それが、なぜか本物に……」

毎日、剣の稽古をしているフェリスだ。本物の剣の重さに気がつかないはずはない。

そう思ったが、口には出せなかった。

ルウナーがフェリスの事を微塵も疑っていないのが、ほんの短い間に伝わってきたからだ。

「もう少ししたら、戻って様子を見に行こう」

知っている事を、分かっている事を単純に口に出せないのって、何て苦しいんだろう。

あの頃みたいに、思ったままを口に出せたらいいのに。

おれを育ててくれたブロンドの戦女神も、一緒に旅をする言葉少なに自分を盾にする彼も、いつもこんな気持ちなんだろうか。

とても、複雑だ。



大切なヒトを守るのって、やっぱりとっても大変だ。

おれは今更ながらに、自分の事を守ってきてくれた人たちのすごさを思い知った。

## SECT・9 フェリス

テントに戻ると、ステージは白いシートが張られて隔離されていた。どうやら医者が到着してシドの治療を始めたらしい。

ちょうど、両手をシドの血に染めたアレイさんがステージから降りたところだった。

テントには血の匂いが充満している。

キモチワルイ

フラツシユバックの悪寒が全身を包み込み、背筋を冷たいものが駆け抜ける。

むせ返るような血の匂い。

暗闇に浮かぶのは淡く燐光を放つ銀髪

「……お前はまだ外にいろ、くそガキ」

はっとすると、アレイさんの紫の瞳が見下ろしていた。

しまった。血の匂いに充てられてぼーっとしていた。

リュシフェルがおれの記憶すべてを解放した今、過去のフラツシユバックに苛まれることは少なくなっていたが、血の匂いは今でも苦手だった。

先ほどアレイさんが、おれにルウナーを連れ出すよう指示したのは、ルウナーのためだけでなく、おれ自身の為でもあったんだ。

「グレイス、顔色が悪いわ。無理しないで。私はモーリの様子を見に来るから、ウォルジェンガさん、グレイスをお願いね」

「……ん、ありがと、ルウナー」

さっきまでおれがルウナーを心配していたのに、これじゃ立場が反対だ。

しかしながら、ルウナーの申し出は非常にありがたかったので、半ばアレイさんに引きずられるようにして再び外に出た。

アレイさんは、平気か、とか無理するな、とかいう言葉はあんまり使わないけれど、おれのことをいつも一番に心配してくれるのは彼だと知っていた。

外に出て血の匂いから遠ざかり、広場のミカエル像の台座に腰かけた。

道行く人々の歩みを見ながら、心臓の鼓動を少しずつ落ちつけていく。

手に付いていた血を洗い流したアレイさんもおれの隣に腰かけた。遠慮せずその肩にもたれると、多少いやそうな顔をしたけれど振り払うことはせず、小さく一つ溜息をついただけだった。

「……あまりくつつくな」

「いいじゃん」

「ここなら大丈夫。」

「あの、シドとかいう剣士は大丈夫だ。出血はひどいが、見た目の割に内臓の損傷はそれほどない」

「そっか。よかった」

安心して目を閉じると、大きな手がやさしく頭を撫でていった。

「アレイさん、フェリスは何者かな？」

「わからん。どうやらわざと実力を隠しているようだが……お前はそれにも気付いていたのか？」

「んー、なんとなく、だけど、昨日の手合わせで手加減の仕方が不自然だなとは思ってたよ。だから、きっと何か隠してるだろうなと思うってさ」

よろけるはずのない攻撃でわざとよろけて見せたり、最後の瞬間に殺気を放ったり。

強くなったり弱くなったりするちぐはぐな攻撃。

きつとよく考えればすぐに気づけることだったんだ。

「フェリスはなんでシドを傷つけたのかな？」

昨日会ったときは、あんなに仲良さそうだったのに。

あれも全部演技だったというんだろっか？

「シド個人を傷つけたかったのかな？」

「あの瞬間の殺意は本物だった。その、フェリスというヤツは本物の剣を手に行っていることをわかっていて、そのうえで命を奪う攻撃をした」

「どうして……？ シド本人を殺そうとしたの？ それともガリゾーント全体を……？」

「ガリゾーント全体だとしたら、シドが重症の今、あのフェリスというヤツの独壇場だ」

はっとした。

フェリスの殺気を思い出し、背筋が震える。

あれがルウナーに向けられたら？

「戻ろう、アレイさん」

「……その必要はない」

「え？」

アレイさんがおれを庇うように前に立った。

これまでずっと守ってきてくれた大きな背中。

呆けたように見つめた視線の先に、金髪黒ニットの青年が立っていた。

血に染まった將軍の衣装はすでに着替えてしまったのだろう。黒ハインツクにカーゴパンツ、黒ニット帽の下のセルリアンの瞳をキラキラとさせて、フェリスはへらへらと笑っていた。

「二人で揃っていてくれると、オレっちとしては非常に嬉しいねえ」  
アレイさんの背中越しに、フェリスが今まで隠していた敵意が突き刺さって、思わず両肩を抱いた。

最初に会ったときは猫のようだと思ったが、違う。

猫どころじゃない、これは食肉の大型獣だ。しなやかな体で獲物

をしとめる狩人。<sup>ハンター</sup>

悪魔の気配はない。天使の気配もない。フェリスはまぎれもなく普通の人間だ。

それなのに、まるで魔界や天界の住人を目の前にしたときのように震えた。

「フェリス」

声が震えた。

アレイさんがおれたたちの間に割って立ち、眉間にしわを寄せてよく通るバリトンで告げた。

「何の用だ」

肌に警戒の空気がぴりぴりと刺さる。

「ごめんねー、グレイス。かわいい娘は好きなんだけど、オレっちの世界で一番大切なヒトは、グレイスが大っきらいなんだよねー」  
大嫌い。

ダイキライ。

心を抉る言葉だった。

「俺たちが何者か分かっているような口ぶりだな」

「あつたり前じゃん？」

目の前にいるフェリスの表情も動きも全く変わっていなかった。

それなのに、まったく別の人間に見えた。

隠そうとしない殺気、背筋が震えだし、目の前に立つのが恐ろしい。生物としての本能が告げる　この男の前に立つてはならないと。

「いつから？　いつからおれが……『ラック・グリフィス』だって知ってた？」

「んー、最初は半信半疑だったんだけどね。でも黒髪の二人組つて時にちよつと疑っててさー。確信したのは手合わせした時かなあ？」

フェリスはくるりくるりと手の中のナイフを弄ぶ。

「強かったのさあ。オレっちが思わず本気出しそうになるくらいに」  
ぴつとナイフの先をおれに付きつけて、フェリスは笑う。

あの瞬間の殺気は、やっぱり気のせいじゃなかったんだ。

「じゃあ、フェリス。なんで、シドを刺したの？」

「それは簡単さあ。アイツもグレイスの正体に気づいちゃったからだよー？」

「……?!」

シドもおれが『ラック・グリフィス』だって気づいてた?!

「行動が軽率だな、くそガキ」

「ご、ごめんなさい、アレイさん」

よく考えたら、おれはずっとアレイさん、アレイさん、って呼んでた。隠すも何も、もしかするとモーリとルウナーだって気づいてるかもしれない。

「アイツ、悪魔の国の騎士だったからさあ、オレっちの敵だし、邪魔になるし、事故っぽく消しちゃおうと思ったんだよー。失敗しちゃったみたいけどね」

「シドが……グリモワールの騎士?! じゃあフェリス、おまえは何者なんだ?! セフィロト国の追手なのか? すげえ強そうだけど、聖騎士には見えないし」

「うわっ、グレイス、それって結構失礼だよ、失礼なこと言ってるよ。オレっち、そんなにも騎士っぽくない？」

「うん」

素直に返答すると、フェリスは額に手を当てて天を仰いだ。

「ひつでーなあ。これでも頑張ってるんだよ? なにしろ、オレっちの当面の目標って『一般人に溶け込むこと』なんだぜー?」

「一般人で……無理じゃない？」

フェリスが一般人……それは、鳩の群れの中に猛禽を放つようなものだ。

今この瞬間にも、広場には何も知らない街の人たちがたくさんいるのだ。アレイさんとおれに向けられている殺気が、いつ周囲に向けられてもおかしくない。フェリスにはそういう危うさがあった。

「オレっちの努力をさ、そうやって簡単に無にするのってよくない

と思うんだー」

ナイフをくるくる回しながら。

「しかもこれ以上、この歌劇団にいるのは危ないから、また寄生する相手を探さなくちゃいけなくなっちゃったじゃん。ここ、結構居心地よかったのに。ルウナーかわいいし。もう、どれもこれもグレイスのせいなんだよ！」

なんだそれ？！

「だからー、オレっちは今から『アレイスターⅡクロウリー』と『ラックⅡグリフィス』の死体を持ちかえって、褒めてもらうことにしまーす」

弄んでいたナイフを手に収めたフェリスは本気だった。

ヤバイ。

アレイさんがいつでも抜刀できるように構えたのが雰囲気伝わってきた。

「じゃあ、最後に聞いていいかな、フェリス」

「んー？ なにー？」

「フェリスはおれたちの死体を持ちかえって、誰に褒めてもらうの？ 王様？ それともケテル？」

「違うよ。オレっちを育ててくれたのはシアさんだよ。シンシアⅡハウンド。えーと、役職名はなんだっけ……？」

その瞬間、全身の血がざっとひくのが分かった。

シンシアⅡハウンドという名は、忘れ得ぬよう記憶に刻まれているからだ。

ブラックルビー

それは、おれが漆黒星騎士団で修行していた時のこと。その頃、おれと同じ部屋で、同じように鍛錬した女性騎士が3人いたのだ。それが、ヴィクトリアⅡクラーク、メリルⅡファランドル、そして

シンシアⅡハウンドだった。

しかし、シンシアⅡハウンドはグリモワール王国内部に入り込んだ密偵だった。そして、本来の姿である彼女を表す役職名は神官。<sup>セフィラ</sup>

目の前で天使を召喚した彼女に、おれもリユシフェルを召喚して

戦ったのだ。あれは、もう4年も前になるが、今でもありありと思  
い出せる。仲間だと思っていた相手を前に悪魔を召喚し、武器を向  
けることのつらさを。

「マルクトだよ。シンシア」ハウンドの本当の名前」

自分はマルクトだ、と言ったシアの声が耳から離れない。

「一緒に剣を学んだ、おれの友達だ」



## SECT・9 フェリス（後書き）

ブログの右下でこっそりとキャラ人気投票始めました。  
パソコン限定ですが、よかったです。

http://lostcoin.blog.shinobi.jp/  
p/

「あ、そうなの？　言われてみればシアさん、何年か前にリュシフェルの抹殺の為に悪魔の国に潜んでいたことがあるんだよね。その時かなー？」

鋭利な銀色のナイフがずらりとフェリスの手に現れた。

まさか、本気でこの真昼の広場で戦闘を始めようというのだろうか？

それはまずい。周囲の人が巻き込まれる可能性が高すぎる。

「場所を変えるぞ、くそガキ」

アレイさんも同じ考えだったんだろう。

ぱつとおれの手を取ってフェリスの横を駆け抜けた。

「あつ！　逃げないでよー！」

フェリスもちろんすぐに追ってくる。

「ど、どうするの、アレイさん？！」

強く手を引いて駆けるアレイさんに問うと、彼ははっきりと告げた。

「迎撃する。一か八かマルコシアスを召喚する。だから、テントに飛び込んだらお前は少し離れている」

「えっ……？」

驚く間もなく、歌劇団のテントの中に飛び込んだ。

シドはすでに運ばれたのだろう、ホールには誰もいなかった。

モーリは、ルウナーはどうしただろう……？

「お前は先に逃げる。あいつを倒したらすぐに追いかける」

アレイさんはそう言うてくるりとおれに背を向けた。

生半可な態度ではフェリスに勝てない。それはおれにだって分かっている。

でも、アレイさんを置いて逃げることなんて、おれには

「マルコシアス！」

鋭い声とともに、アレイさんの背に大きな翼が広がった。

マルコシアスの召喚。

同時に、黒髪の間から短い角がのぞき、周囲を強大な悪魔の気配が包み込んだ。

「早く行け。俺もすぐに行く」

はつきりとした口調、強い意志を秘めた声。

おれは思わず頷いていた。

「分かったよ、アレイさん……おれ、モーリとルウナーを探して、ちゃんと全部話すよ。全部話して、頼んでみるよ。だから……」

きつと、追いかけてきて。

おれは純白の翼を背負ったアレイさんにくるりと背を向け、フェリスの殺気からも逃げ出した。

話そう。全部話そう。モーリとルウナーを探して、おれのこと、アレイさんのこと、セフィロト国の事も神官に追われていることも、全部話そう。

そして、助けてって頼むんだ。おれの力じゃ、どうしようもないことだから。

背後で、アレイさんとフェリスの武器がぶつかり合う音が響いた。おれはそのまま、モーリとルウナーを探して、テントを飛び出した。

二人はどこへ行っただろう？

考えて、はつとした。

「お医者さんのところだ」

きつと、シドが運ばれていった医者のもとに付き添っていったはずだ。

テントから漏れ出る悪魔の気配を振り切るように、駆けだした。

広場の人に聞きながら街中の診療所にたどり着いた時には、すで

に息が切れていた。

額の汗を箆手でぬぐいながら、診療所のドアをノックした。

「はい」

ぱたぱた、と足音がしてガチャリとドアが開いた。

そこからひよい、と顔を出したのは大きな目をした小さな看護師さんだった。看護師さんのトレードマークの白い帽子は、はるか目線の下にあった。

「何のご用ですか？」

首をかしげた看護師さんに、『行儀のいい挨拶』を実行する。

「こんにちは、はじめまして。おれ、グレイシャー・グリフィスと言います。えと、たぶんさっきおれの友達がここに運ばれてきたはずなんだ。シド、って言うんだけど……」

「ええ、いらしてますよ。でも、お話しできないかもしれませんけど、いいですか？」

「あの、付き添いでモーリとルウナーはいるかな？」

「モーリ、というあの穏やかそうな男性かしら」

「うん、たぶんそう。ルウナーはすごい美人のヒトだよ！」

「ええ、お二人もいらしてますよ」

「ありがとうございます。入っていい？」

「ええ、どうぞ」

その小さな看護師さんはおれを診療所に迎え入れてくれた。

すつとしたお薬の匂いが充満する診療所は小ぢんまりとしていたが、設備はかなり整っているようだった。何より、滅菌された手術室が完備されているのは非常に珍しい。東方から伝わってきた外科手術も行うのだろう。こんな小さな診療所には珍しい。

看護師さんは、細くて短い廊下を案内して、一つの部屋の前で立ち止まった。

「お静かにお願いしますね」

「うん、ありがとう」

ドアをノックする前にひとつ大きく深呼吸。

「よし」

決意すると、目の前のドアノブに手をかけた。

部屋の中では、モーリとルウナーが並んで椅子に腰かけていた。

窓付近のベッドには、藍色髪のシドがぐったりと横たわっていた。

「グレイス。もう大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だよ。ありがとう、ルウナー」

ベッドの中のシドの顔は蒼白で、たくさんの血を失ったことは一目で分かった。

「シドは？」

「大丈夫よ。なんとか命は助かったみたい。回復には……まだかるでしようけれどね」

ルウナーは悲しそうに微笑んだ。

「そっか……」

シドが刺されたのは、おれのせいだったから。

ベッドの脇に跪き、冷たくなってしまっているシドの手を取った。

「ごめんね、シド」

シドの手を握りしめて額に当て、心の底から謝った。おれがここに来なければ、こんなことにはならなかったのに。

こうならなかったために故郷を捨てて、子供たちを置き去りにしてここまで来たっていうのに、おれは、おれたちは存在するだけで周囲の人たちを傷つけることしかできないんだろうか……？

胸の奥にどうしようもない感情が渦巻く。

忘れていた罪が噴き出してくる。

「本当にごめんなさい」

もう一度呟いて、胸が裂けそうな感情を抑えて唇を引き結んだ。

これ以上、シドのような被害者を出すわけにはいかない。

そっと手を離してベッドの上に戻し、おれはモーリとルウナーを振り返った。

「モーリ、ルウナー。二人に頼みたいことがあるんだ」

騎士がそうするように、片膝について敬意を示しながら。

おれははつきりと告げた。

「おれとウォルを、隣国リユケイオンに連れて行って欲しいんだ」

部屋に沈黙が下りた。

最初に口を開いたのはモーリだった。

「グレイス、ゆっくりでいいから訳を聞かせてくれるかな？」

やさしい言葉に、思わずこくりと頷いていた。

一つだけ大きく深呼吸し、左手の籠手を外した。

すると、手の甲に埋め込まれたコインと、その周囲が焼け爛れたように赤黒く血管が浮いている様子があらわになった。

ルウナーが一瞬息を飲んだ。

「おれの本当の名前は『ラック・グリフィス』 4年前の戦争で

滅びたグリモワール王国の、レメゲトンだ」

レメゲトン。

セフィロト国の神官セラィラと対にされる存在で、コインを使って悪魔を

魔界から召喚し、人知を超えた能力を駆使して戦ったとされる、グリモワール王国の天文学者の事だ。

「これはその証拠、第25番目グラシャ・ラボラスのコインだよ。

契約したのは戦争よりずっと前の話だけど」

左手の籠手をつけ直し、再び二人に向き直った。

「それから、ウォルジェンガの本当の名前は『アレクスター・クロウリー』。彼も同じ、レメゲトンだ。だから、言うまでもなくおれとアレイさんは今、セフィロト国に追われてる」

心臓が飛び出そうなくらいにばくばくと脈打っていた。

「おれたちは国境を越えるつもりだ。でも、きつと二人だけで国境を越えるのはすごく難しいんだ。だから、モーリとルウナーに手伝ってほしい」

二人は目を丸くしておれの方を見ていた。

「突然こんなことを言い出してごめんなさい。でも、もう時間がな

かったんだ。だって」

ベッドに横たわるシドを見て、決意して告げた。

「シドがこんな怪我をしたのは、おれのせい、だから」

その言葉を聞いて、モーリが首を傾げた。

「シドの怪我がグレイスのせいだって？ それはいったいどういう意味なんだい？」

責めるわけでもなく、突き放すわけでもなく、ただ不思議そうにルウナーの青い瞳がまっすぐにおれを見つめていた。

ただ、信じられないと驚いて。

「ごめんね、ルウナー」

もはやおれには謝ることしかできなかった。

「フェリスはおれの敵なんだ……セフィロト国の神官<sup>セフィラ</sup>が放った密偵で、今も、おれとアレイさんの命を狙ってる」

絞り出すように言葉を放つと、ルウナーの表情が強張った。

「フェリスもシドも、昨日合った時点でおれが誰か分かってたんだ。詳しいことはおれにも分かんないけど、フェリスはシドの事を邪魔だと思って、あんなこと」

「フェリスが……？ フェリスが、シドを、邪魔だと思ったって言うの……？」

ルウナーの顔が青ざめている。

「だってフェリスがそう言ったんだっ……！」

おれとアレイさんを殺して、シアのもとに持ち帰って褒めてもらうって言ったんだ。

「フェリスは、おれのことを嫌いなんだ……おれが、セフィロト国の敵だから、悪魔だから、殺すって言ったんだ。シドのことも消すつもりで刺したって。でも、失敗したって」

全身が震えている。

自分がいったいどんな言葉を紡いでいるのか、それを聞いている二人がどんな表情をしているのかも分からなかった。

「ごめんなさい……おれさえここにいなければ、こんなことにはな

「らなかったんだ……！」



全身ががたと震えていた。

こんな一方的な懺悔を聞いたら、やさしいモーリとルウナーが困るって分かっていたのに、自分の中からあふれ出る感情を止められなかった。

こんなの、ただの甘えでしかないのに。

隣にアレイさんがいないだけで、俺は全然だめなんだ。

「アレイさん……！」

唇の端から漏れた名は、これまで何度も何度も繰り返してきて、これから何度も何度も繰り返す名前なんだろう。

今にも膝をついて崩れ落ちそうだった。

「本当の名前は、ラック・グリフィスと言っんですね」

モーリが静かに尋ねた。

声を出せず、俯いたまま静かに頷いた。

「君はその小さな体に、とても強大な力を秘めている。それは、世界を左右するほどの力です」

その言葉を聞いて、おれははっと顔を上げた。

悲しそうな目をしたモーリがおれを見下ろしていた。

「その左手はきつと自分のものではないのですね。それは君の中の血と反発しています。それだけじゃない、君が最も大切に想っている彼とも正反対の性質をもつものです」

「モーリ……？」

先ほどまでと違う雰囲気モーリに、少しだけ戸惑った。

「君は、小さな手で目に映る人も映らない人も、誰も彼もを救おうとするとても優しい心の持ち主です。でも、それがゆえ君には多大な困難が与えられるでしょう」

すっと跪いたモーリは、おれの左手をとって、籠手の上から軽く甲に口づけた。

「君たちの旅路に幸あらんことを……私は、少しでも君の力になりたいと思います」

そう言ったモーリからは、少しだけ不思議な気配がした。天使や悪魔に似たその気配を感じたのは一瞬だけで、すぐに消えてしまったけれど。

「必ず貴方をこの国から救い出して差し上げます」  
モーリはきっぱりと言い切った。

「……あ」

のどが張りついたように声が出なかった。  
鼻の奥がつんとしたけれど、なんとか泣くのをこらえた。

「あ、ありが、とう」  
なんとかそう言っていると、モーリはにこりと笑い返してくれた。  
それを見て、おれもつられて微笑んだ時だった。

背筋を、ぞわりと冷たいものが走った。

強大な天使の気配が突然現れたのだ。  
思わずはっと窓の外をにらむ。

「サンダルフォン……！」  
マルクトが　シアが、来ている。  
直感的にそう気づいた。

おそらくアレイさんが悪魔を召喚したことで、この場所が露見したんだ。

「行かなくちゃ」  
サンダルフォンは天界の長メタトロンと並び称されるほどの強力な天使だ。いかにアレイさんが強いとはいえ、きつと一人では危険だ。

衝動的に部屋を飛び出そうとした時、後ろ手に手首がつかまれた。  
「だめ、グレイス！」  
「ルウナー？」

見ると、蒼白なルウナーがおれを止めていた。

「駄目よ、サンダルフォンって、セフィロト国セフィラの神官が召喚する天使の名前でしよう？ 今行ったら、グレイスは戦うんでしょう？」

「そうだよ」

そう言つと、ルウナーは首をフルフルと横に振った。

「やめて。グレイスまでシドみたいに大怪我しちゃったら……！」

ベッドの上に横たわる藍色髪アレイの青年を見て、ぎゅっと心臓が掴まれた。

ルウナーはそつとおれの手を離した。

「行かないで、グレイス。あなたが怪我をするところなんて見たくないの」

「でも、このままじゃアレイさんが」

なんとか説得しようと口を開いたとき。

左手を凄まじい痛みが貫いた。

まるで脳髓を揺さぶられるような痛みアレイに、思わず喉の奥から絶叫が漏れた。

「うわああああっ！」

埋め込まれたコインが熱い。

熱さを通り越して痛みしか伝えない左腕は、内側から何者かが食い破ろうともがいているようだった。

「グレイス?!」

「痛っ…… ああ……っ！」

その声で、看護師さんが部屋にやってきた。

「どうされました？」

そして、左腕を庇うようにして床に転げたおれを見て、左腕を診ようとお手を伸ばした。

「触るなあっ！」

反射的に伸ばされた手を振り払う。

痛みや熱さと共に悪魔の気が漏れだしている。これに触れていれ

ば、普通の人はすぐに体に変調をきたしてしまうだろう。

「落ち着け……ラースっ……！」

右手で左腕を抑え込み、必死で痛みに耐えた。

まるで、耳元で殺戮と滅びの悪魔が囁いているようだ。

今すぐにここから出せ、と。

「何で急に……」

第25番目、殺戮と滅びの悪魔グラシャ・ラボラスが何かに反応して荒れ狂っている。

「グレイス、どうしたの？ グレイス」

ルウナーの声。

「お願いだ……おれに近寄らないでくれ……！」

このままでは、この左手が周囲の人間すべてをのみ込む狂気と化してしまう。

左手が言う事をきかない。自分の意思が全く通用しないそれは、近寄ろうとしたルウナーを弾いた。

「きゃっ……」

短い悲鳴を上げて倒れたルウナーを見て、血の気が引く。

駄目だ。

やめろ……！

考えるより先に腰のショートソードを引き抜いた。

躊躇はなかった。

武器の悪魔サブノックが鍛えた鋭い刃を、思い切り左手の甲につきたてた。

「あああああ！」

喉の奥から悲鳴が迸る。

これまでの暴れるような痛みと違う鋭い痛みに、少しずつ左手の制御が自分の意識化に帰ってくる。震えるほどの刃の痛みが現実へと引き戻す。

どくん、どくと心臓の音が近づいてくる。

「大丈夫ですか！」

看護師さんの悲鳴。

縫いつけられた左手を見て、ルウナーが卒倒した。

「……大丈夫。これで、大丈夫」

痛みはひどかったが、先ほどまでに比べれば。

なんとかラースは落ち着いたようだ。

背中にも額にもびっしょりと汗をかいている。ショートソードの間からは、どくどくと血が湧き出してきた。

「ごめん、包帯……少し、分けてもらえるかな？」

血の匂い。

あ、まずい。

「剣を抜かないで！　すぐに処置します！」

看護師さんの声がひどく遠くに聞こえた。

気の遠くなりそうな痛みの中、悪魔の気配が近づいているのを感じた。

「……アレイさん……？」

もう限界だった。

真っ暗な闇が下りてくる。

看護師さんが戻ってくるのを待たず、おれは意識を手放した。

## SECT・12 片割れ

夢の中で、愛しいヒトの声を聞いた。

俺は先に国境を超える。お前は、あの二人と一緒に後から追いかけて来い

あの二人？ モーリとルウナーのこと？

ほとんどぼんやりと声を聞いていた。心地いいバリトンは、おれを落ちつけていった。

必ず、生きて、リユケイオンで会おう

「……アレイさん」

起きるより先に痛みが襲った。

まるで全身の力が吸い取られたように動かない。

その上、左手は焼けるように痛い。

「アレイさん」

それでも、いつも自分の隣にいるはずのヒトの名を呼んだ。

返事がないと、分かっている。

代わりに返事をしたのは、顔のすぐ脇にいた悪魔だった。

「やあっと起きたのお 遅いんだけどお」

間延びするような独特の話し方には聞き覚えがあった。

「……ロノウエ」

「聞いたあ？ 聞いたよねえ？ 僕もう帰りたいんだけどお」

全身に複雑な黒の紋様を刻んだ真っ白い毛並みの小さなサルは、長い尾を振りながらそう言った。額には、真っ赤に光る第3の目が開いている。

第24番目の悪魔、ロノウエ。疾風の速度で遠く離れた相手にメッセージを送ることのできる悪魔だ。

アレイさんが、右腕に刻まれた紋章で契約している悪魔の一人。

「アレイさんは……どうしたの……？」

「サンダルフォンのとこだろお？ さつきそうだったしい まだそんな感じだし」

「……っ」

サンダルフォンの名を聞いて、さつと血の気が引いた。

アレイさんがマルクトと戦っている。

俺は先に国境を超える。お前は、あの二人と一緒に後から追いかけて来い。必ず、生きて、リユケイオンで会おう

先ほどの言葉は幻聴ではなかったらしい。

ロノウエが伝えた、紛れもないアレイさん自身からのメッセージだ。

「んじゃあ 僕は行くからねえ」

さつと消えようとしたロノウエの長い尻尾を、思わず掴んでいた。急に動きを止められて、ずべ、とベッドに顔を打ち付けキャンと啼いたサルは、鼻を押さえながら抗議の声を上げた。

「何すんのお 意味分かんないんだけどお ふざけんなよお」

「ご、ごめん」

体が動かせなかったから、必然的に唯一動く右手で尻尾を握るしか手段がなかったただけだ。

おれが掴んだしつぽの根元を小さな両手で引つ張り返し、解放したロノウエは、鋭い歯をむき出しにしながら威嚇した。

「もお 知らねえ 勝手にそこでくたばってるお」

「待つて。おれもアレイさんに伝えてほしいんだ」

「はあ？ 意味分かんないけどお 僕 お前と契約してないんだけどお」

「いいじゃん、ちょっとくらい」

左手が焼けるように熱い。全身をめぐる血も沸騰するほどに熱く、

とても体を起こせる状態ではなかった。

「お願い　死なないで　って伝えて。必ず」

それを聞いたロノウエは、複雑な模様の入った長い自らの尻尾を両手で撫でながら、キツキ、と啼いた。

「しょーがないなあ　特別だよお」

「ありがと」

ロノウエが消えるのを見送って、再び目を閉じた。

目を閉じると、さらに痛みと疲労が募るだけだった。

今すぐにでも立ち上がってアレイさんのもとへ行きたいのに。

ただ、それは不可能だということしかわからなかった。

「……アレイさん」

今すぐに、会いたい。

サンダルフォンと対峙するあの人の隣で、肩を並べて戦いたい頬を、涙が一滴伝った。

おれはずっと夢と現実の狭間を彷徨っていた。

左腕の痛みがひどい。そして、全身を覆う倦怠感も時を追うごとにひどくなっていた。今すぐにアレイさんのもとへ向かいたい気持ちとは裏腹に、体はほとんど動かせなかった。

まるで、戦争の時に王都へ置き去りにされた時のようだ。

あの時は自分も強くなって追いかけるっていう目標があったから前を向いていられた。

でも、今は

フフ　ルーク　隙を見せたら　乗っ取るヨ？

どこからか、ラーズの声がする。

ここのもろろずつとそうだ。浅い眠りにある時、この殺戮と滅びの悪魔は耳元で囁いてくるのだ。少しずつ、おれの心の絶望を広げていくかのように。



近クに アイツの チカラ 感ジルンダ もうガ慢できナイよ  
あいつ？ あいつって、誰？

半端モノだヨ

半端モノ？

アイツだヨ 天使でも 悪魔デモ 人間でもナイ 半端モノ

天使でも悪魔でも人間でもない。

それは誰？

このマエから ルークの中二 アイツの血がアるから 不愉快

ダヨ

いったい、誰の？

しかし、ラーズの言うとおり全身の血が沸騰しそうなくらいに熱いのも事実だった。そして、心臓の拍動に合わせてラーズのくれた左腕はずきん、ずきんと波のような痛みが押し寄せる。

おれの中にある血とラーズの左手が反発している……？

でも、おれの血はグリフィス家のモノだ。最初にコインを作ったゲーティアイグリフィス。脈々と受け継がれてきたその血がおれの中に流れている事は、額に刻まれたルシファの契約印が証明している。

それ以外の血？

おれの中に？

アノ時だヨ キミが一度 死ンだ あノ時 アイツの血が入り込んでキタ

忌々しげなラーズの呟きが、一瞬だけ意識を覚醒に導いた。

一度死んだのは、あの戦場での出来事。あの時入り込んできた血

……

はっとした。

あの時、おれとアレイさんは同じ剣で心臓を一つに貫かれたから。

ボクは アイツを消すヨ その時ハ 体を 貸してネ  
信じられなかった。

でも、確かにおれはこんな話を聞いたことがある。

魔界最強の剣士マルコシアスは、一翼の生えた狼の姿にもなれる  
《……………》って。

過去を思い出した時、そして半年前にディファンクタス牢獄を破った時、おれは人型になったラースを見ている。浅黒い肌、鋭い目、そして恐ろしい炎妖玉の瞳<sup>ガーネット</sup>。笑った時に覗く鋭い犬歯。

何より、その容貌はあの魔界最強の剣士と瓜二つだったんじゃないか？

分かってル？　ボクがキミと契約したのは

ああ、なぜ気付かなかったんだらう。

アイツを　消すため　だヨ？

ラース。マルコシアスさんは、お前の『片割れ』なの？

そうダよ

ラースの返答に絶望した。

左腕が一瞬熱くなる。おれの絶望を喰って、ラースが喜んでいる。

いいネ　ルーク　そうして　絶望スルとイイ

ラースとマルコシアスさんが、片割れ同士。

戦場で互いを滅ぼし合ったフラウロスさんとカマエルさんのように。

ラースが宿るコインはおれの左手に。

マルコシアスさんの印はアレイさんの左胸に。

その二つが片割れ同士ということは、必然的に、おれはアレイさんと戦う事になってしまう。

ボクは　半端モノなんかに　負けナイよ　アイツ　人間ノせい  
で　半分シカ　力を出せナイんだ

嬉しそうに笑うラースの声がどんどん遠ざかっていく。  
だめだ。

絶望する事だけはだめ。

ラースの凄まじい力でまたおれは周囲をすべて破壊してしまう。  
それだけは

浅い眠りから覚醒した。

目頭が熱い。知らぬうちに泣いていたのかもしれない。

今が朝なのか夜なのか、アレイさんと別れてからいつたいどれだけの時が経っているのか、見当もつかなかった。

「ラース……おれとマルコシアスさんを戦わせる気なの……？」

返答のない問いを呟いて、想像して、心の奥底からえぐり取られたような感覚を受けた。

体も心もぼろぼろだった。

「アレイさん……！」

必ず生きて、リユケイオンで。

ロノウエが伝えたメッセージだけが頼りだった。

「グレイス、大丈夫よ。必ず貴方をリユケイオンへ送り届けるから

」

ルウナーが強い意志を込めてそう言ったのを、夢うつつに聞いていた。

## SECT・13 シド

ふと、ベッド脇に気配を感じた。

目を開けると、藍色の髪の青年が跪いていた。

部屋の中は暗い。どうやら今は夜になっているようだ……時間感覚の薄い今は、その程度しか分からなかった。

「……シド。元気になったんだね」

そう言つと、シドは藍色の髪を揺らしてとても悲しそうな顔をした。

そして唇を引き結び、小さな声で呟いた。

「申し訳ありません。私は貴方のお役に立つことが出来なかった」

「……？」

首をかしげて見せると、シドは目を閉じた。

まるでこれから懺悔をはじめの者のように。

「私はフェリスがセフィロト国の間者である事にはずっと気付いておりました。しかし、これまでは何ら表だつて行動する事もなく、ただこの歌劇団に紛れているだけだったのです。だから、油断していました」

そうだ。

フェリスは、シドが悪魔の国の騎士だつて言った。

「シドはグリモワール騎士団にいたの？」

「はい。貴方が戦場へ去つて最初の騎士団試験に合格し、最後の騎士団員として漆黒星騎士団員となりました」

「最後の騎士団員……」

ということ、ライディーンの一つ下の後輩になる。それでおれには見覚えがなかったんだ。

おれは漆黒星騎士団にはずつといたから、ほとんどの団員の顔を覚えていたはずだったもの。

「私たちは鷹部隊長ライガIIアンタレスの指揮下、戦場へ赴きまし

た。そこで貴方の姿をお見かけした事があります。だから、一目見た瞬間から、貴方がレメゲトンのラック・グリフィスである事は分かっていました」

凜とした丁寧な口調は、無口なシドにとてもよく似合っていた。

画に描いたような騎士の振る舞いは、あの戦場を思い起こさせる。

「びつくりしたでしょ？」

「……はい。まさかこのような場所で再びお会いするとは思ってもおられませんでしたので」

「ごめんね。おれのせいで酷い怪我をさせてしまった」

素直に謝ると、シドはとんでもない、と首を振った。

「本来ならフェリスの横暴を止めるのは私の役目でした。しかし、私は失敗したのです。フェリスは……強かった」

あの舞台上での剣舞。

あれは、演技などではなく、二人が本気で争っている場面だったのだらう。

二人が二人とも本物の剣を持ち、殺気だって切り合う本物の戦闘だったのだ。

「シドも強いさ。二人が同じ武器を持っていたら負けなかったはずだ」「とんでもない」

シドはまた首を横に振った。

さらさら、と藍色の髪が揺れて、一瞬だけ右目が見えた。

その右目は、左目とは少しだけ色が違っているように見えた。

右目を隠す長い前髪はその色を隠しているせいなのかもしれない。

シドは唇を引き結び、静かに告げた。

「ご報告させていただきました……クロウリー伯爵はすでに、国境を越えました」

「！」

どくん、と心臓が大きく跳ねた。

瞬間、左腕がずきりと痛む。

「サンダルフォンとの戦闘の中でそのまま国境を　　その後の行方

については、分かっていません」

「アレイさん……っ」

どうなったんだろう。

サンダルフォンと戦闘して無事で済むはずがない。リユケイオンに入って、戦って領地を荒らせば、リユケイオンの兵士たちも出てくるだろう。挟みうちにして狙われたりしたら

「今、国境付近はその戦闘の影響で混乱状態です。団長のモーリとルウナーが、この混乱に乗じて国境を越えるために画策しています。早ければ明日、遅くとも3日以内には国境へ向かう事ができるでしょう」

モーリとルウナーが。

そうだ、あの二人は、おれたちの味方をするって言うてくれたんだ。

「もう少しだけ辛抱してください。きっとクロウリー伯爵もリユケイオンで貴方をお待ちしているはずですよ」

ああ、どうしておれにはなんの力もないのだろう。

こうして隣に跪いてくれる騎士団の青年一人、どうして救えなかったのだろう。彼はおれのこと、命をかけて守ろうとしてくれているのに。

モーリもルウナーも危険を冒してまでおれを送り届けると誓ってくれたのに。

「……シド」

グリモワール王国はもうない。

でも、おれがレメゲトンだった事実は変わらない。シドが騎士団員だった過去も変わらない。

こんなセフィロト国の端でグリモワール王国の騎士団員に会えた事は奇跡なのかもしれない。

「ごめんね……おれ、グリモワール王国を守れなくて……ケテルなんかに負けてしまって、ごめん」  
ずっと謝りたかった。

国の為にと命を賭してあの戦場で戦ってくれた人たちに。その勝利を信じて戦場へと大切な人を送り出してくれた人たちに。

おれがあの時、勝つ事が出来ていれば。もっと力があれば。もっと

「そんな事、おっしゃらないでください」

シドの悲痛な声がした。

「もし貴方に国が護れないと言うなら、私こそ何もできなかった。どれだけ剣を振っても、騎士団に入っても、戦場へ行っても、私に出来ることなど何もなかった」

「でも、おれにはどうにかできる可能性があったんだ」

おれとアレイさんとライディーンだけが、天使と戦える悪魔の力を持っていたから。

それなのに。

「ミス・グリフィス」

懐かしい名で呼ばれ、はっとシドを見た。

「ブラックルビー漆黒星騎士団の先輩方に聞いていた通りだ。貴方は、とても優しい。でも、そんな事を気に病む必要はありません」

シドは穏やかな表情をしていた。

「あれは戦争です。セフィラとレメゲトンの喧嘩というわけじゃない。国と国が総力を挙げて戦った、戦争だったんです。だから、あの敗北の責任を負う人間がいるとしたら、貴方だけじゃない」

髪と同じ、シドの藍色の左目がおれを真っ直ぐに見ていた。

「貴方だけでなく、クロウリー伯爵も、ゼデキヤ王も、クラウド団長も、ライガ部隊長も、騎士団員一人一人も、そしてグリモワール王国を愛したすべての人々が負うべき罪です。それは、断じて貴方一人のものじゃない」

シドははつきりとした口調でそう言った。

優しくも厳しいその口調は、まるで漆黒星騎士団長だったクラウドさんのようだった。ブラックルビー

「だから、その罪は全員で背負わせてください。すべての罪をレメ

ゲトンに押し付けて私たちがのうのうと生きていくなど、それこそ騎士の名折れです」

すごいね、クラウドさん。

騎士団長だった彼の心は、こうやって騎士団員たちに受け継がれていくんだ。それは、グリモワール国亡き今でも、こんなセフィロト国の片隅でも。

「……シド」

「なんでしよう?」

「ありがとう」

ほんの少しだけ、全身の痛みが和らいでいた。

相変わらず左腕はピクリとも動かないし、心臓の拍動に合わせてずきりずきりと痛みを吐きだしていたけれど。

心のどこかにほんのりと明かりがともる。

おれはいつもそうだ。

絶望に喰われそうになるたび、いつも周りの人が助けてくれるんだ。

だからおれはこの世界を守りたいって思うんだ

二度と絶望に身を任せたりしない。

負けない。

必ず、生きてリユケイオンへ。

「ねえ、シド」

年下の彼に頼むのは筋違いかもしれないけれど。

「ちょっとだけ甘えてもいい?」

それを聞いて、シドは少し迷ったようだったが、はい、と答えた。

「おれがさ、寝るまででいいんだ。そこに、いてくれる?」

「もちろんです」

「でさ、もしよかったら」

もうひとつお願いをすると、シドはひどく困った顔をして、かな



り迷った様子だったが、決心したようにおれに向かって手を伸ばした。

シドの手がおれの頭に触れた。

幼い子にするように優しく撫でていく。

「これでいいのですか？」

困惑した声。

声と裏腹に、シドの手は優しくかった。

「うん、クラウドさんがね、よくこうしてくれたんだ」

それを聞いたシドは、くすりと笑った。

ああ、笑ったところは初めて見たかもしれない。

「おやすみなさい、ミス・グリフィス」

「……おやすみ」

ダイアナさんが、クラウドさんが眠れない夜にしてくれたみたいに。

優しい掌の感触を感じながら、久しぶりに安らかな眠りに就いた。

## SECT・14 国境へ

次の日、目が覚めると、不思議なほど体が軽かった。

そつと体を起してみると、まだ倦怠感はぬぐえなかったが、動けない事はなかった。起き上がる事さえできなかった時を考えると、かなり回復したと言えるだろう。

左手は……全く動かす事が出来なかったけれど。

「心が弱ると体も弱ってしまうんだね」

いつだったか思った事を、もう一度繰り返し思う。

シドがおれの中の罪状と一緒に背負って軽くしてくれたから、体も軽くなっただ。

「……アレイさん」

窓を見ると、朝日が輝いていた。

その向こうに、国境都市リンボを収めるパリエース家の本宅がある。

「待つて。今行くから」

国境に連綿と横たわる壁を見据えて、再び誓いを口にした。

どうやら、おれがアレイさんと別れてルウナーたちのもとへ走ったあの日から3日が経っているらしい。

3日前の騒ぎを、おれは何も知らなかった。

「いったい何があったの？」

そう問うと、ベッド脇に座ったルウナーとモーリは顔を見合わせた。

どこから話したらいいか逡巡している様子だった。

「おれがアレイさんと別れたのは中央広場のテントだった。あの後、きつとサンダルフォンがあの場合に来た事は間違いないと思う。おれ

が知りたいのは、その後なんだ」

「……私にも、詳しい事は分からないの。ただ人づてに聞いた事だから」

ルウナーはそう前置きしてから、ゆっくりと口を開いた。

「テントで戦いが始まったって言うのは本当だと思うわ。真昼の広場で突然、召喚された天使と悪魔があらわれたの」

「……」

「話では、サンダルフォンと、数体の悪魔がいたらしいわ。見ていた人の話によると、風を操る少年のような悪魔が一人、それから獣の頭を象った兜を身に付けた剣士と、それから大きな翼の狼がいたらしいわ」

「ハルファスとサブノックさんと……たぶん、マルコシアスさんだと思う」

大きな翼の狼。

左手がずきりと痛んだ。

「悪魔を引き連れた男性は、そのままサンダルフォンと交戦を始めたと聞いたわ。その影響で広場がかなり破壊されたらしいの」

「街のみんなは大丈夫だったの？」

「怪我をした人はいるみたいだけど、ほとんど人的被害はなかったと聞いたわ。ウォルジェンガが……アレイスター「クロウリー」はかなり気を使って戦っていたみたい」

「……そう」

「アレイスター「クロウリー」はそのままサンダルフォンを誘導し、空から国境を越えた」

強行突破。

いつもと一緒だ。あの人はいつも自分を盾にしておれを逃がすから。またあの人はすべてを背負ってセフィロト国の目をおれから逸らす気だ。

「そのあと、アレイスター「クロウリー」がどこへ行ったのかはわからないわ。とにかく、正当じゃない手段で国境を越えることに成功

したのだけは事実よ。ただし、捉えられたという情報はないわ」

アレイさんはリユケイオンに入った。

サندانフォンと交戦中だったのだ。相手を倒したのか、どうにかして逃れたのか……いずれにせよ、無事ではいるとは思えない。

早く。

右手の拳をきつく握り締める。

「……おれはアレイさんを追いかけてリユケイオンに向かいたい」

「分かっていますよ。すでに手続きは済ませてあります。今回の事件のおかげで慌てて国へ戻ろうとしている人々が多い。それに乗じて国を出ようと思います。うまく準備すれば午後には行けるけど、グレイスの体調次第かな？」

「おれは大丈夫だ」

「分かりました。すぐに準備しましょう」

モーリはにこりと笑った。

「シドは？」

「彼はまだ動いてはいけないと医者に言われています」

「あれ、じゃあ昨日の夜……」

おれの傍にいてくれたのは？

そう言つと、ルウナーの眉が跳ね上がった。

「昨日の夜、シドがどうしたの？」

あ、しまった。

どうやらシドはまだ絶対安静らしい。

当たり前だ。何しろ腹を貫かれたのはまだ数日前、傷がふさがるところか本来なら欠片も回復してはいないはずなのだ。

それを押しても昨日の夜、おれに会いに来てくれたのは相当無理していたに違いない。きつと、どうしてもおれにフェリスのことにアレイさんの事を伝えたかったんだろう。

しかもおれ、そんなシドにわがまままで言つて……

目をそらしたが、遅かった。

「誤魔化しても駄目よ、グレイス。貴方の嘘は分かりやすいわ」

「んーとねえ、えーつと……」

ごめん、シド。

「まったく、あの子だったら……」

ルウナーは立ち上がった。

「ルウナー、シドを怒らないで！ おれ、シドのおかげで元気になれたんだっ」

慌ててそう言つと、ルウナーは肩をすくめて笑つた。

「大丈夫よ、怒るわけじゃないわ。ちよつと注意するだけよ」

「じゃあ僕も準備に行きますね」

二人同時に立ちあがつて、部屋の入向に向かう。

「グレイスは、ここでちゃんと大人しくしているように」

最後にしつかり釘を指して、ルウナーとモーリは出ていった。

ずっと体を起こしていたから疲れた。

ぽふん、とベッドに倒れ込んだ。

右手の箒手を外して、右腕に刻まれた悪魔紋章を一つ一つ確認していく。

「フラウロスさん、アガレスさん、アイムさん、フェネクス、イボス」

おれに力を貸してくれると言つてくれた5人の悪魔たち。

「ルシファ」

そして額に刻まれたリユシフェルの印。

召喚すればセフィラに気づかれてしまうから今はまだ呼べないけれど。

「もう少しだけおれに付き合つてくれる？」

そう言つと、紋章たちは答えるように少し熱くなった。

「……ありがとう」

右手をギュツと握りしめた。

待つてて。アレイさん。すぐに行くから。

午後になってルウナーとモーリがそろって部屋に戻ってきた。

「行きましようか」

「立てるかしら？」

「ん……まだちょっと無理……かな」

「そうだろうと思って車いすを用意してありますよ」

モーリはおれを車いすに乗せた。

きいきい、とタイヤのきしむ音がする。

「シドは？」

「先に運んであるわ。本当はまだ動いちや駄目なのに、どうしても一緒に行きたいって言うから……あの子があんなに主張するなんて初めてだったし」

「大丈夫なの？」

「ええ。もう二度と無茶して動いたりしないようにしっかり言っているから」

「……」

車いすで病院を出ると、目の前には大きな馬車が止まっていた。

それも一台ではなく、数台が列をなしている。

「歌劇団の馬車よ。テントと一緒にいくらか壊れてしまったけれど、団員と荷物を運ぶには丁度いい数が残っていたわ」

その言葉で、さすがに口を噤んだ。

テントと馬車を破壊したのはきつとアレイさんだから。

それを感じ取ったのか、モーリは優しく笑った。

「気にしないでいいですよ、 그레이ス。貴方のせいではないんですから」

「……でも」

「第一、今回は神官セフィラが絡んでいる、という事でセフィロト国から援助が出ましたから。関所を越えるための手続きが比較的簡単に済んだのもそのためです」

「そうだったんだ」

「これほど街が荒れてしまつたら僕たちも興行と言つわけにはいきませんからね。相手にも非がある事ですから、多少無理を言つても通してもらえました」

「……」

優しいモーリがセフィロト軍相手にこり押しするところを想像したが、どうしても出来なかった。

馬車に乗り込むと、奥の一番広い席に、シドが横たわっていた。

「シド」

笑つて手を振ると、シドは軽く首を動かした。

モーリはおれを車いすからおろして、シドの隣に座らせてくれた。  
「忘れるところだったわ、グレイス」

ルウナーがぱさり、とおれの頭に何かをかぶせた。

視界の隅に金色が過つた。

「これは？」

「変装用のカツラよ。ま、気休め程度だけど」

ルウナーはにこりと笑つた。

「さあ、行きましょう。グレイス、向こうでウォルジェンさんが待っているんでしょう？」

「うん」

モーリが合図すると、馬車は進みだした。

馬車が動き出す瞬間、シドが一瞬顔をしかめた。

「傷に響くの？」

「大丈夫です」

「ごめんね、昨日はやっぱ無理してたんだよね」

「……大丈夫です」

少し返答に間があった。

きつともものすごく辛かったはずなのに素直じゃないところが誰かを思い出させて、思わずくすりと笑った。

「ありがとう、シド。おかげでおれはまた前へ進めるよ」

この旅の先に待ち受けるものが何なのか分からなかったとしても、

「ミス・グリフィス。一つだけお聞きしてもよろしいですか」

「何？」

シドはとても小さな声で、おれに尋ねた。

「クラウド団長が秘密裏に革命軍を編成しているというのは本当ですか？」

おれは耳が言いから聞こえたけれど、きつと前の席に座っているモーリとルウナーには聞こえなかっただろう。

「うん、本当だよ」

動けないシドの耳もとにそつと顔を近づけて、ひそひそと。

「場所は言えないけれど、サンを……ミュレク殿下を匿ってるのもクラウドさんなんだ。きつといつか、グリモワール王国を再建するために」

「……そうですか」

シドは何かを考え込むかのように一度眼を閉じた。

「私は、少しでも力になる事ができますか？」



眩くような問いに、思わず笑みがこぼれた。

「できるよ。無事に国境を越えられたら、おれはクラウドさんに連絡をとるから、その時にシドを迎えに来てもらおう」

「貴方はどうするのですか？」

「……おれとアレイさんの目的は、世界を知ることだ」

マルコシアスさんやルシファがおうとしながら口に出せないでいる、世界の理を知るのが一番の目的だった。

また、その道中でグリモワール再建の力を手に入れること。

「だから、おれたちはまだ先へ進むよ。リユケイオンは出発地であつて到着する場所じゃない」

セフィロト国を出るのは、始まりだ。

本当なら、こんなところでぐずぐずしてはいられなかった。

おれとアレイさんを信じて送り出してくれたサンやクラウドさん、それに革命軍のみんなのためにも、おれたちは魔界や悪魔の事についてもつと知る必要があつた。

「……では、その旅に私が同行することは可能ですか？」

「えっ？」

おれは驚いてシドを見た。

結構大きな声を出していたんだろう。ルウナーとモーリも不思議そうにこつちを見ていた。

再びシドに近づいて、ひそひそ声に戻す。

「それは……出来ないよ。おれたちと一緒に来たら、また危険な目に合わせてしまう」

現にいま、シドはおれたちのせいで重症を負い、今も床に伏せる状態なのに。

周りの人を傷つけないようにとすべてを置き去りに、アレイさんと二人だけでここまでできたっていうのに。

子供も仲間も恩人も、すべてを置いてきた。

「私の決心はついています」

シドの声は力強かった。

「ただ、今もこんな状態でお役に立つことはできません。レメゲトンのような戦闘力もない。それでも貴方が承諾してくださるのなら」  
ずる、とシドが重そうに体を起こした。

「私は貴方に忠誠を誓いましょう。地の果てまでもお供し、貴方のためにこの命を捧げます。私の剣は貴方の身を守る為にのみ存在し、私の身は貴方の望みを叶える為にのみ存在します。私の血は貴方の為にのみ流されます」

一人の主<sup>ミイロード</sup>に忠誠を誓う騎士の宣言だった。

しかし、最近では行われていない古い儀式。

揺れる馬車の中で、おれの足元に跪いて。

シドはおれの右手をとった。

「すべては、貴方の為に　我が主」

手の甲への口づけは、忠誠を示す。

「お許しいただけるならば、私を貴方の盾として傍に置いてください」

「だ、だめだよ」

主従関係を築く事は出来ない、と言いかけた時、馬車がかくんと停車した。

その衝撃で、シドはぐつと表情を歪ませる。

「シド！」

「国境よ。止められたわ。気をつけて！」

ルウナーが叫ぶ。

モーリは馬車の外へと出ていった。

おれはシドを支えるようにして座席にあげた。

「……申し訳ありません」

「いいよ、それよりも、おれに忠誠を誓うとか、そんなこと言っちゃ駄目だ。おれなん……?!」

「失礼」

叫ぼうとしたおれの口をシドが手で塞いだ。

見ると、国境監査が馬車の中を覗き込んでいるところだった。  
危ない、危ない。

監査の鋭い目がこちらに向けられている。  
国境を守っている聖騎士団だ。

どきりとした。

「後ろの二人は？」

後を追って馬車に戻ってきたモーリが答えた。

「劇団員です」

「他の馬車に比べてこの馬車だけ乗っている人数が極端に少ないのは？」

「後ろの二人が怪我をしているからです。二人が横になれるよう、広くスペースを取っているだけです。それにほら、歌姫を狭い馬車に放り込むわけにはいかないでしょう？ 大切な商売道具なのですから」

モーリの言葉でルウナーがにこりと微笑んだ。

歌姫の名に恥じないその容姿に、監査も納得したようだ。

「後ろの男は？」

「ですから、怪我人です。先日、広場の騒ぎで……」

そう言われるとつらいのか、監査は口を閉じた。

「隣金髪の女も怪我人か？」

金髪？ ああ、そうか。いまおれは金髪のカツラを被ってるんだ  
った。

「ええ。体調も悪いようなので、大事をとっています。彼女もうちの大切な花型ですから」

「ふむ」

監査は鋭い目でおれを見た。

ルウナーのようにお愛想で笑えばいいんだけど、おれは残念ながら楽しくもないのに笑えないんだ。

しかも、監査の視線はおれの左手に注がれている。  
まずい。

「その左手は？」

「その時の怪我です」

モーリが間髪いれずに答えたが、今度は納得しなかった。

「少し見せてもらっても？」

心臓がとまりそうだ。

「いいけど……動かせないよ？」

監査の聖騎士は、失礼、と言いながら馬車の奥まで乗り込んできた。

もしかすると、おれの左手にラースのコインが埋まっている事はすでにセフィロト国に知られているのかもしれない。

隣のシドが警戒したのが分かった。

手元にいつものショートソードはなかったけれど、足元に剣が転がっていた。

おれとシドが同時に武器の位置を確認した。

こういう瞬間、たまらなく楽しくなってしまうことがある。戦闘を知る者だけに通じる、警戒の間。

聖騎士がおれの左手を掴む。

全体にずきりと痛みが走り、思わず顔をしかめた。

「やめてくださいますか、怪我をしているんです。無理をさせないでください」

シドが横から制止した。

が、聖騎士はそれを意に介さず、おれの左手をぐっと引っ張った。ラースとマルコシアスさんの血が反発しているだけでない、つい3日前にショートソードで貫いたばかりだ。

凄まじい痛みが貫いた。

「……あぁっ」

痛みに思わず声が漏れる。

「包帯をとって確認します」

そこまでするのか？！

警戒しているのは分かるが。

しかもやばい、包帯を取られたらコインが見られて、おれがラック「グリフィスだ」とばれてしまう……！

どうする？

逡巡している間にも、聖騎士は包帯に手をかけている。

もうだめか、と思った時。

目の前にすつと手が伸びてきた。

隣に座っていたシドだった。

「……シド」

「やめてください。つい先日の怪我なのですよ？ 動かせなくなるほどの傷を負った手を、年頃の女性に曝せというのですか？」

## SECT・16 悔恨

「とても聖騎士の成す事とは思えません。もし貴方がグリモワール王国の騎士だったならば、そんな所業は絶対に許されないでしょう」  
ひやりとした敵意を込めた声でシドが告げた。

それを聞いた聖騎士の眉が跳ね上がる。

「聖騎士を愚弄するのか」

「愚弄しているわけではありません。ただ、事実を述べたまでです」  
淡々と、しかし怒りを抑えて告げるシドの迫力に聖騎士が気圧された。

「貴様、グリモワール出身だな」

「そうです。しかし、私が本質的に言いたいのはセフィロト国とグリモワール王国を比較する事じゃない。国に仕える聖騎士が、国家神官が負わせた怪我を確認して、わざわざ女性の傷を抉るような行為が人道的でないという事です」

そう言われて、聖騎士はぐっと詰まった。

確かにそうだという思いはあったのだろう。

握っていたおれの手をぱっと話した。

凄まじく痛んだが、それよりも解放された事にほっとした。

「何なら、私の怪我を確認してくれてもいいでしょう。代わりに、彼女の傷を曝すようなマネだけはしないでください」

そう言いながらシドは、自らの服を割いてきつく包帯の巻かれた腹部を曝した。

先ほど巻いたばかりのその包帯には、また新たな血がじわりと滲みだしていた。

「シド、また傷が開いて……」

相手も騎士だ。それを見ただけで傷の深さが分かったのだろう。  
その重症の相手が自分を押しているという事実、一歩退いてい

た。

「……確かに、その女が怪我をしているのは本当のようだ。その怪我の原因がこちらにあるのも事実。それをわざわざ曝すようなまねはすまい」

シドの額には大粒の汗が浮いていた。

やはり、かなり無理をしているようだ。

おれを庇うように伸ばされた手も小刻みに震えている。

「お引き取りください」

「怪我人相手に失礼した。ただ、こちらも先日の方場での事件で殺気だっている時期だ。察していただけると助かる」

「それは痛み入ります。しかし、だからといって怪我人や女性にまで手ひどい行為を働くのは目に余ります」

荒い息でシドが答える。

それを見た聖騎士は不意に尋ねた。

「お前は、グリモワール王国の騎士だったのか？」

「……確かに私は、漆黒星騎士団員でした。その心は今も変わりない」

それを聞いて、聖騎士は吐き捨てるように言った。

「悪魔の国の騎士に説教を受けるようでは聖騎士の名折れだ……が、忠告は受け取っておく。感謝する」

言葉と裏腹にきつい口調だったが、それが彼の精一杯だったのだろう。

邪魔したな、とモーリに謝って、監査の聖騎士団員は出ていった。後姿を見送って、全身の力が抜けた。

それはシドも同じだったのだろう。

それまで体を起こしていたシドがずるり、とおれの肩にもたれかかった。

「シド？」

支えようと伸ばした右手に、真っ赤な血がついた。

「……え？」

血の匂い。

全身が総毛だった。

まるで全身の血が逆流するような感覚。

「シド？」

力を失ったシドの体がおれに覆いかぶさった。

丁度、馬車が走りだすのと同じだった。

覆いかぶさった時の冷たさとか重さが、まるであの時、重傷を負って戦場で倒れたアレイさんのようで。

おれは慌ててシドをゆすった。

「シドっ、シド、しっかりしてっ」

腹の包帯には、じわりじわりと血が染み出していた。傷が開いている。

動かすのは危険だ。

ゆっくりとシドの体を座席に横たえた。

「グレイス、いま、国境を越えました。すぐに医者を探しましょう」  
前の座席から投げられた、モーリの声が遠かった。

ずっと願っていた国境を越えたのに、またおれはヒトに助けられて、そのヒトを危険な目に合わせて、今も目の前で苦しませてしまっている。

その事実には打ちのめされていた。

「落ち着いて、グレイス。すぐにリュケイオンの街に入るわ」

「ありがとう、ルウナー。」

ああ、血の匂いがする。

自分の体の痛みなどどうでもよくなっていた。

さつき乱暴に扱われた左腕ははじけ飛びそうに痛かったし、全身をめぐる血は左腕と反発して沸騰しそうなほどに熱い。

それでも、目の前で倒れたシドの方がずっと大事だった。



またじわりと涙が滲む。

いつからおれはこんなに弱くなってしまったんだろう？

「ごめんね、シド」

何度言っただか知れない言葉を再び繰り返した。

「おれと一緒にいちゃだめだよ。またこんな風に怪我するよ。おれは……おれは、シドが怪我するところなんて見たくないんだよ」

「……ミス・グリフィス」

シドの唇の間から、小さな声が漏れた。

「私が貴方に尽くすのは……私の意思です……貴方がそれを気に病む事はない」

「そんなんっ」

「私はグリモワール王国の騎士です」

荒い息で、シドはきっぱりと告げた。

「貴方はレメゲトンです。悪魔の力を持っている……その戦闘力は……到底私の及ぶところではないでしょう。でも……貴方一人では乗り越えられない事もあります」

「そうだけどさ……っ」

現にいま、モーリとルウナーがいなかったら、おれは国境線を踏むことすらできなかっただろう。

シドがいなかったら、左手の包帯をはぎ取られて、ラック・グリフィスである事が露見していたかもしれない。そのあとといった自分がどういう行動をとるのか、想像もつかなかった。

「これはきつと貴方と同じように……私が持っている悔恨なのかもしれません。あの時、戦場で何の役にも立てなかった私が、いま、レメゲトンである貴方に仕えたいと思うのは、きつと……私の我儘でしかありません」

「……」

おれの罪状と一緒に背負ってくれたシドもまた、あの戦場での無力を感じているのだ。

その痛みを誰より知っているおれだから、シドの言葉に言い返せ

なかった。

「もう少しだけでいい。貴方がちゃんとクロウリー伯爵と再会するまで……貴方に仕えさせてほしいのです……レメゲトン、ラック」  
グリフィス女爵」

懐かしい名で呼ばれ、どうしようもない感情が全身を渦巻いた。

「これは、私に与えられた……好機だと思っています。戦場での悔恨を晴らすために……リュシフェルが与えてくださった好機だと」  
その言葉にぞくりとした。

何しろそれは、レメゲトンになったライダーンがおれに対して言った言葉とそっくりそのまま同じだったから。

この騎士団に来て、お前に会えたことはリュシフェルの導きだと思っっている。俺に与えられた幸運だと

当時15歳だったライダーンはそう言っておれを説得し、自身の強い意志でもってレメゲトンの地位を手に入れた。

ああ、そうだよ。あの時もおれがライダーンをレメゲトンにしたせいで、彼に酷い怪我を

苦い思い出が蘇り、唇をかんだ。

そうか。

シドの瞳は、あの時のライダーンと一緒になんだ。

何度くじけても、また未来を見据える事の出来る強い心。

「だから、どうしても私は……」

「……もう、いいよ」

「ミス・グリフィス、私は」

だとしたら、きっとシドは大怪我をしても、つらい目にあっても、また前を見据えて進む力を持っているはずだ。

おれはきゅつと唇を引き結んだ。

大丈夫。

きっと、シドも大丈夫だ。

たくさんの人と同じように戦争で傷ついたシドにおれにしてあげられるのは、機会を与える事くらいしかない。

「いいよ……おれでいいなら、アレイさんに会うまででいいなら、シド……おれに、ついてこい」

「ミス・グリフィス！」

シドの顔がぱつと輝いた。

おれはこの選択を後悔しない。

後悔する前に、シドを傷つけるすべてのモノから彼を守ってみせる。

シドが戦場の無力を悔やんでおれを守るのなら、おれはあの時守れなかった国の代わりに、おまえだけは守ってみせる。

きつと、これでいいんだよね、アレイさん？

切望したリユケイオンの大地のどこかにいるであろう、自分の導き手に心の中で問いかけて、ようやく窓の外から流れてくる風に気づいた。

その風は、セフィロトとはどこか違う、異国の匂いがした。

## SECT・17 アウラ＝スーン

リケイオンに入ってすぐの街で医者を探した。

おれの左手も深刻だったが、それ以上にシドの容体が危うかったからだ。

医者に、一度縫合された傷が開いている、怪我人にいったい何をさせたんだ？ と問われた時、何も言い返せなかったのは事実だ。

シドを病院に押し込めて、一息。

おれは国境を越えたあたりでずいぶんと元気になっており、左手の痛みもラースの声もずいぶん遠ざかっていたのだが、念のため一日病院で経過を診る事になった。

その診療所にいたのは気の強そうな熟年の女医さんだった。そのヒトはおれの左手よりも、全身に刻まれた古傷の方が気になるようだった。

「……おまえもオンナなんだから、やんちゃするなよ」

アウラ＝スーンと名乗った女医は、おれに向かってポツリとそう言った。

片手にタバコ、ふわふわ天然パーマの茶髪を後ろで無造作にくくった、彫りの深いリケイオンのヒトらしい容姿の彼女は、おれのことをちょうど自分の娘くらい年の頃だ、と言った。

「これはだいたい全部戦争で受けた傷なんだ。これからは気をつけるよ」

「ああ、4年前の戦争か……お前みたいなのがキも参加したのか？」

「……おれ、こう見えても23歳だよ、アウラ」

「はあ？ どう見ても16・7のガキだろうが」

「もう結婚してるし子供もいるよ」

そう言つと、今度こそアウラは目をむいた。

「これで母親？！」

「どうしても国に留まらない理由があつて、子供は知り合いに預けてきたんだけどね」

そう言うと、アウラはふーっと細く煙草の煙を吐いた。

「……まあ、詳しくは聞かんよ。正義つてのは一口に語れるもんでもないからな」

「ん、ありがと」

「ワケアリなのは一目で分かるが、いったい何をした？ なぜセフィロト国を抜けてリュケイオンに来た？」

アウラに聞かれて、おれは一瞬口を噤んだ。

「……おれは、戦争で大罪を犯したんだ」

おれの言葉に、アウラはふっと手を止めた。

「そのせいで、セフィロト国から追われている。でも、おれは罪を償うためには捕まるわけにいかない。だから、リュケイオンに逃げてきた」

「ふーん、お前、グリモワール出身か」

「うん、そうだよ」

「これから行く当てはあるのか？」

「一応ね、知り合いの故郷に向かおうと思ってるんだ」

「どこだ？」

「うん、海を渡って『ソルア』に行こうと思って」

最期のレメゲトン、ライディーンの母の故郷だという大地。世界の中心に位置するその国は『光の国』とも呼ばれている。

「一人でか？ それとも、隣でくたばってるヤツと二人か？」

「シドもそうだけど……他に連れがいるんだ。えと、結婚してる相手なんだけど、先にリュケイオンに来てるはずで、早く探さないと」  
アウラはそれを聞いて眉を寄せた。

「……詮索するようで悪いが、それは先日、セフィロト国の神官がリュケイオンに侵攻した事と関係あるか？」

おれは息を止めた。

それを見て、アウラはすうっと細長く煙草の煙を吐いた。

「リユケイオンにも噂が流れている。セフィロト国の神官は、旧グリモワール王国の天文学者レメゲトンを追ってやってきた、と」

心臓の音が耳元で鳴り響いた。

「そのあと、どうなったって……？」

「私が聞いたのはすべて噂話だ。もしそれが本当だとすれば、レメゲトンは『オリュンポス』に拘束された、と聞いた」

「……オリュンポス？」

「ああ。グリモワール王国にかつて天文学者<sup>レメゲトン</sup>が、セフィロト国に神官<sup>イラ</sup>がいるように、リユケイオンにも政治組織と別に、信仰を促す宗教組織が存在する。その宗教組織を『テオゴニア』と呼び、そこに属し、12の精霊を呼び出す事の出来る職に就いたものを『オリュンポス』と呼ぶのだ。要するに、オリュンポスはレメゲトンやセフィラと同義だ」

「じゃあ、アレイさんはその『オリュンポス』ってヒトたちに連れ去られたってこと　？！」

思わずそう叫ぶと、アウラは手にしていた煙草を床に落とし、ぐりりと踏みつぶして火を消した。

「お前、よくそれでここまで逃げてこられたもんだな。私がセフィロト国とつながりを持っていたら、この瞬間にお前は強制送還だったぞ？」

アウラは大きくため息をついた。  
が、おれは首を傾げた。

「アウラはそんなことしないじゃん」

「だからっ……まあ、いい。気をつける。リユケイオンと言ってもここはまだ国境からほとんど離れていないんだ。セフィロト国の者も多い」

「うん、分かった。ありがとう」

素直にうなずくと、アウラは再び眉を寄せ、とても23歳とは思えん、と呟いた後、一枚の紙切れをおれに渡した。

「これは？」

「町はずれの教会への地図だ。ここはセフィロト国の者も多いから、教会も多くてな。その神父はかなり話の分かるヤツだからここを離れる前に寄ってみるといい。おそらく、宗教組織『テオゴニア』に関しても『オリュンポス』に関しても、お前の知りたい事はだいたい教えてくれるはずだ」

「……その神父さんは、セフィロト国のヒトなの？」

「ああ。だが、気にするな。アイツは多少変わっていて……いや、多少というかなかなり変わっていて、天使にも悪魔にも偏見はない。それで国を追い出された、と言っていたくらいだからな」

「そうなんだ」

それを聞いてほっとした。

「じゃあ、行つてこようかな」

「今からか？」

「うん、今日は元気だし、左手は動かないけど、まあそれはいつもの事だし」

「お前、その左手、本当に診なくていいのか？」

アウラは肩をすくめた。

「うん、動かないのは怪我のせいとかじゃないんだ。それに、触ったヒトがちよつと体調崩したりすることもある……だからアウラには、触ってほしくないな」

「なんだそれは。お前自身は大丈夫なのか？」

「おれは平気。でも、周りの人にとっては毒みたいなものだよ」

「……そうか」

アウラはそれでしぶしぶ納得したようだった。

おれはベッドを抜け出し、部屋の扉に向かった。

「んじゃあ、行ってくる」

その瞬間、おれが開けようとした扉が直前で乱暴に開かれた。

「駄目よ、グレイス。まだ休んでないとだめ」

「ル、ルウナーっ」

扉の向こうから現れたのはルウナーだった。

「私がどれだけ心配したと思ってるの？ まだ病院を出ちゃダメよ。アウラさんも、ちゃんと止めてください！」

きっぱりと言い切ったルウナーの剣幕に負けて、おれはベッドへ逆戻りした。

「……ごめんなさい」

「……まったく」

油断も隙もないんだから、と言ってルウナーはおれにシーツをかけ、ベッドの脇に座っておれの頭を撫でた。

「オリユンポスの事は聞いてしまったみたいね……いま、モーリが情報を集めに出ているわ。他の劇団員も、詳しい事は言っていないけれど手伝ってくれている。大丈夫、ウォルジェンガさんの行方はすぐに分かるわ」

「ありがとう、ルウナー」

「アウラさんがおっしゃった教会についてもいろいろな噂を聞いているわ。もちろん、神父が『人間ではないらしい』という噂もね」

ルウナーの言葉を聞いて、アウラはふっと微笑んだ。

「ふふ、お前はいい友人を持っている」

「私だって伊達酔狂で戦後の国を二つ、横断してきたわけじゃないわ」

肩をすくめたルウナーはとても魅力的に笑った。

「シドもさつき起きたところよ。そっちは隣の部屋だから、あとで会いに行つてあげて」

「うん、分かった」

「お前と違って隣のヤツは少なくとも一カ月、入院してもらうからな。傷がふさがるまではもったかかるだろうが、アイツは納得せんだろう？」

「そう、その事で話があるんだったわ。ねえ、グレイス。今度こそ本当に、リオートⅡシスⅡアディーンの舞台をやるうと思うのよ、ここから少し行ったところに大きな街があるの。そこに移動して、今度こそグレイスが戦女神フレイアの役をやるのよ」



「え、でも、シドとフェリスがやってた剣舞は？」

「モーリがきつとまた誰か拾ってくるわよ」

困ったように肩をすくめたルウナーはくすくす笑った。

「貴方とウォルジエンガさんを拾ってきた時みたいだね」

「ホントだ」

おれもつられて笑い、アウラは呆れたように新しい煙草に火を点けた。

## SECT・18 ウリエル

次の日、約束通りおれはアウラに紹介してもらった教会へと向かっていった。

シドはついていく、と言い張ったが、さすがにそれは止めた。今動いたら、治る傷も治らなくなってしまう。

初めてテントの片隅で出会った時の無口な印象はいつたいどこへ行ってしまったのか。顔の半分を藍色の長い前髪で隠し、フェリスに対してもつつけんどんな態度だったのに。

不思議だなあ。

おれに会って、まるでシドの中に眠っていた何かが目覚めたみたいだ。

いや、きつともとと彼にはそんな素質があっただろう。何しろ、彼は漆黒星騎士団員ブラックルビなんだから。

ところが、おれの隣を歩くルウナーは綺麗な眉を寄せて怒っていた。

「もう、シドにしてもグレイスにしても、自分をもっと大切にしくちやだめよ！ まったく」

ルウナーはそれがどうしても気に入らないようだった。無理しているつもりはないんだけど。

本気で無理をする気なら、アレイさんのメッセージもルウナーの制止もシドの言葉も全部振り切って、何もかも捨ててもアレイさんの後を追っていただろう。

でも、おれはまだここにいる。

アレイさんは絶対に死なないって言ったから、それを信じている。ルウナー、その、神父さんってどんなヒトなの？」

「んー、とにかく、変わり者、っていうのは誰に聞いても言うわね」「変わり者？」

「まあ、あまり物事に頓着しないらしいわ。少なくとも、神父らしくはないみたいね」

「へえー。楽しみだね!」

そう言つと、ルウナーはそうね、と笑つた。

国境に最も近い街、アクリス。

ここからはセフィロト国の築いた国境の壁が連綿と続いているのが見える。

たった壁一枚、それだけなのに、ここは異国だつた。

もともとグリモワール王国はセフィロト国から独立した。そのため、二つの国の文化はとても似通っている。天使と悪魔のように相対するものを信仰したのも必然だつたのかもしれない。

しかし、リユケイオンはディアブル大陸で唯一の民主主義国、それも、グリモワール王国と反対側、ディアブル大陸東岸に面している。接してはいるものの、離れた地点でそれぞれが文明を発展させてきたのだ。

街の雰囲気がまず違う。

セフィロト国側では灰色の石畳を敷き詰めた道を挟んで、クリーム色の壁に派手な色の屋根をした家が立ち並んでいた。どこか重そうな雰囲気を与えていたのだが、リユケイオンの街は白い。

窓が小さく、真っ白な壁をした四角い家がまるで積み木を重ねるように並んでいる。横に、上に、下に、所狭しと住居が立ち並んでいた。

セフィロト国のようなメインストリートはなく、全体的に道幅の狭い細い路地が方々に伸びていた。店も看板を出していたり出していなかったり、セフィロト国では当たり前のように見られた毎朝の市が信じられないくらいだった。

何より、あまり嗅いだ事のない匂いが漂ってくる。

「ねえ、ルウナー。さっきからさ、不思議な匂いがするよ」

そう言うと、ルウナーはにこりと笑って答えてくれた。

「ああ、それはきつと、お香の匂いよ」

「お香？」

「ええ。リユケイオンでは、子供が生まれた時、死者を送る時、誰かが結婚する時、お祝い事があった時、とても香りのいい木を焚く習慣があるのよ」

「へえー」

すうつと吸い込んでみると、とても落ち着く香りだった。

「他の国、特に海の向こうへ広まって、今ではヴェーダ国やクルアーン国のものが有名になっているけれど」

「ルウナーはいろんな事を知ってるんだね。いろんな国に行ったから？」

「ええ、そうよ。リユケイオンに来るのも二回目だもの。二年ほど前かしら、ケルトからリユケイオンに来たのは」

懐かしそうな目で辺りを見渡したルウナーは、何かに気づいて進行方向を指さした。

「ほら、きつとあれだわ。変わった神父さんがいらっしやるっていう教会」

ルウナーの指した方向を見ると、リユケイオンの街に似合わない、大きな十字架をいただいた協会がそこに佇んでいた。

真っ白なリユケイオンの町並みの中に突然現れたセフィロト国様式の建物はとても異様だった。

正面にステンドグラスが構え、屋根の上には大きな十字架。

「行ってみましょう」

ルウナーが茶色の木の扉に手をかけ、重そうにぎしりと開いた。

「こんにちは」

「おじゃまします」

中はとても明るかった。

セフィロト国にある教会と同じ、3人掛けの茶色い椅子がずらりと並んでいて、その正面にはミカエルさんの像があった。

と、その瞬間、ちりりと何かが感覚に触れた。

「……この感覚は」

心臓がどくん、とひとつ脈打った。

とてもよく知る感覚だった。

まさか、でも、そんな……嘘だろうか？

「あー、やっぱり来たか。能力チカラなんぞだいぶ失くしたと思ってたんだがなあ」

並んだ椅子の最前列に、目の覚めるような美しい金髪が揺れていた。

そこから漏れ出るのは、『人ならざる気配』。

「ルウナー、下がって」

おれはこの気配をよく知っている。

「俺様はもう引退してえんだヨ、なあ」

金髪のヒトが立ちあがった。

声のトーンからしてそれほど歳の歳ではないと思っていたが、案の定、振り返った男性は年若い青年の姿をしていた。

「リュシフェル」

そのヒトがおれの中にいる悪魔の名を呼んだ瞬間、額が熱くなった。

「……誰？」

ルウナーを背に庇いながら、おれはその青年に尋ねた。

長い前髪が顔を隠している。

時折ちらりと覗く瞳は真っ赤で、口元には笑みを湛えていた。ミカエルさんの純白の像を背景に立つにはふさわしくない、漆黒の神官服を纏い、手には大きな本を持っている。

「誰、って聞くワリにはきっちり警戒してんじゃねーか、黄金獅子の末裔」

「だっておまえ……」

信じられなかった。

だってここは人間の世界だ。しかも、セフィロト国というわけで

もない。

なのに、この目の前の青年から発せられている気配は

「天使、だろう？」

そう言つと、その青年は長い前髪の間から真つ赤な目を覗かせて、にいと裂けるように笑つた。

「正解だ、黄金獅子の末裔。ダテに柱候補つてわけじゃねえか」  
敵意は全く感じられない。

しかし、好意も感じられなかった。

「あなたがアウラの言つた『変わった神父さん』？」

「アウラに会つた？ 怪我でもしてんのか？」

「おれの友達が怪我してアウラのところにいるんだ」

このヒトは敵？ それとも味方？

「そう経過すんな、黄金獅子の末裔。俺様はお前の敵じゃねえよ。  
ま、味方でもねえけどな」

そう言つて、黒い神官服を着た天使はにっと笑つた。

礼拝堂の脇に造り付けられている小さな部屋に通されたおれとル  
ウナーの前に、暖かい飲み物が置かれた。

先ほどから街に漂っているのと同じ、不思議な香りのする飲み物  
だった。

「ありがとう」

「いえ」

向かいの席で、同じ飲み物を口に運んでいる天使は、事もなげに  
答えた。

長い前髪に隠れて見えづらいが、とても綺麗な顔をしている。

「なんで天使さんがこんなところにいるの？」

「それは長くなるからナシ」

即答。

「じゃあ、名前は？」

「俺様に名乗らせる前にお前が名乗りやがれ」

う、確かにその通りだ。

おれはふう、と息を吐いた。

天使さん相手に嘘をついても仕方がないだろう。

「おれはラック・グリフィス。グリモワール王国のレメゲトンだ」

「まあ、そんな事知ってるけどな」

「ならわざわざ聞くなよ！」

「お前の事なら何でも知ってるぜ？ 何しろ有名人だからな、お前は」

「……」

口を噤んだおれを見て、天使さんは言った。

「俺様はヤコブ・ファヌエル。そうだな、天使としての名つてのな  
ら……」

ふわり、と背に翼が広がった。

大きな4枚の翼が部屋いっぱいに広がった。

「ウリエル、だ」

## SECT・19 ヤコブ「ファヌエル

「ウリエル　?!」

グリモワール王国でコインの悪魔以外にもリュシフェルやメフィストフェレス、ベルフェゴールのように有名な悪魔がいたように、セフィラが召喚する天使以外にも多くの天使が存在する。

その天使たちの中で異彩を放つ存在、それがウリエルだった。

「ウリエルって、あの『孤高の伝道師』?」

「よく知ってんな、グレイシャー「ルシファ」グリフィス」

「有名だもん」

ウリエルに関する逸話は突飛なものが多く、天使の中では天使らしくない、と言わざるを得ない。

人間に協力的な働きをする事がないという点では、天使よりずっと悪魔に近い存在なのかもしれない。独自の考えを持ち、決して折れない。その意思の強さは時に、方向を間違っているのではないかと思われるほどに真っ直ぐだ。

そしてウリエルは、天使でありながら魔界の味方をし、天界の王メタトロンによって追放されたとも言われている。

「お前ほどじゃねえよ、グレイシャー「ロータス」。それともグレイシャー「ル」クロウリーという名にでもなるのか? それともラック「クロウリー」か? いや、お前が最初に名乗ったのはラック「グリフィス」だったな。リュシフェルは確か……そう、ルークって呼んだなあ」

「よく知ってるね」

思わず笑った。

そんなおれの様子を見て肩をすくめたウリエルは翼をたたみ、席に着いた。

「あ、翼閉じちゃうの?　すごくきれいなのに」

「このままいたんじゃ、お前の隣にいる綺麗な人間の口がふさから



なくなっちゃうからな。そりやもつたいねえ。美しさはそれだけで宝だぜ？」

はっとみると、ルウナーが隣で硬直していた。

「大丈夫？ ルウナー」

「……ええ、なんとか」

ルウナーは額に手を当てて首を振った。

「ごめんなさい、ちょっと頭を冷やしたいの。少し、外に出てくるわ」

「うん、分かった」

自ら悪魔を召喚するおれでさえ驚いているのだ。

これまで天使とも悪魔とも程遠い生活を送ってきたルウナーにとつてどれほど驚くことだったか、想像に難くない。

ふらふらと部屋を出ていったルウナーを見送って、おれはウリエルと向かい合った。

「さあ、こつからが本番だぜ、黄金獅子の末裔。お前は俺様の正体なんかよりずっと知りたい事があるんだろう？」

「……ウリエルはほんとに何でも知ってるね」

「その名で呼ぶんじゃねえヨ。俺様の名前はヤコブだ」

「じゃあヤコブ、教えてほしい事があるんだけど」

「何なりと」

ヤコブは金髪の間から真っ赤な目をちらつかせて笑った。

「おれのことを知ってるくらいだから、アレイさんのこと、知っているよね？」

「ああ、知ってる。アレイスターⅡウォルジェンガⅡクロウリー。

それとも、ウォルジェンガⅡロータスと言った方がいいか？ マルコシアスの息子だろ、炎妖玉の息子ガーネットって名をよく聞くな」

マルコシアス。

その名に心臓がぎゅっと掴まれる感覚を受けた。

「……うん、そう」

「知ってるぜ。3日ほど前にリュケイオンに飛び込んできた。サン

ダルフォンのヤツが追っかけてきやがったから追い返しといたけどな」

「え、追い返した?!」

「当たり前だろ、人が大人しく暮らしてるところにわざわざ飛び込んできやがって、ったくもう、ふざけんな」

「んじゃ、アレイさんは生きてるの……?」

「ん? ああ、そりゃあな。怪我はしてたようだが元気だったぜ?」  
頭をがりとかきながら、ぶっきらぼうにヤコブは言い放った。

アレイさんは生きている。

死なない、という誓いを信じていたけれど、改めて力が抜けた。

「生きてるんだ……」

心の底からほつとした。

ずるずる、と机に突っ伏した。

「よかった……!」

その瞬間、麻痺させていた心が動き出した。

約束したから。

必ず生きて、リユケイオンで。

「アレイさん」

会いたい。

会いたい。

会いに行かなくちゃ。

「ありがとう! ヤコブがアレイさんを助けてくれたんだね」

「助けてねえよ。助けるつもりもねえ」

もしかして、このぶっきらぼうな口調とやる気のなさそうな雰囲気  
気は、見せかけ?

本当はもっと優しいヒト?

「じゃあ、アレイさんはどこに行ったか分かる?」

「それは知らねえ。『テオゴニア』がこのこ出てきやがったから  
俺様は逃げたしな」

テオゴニア。

アウラの話にも出てきた。

「その……『テオゴニア』って、なに？ アレイさんはどこへ行ったの？」

「『テオゴニア』ってのは、リユケイオンの宗教組織だ。そうだな、確かにグリモワール王国出身のヤツには分かりにくい概念かもしれないな」

「どういうこと？」

「リユケイオンで国はな、グリモワールやセフィロトと違って、宗教と政治が全く独立してんだよ。要するに、お前の思うような王様や議会のほかに、全く別のヤツがレメゲトンをやってるってことだ」

「王様がレメゲトンを任命するものじゃないの？」

「違うな、王が悪魔を従える、という図式事態が違う。リユケイオンにおいて、王を擁する組織と悪魔を擁する気持ちは別のものなんだ」

「……？」

よく分からない話だった。

悪魔を使役するレメゲトン。レメゲトンを任命するのは歴代のグリモワール王家だった。グリモワール王家が悪魔を統括しているといっても過言ではない。

その二つが分離することはあり得ない、同一のモノだ。

悩み始めたおれを見て、ヤコブは笑った。

「まあ、細かい事は分からなくてもいいんだが、とにかく国家組織とは別の組織がもう一つあると思ってくれ」

「その二つは喧嘩したりしないの？」

「んー、あー、そこは難しいところだが、グリモワールとセフィロトのように戦争を起こすことはまずないだろうな。相互扶助だ、相互扶助」

うーん、ますますよくわからない。

もしグリモワール王国で そんなことぜつたいにしないといいきれるけれど レメゲトンが王家から独立しようと考えたら、悪

魔を擁護するヒトと王家を擁護するヒトとで国が真っ二つに分かれてとんでもない争いになってしまっただろう。

「それ以上考えんのをやめやがれ、黄金獅子の末裔。お前の頭は難しい事を考えるのに向いてねえヨ」

「……分かつてるけどさ」

そんな台詞は言われ飽きた。

「じゃあ、『テオゴニア』ってのが何なのかは分かった事にしてさ」「いや、お前わかってねえよな？」

「そこは分かった事にさせてよ。どうせこれ以上教えてくれる気なんてないくせに！」

「ほー、よくわかったな。阿呆の鳥頭のくせに」

聞きなれた言葉にどきりとする。

そう、このヒトは『孤高の伝道師』ウリエル。

最も鋭い眼力と洞察力を持つウリエルは、この世のすべてを知るとも言われ、予言、啓蒙、解釈の伝道師だ。

「だからさ、結局アレイさんはどこへ行ったの？ もうここにはいないんだよね？」

少なくとも、おれが感知できる範囲に悪魔の気配はないから。

「俺様はテオゴニアが出てきた時点で退いたから、ここからは噂話になるんだが」

そう前置きして、ヤコブは机を指でなぞった。

すると、指が通った部分が光り輝く線になった。

「これがディアブル大陸だと思え。こっち、東が旧グリモワール、そこから内陸のセフィロト、南はアール、北はクトウルフとケルト、そして西側にこのリュケイオンがある」

ヤコブは机の天板に指を滑らせ、さらさらと地図を描いていった。「んで、いまいるのはここな、セフィロトとリュケイオンの国境だ」ヤコブは地図の真ん中あたりを指す。

ぽつ、と青白い光が灯った場所は、いまいるアクリスの街なのだろう。

「聞いたかもしれんが、宗教組織『テオゴニア』にはレメゲトンのように精霊たちを呼び出す事のできるヤツらがいる。それが『オリュンポス』といって12人いるんだが、その12人は国内に散らばっている」

地図の中に、白い点が12個現れた。

「ここからずっと西、首都には主神『ゼウス』がいる。北の国境には女神『ヘラ』、そしてここ、東の国境であるアクリスを担当してんのは、軍神『アレス』というオリュンポスだ」

ほぼ正三角形を描いた3つの点が地図の中で煌めいた。

「<sup>ガーネット</sup>炎妖玉の息子をオリュンポスが連れ去ったというんだったら、おそらく相手は軍神『アレス』とみて間違いねえだろうな」

「軍神アレス」

軍神、という名がつく以上、とても強いヒトなんだろう。

「目的は俺様の知るこつちやねえが、もし本当にアレスが<sup>ガーネット</sup>炎妖玉の息子を連れ去ったとしたら、帰る先はアレスの居城しかねえヨ」

「それはどこ？」

「ここから丸一日ほど西へ向かえ。そしたら、趣味の悪いでつけえ城が建つてゐるからすぐわかるだろ」

「西だね。分かった」

聞いた瞬間に立ちあがっていた。

それを見て、ヤコブは肩をすくめる。

「おいおい、いまから行く気かよ」

「当たり前だよ。場所が分かったんならすぐに行くさ」

「やめとけ。今のお前の状態じゃアレスに返り討ちだぜ？」

「でもっ」

「まあ、落ち着け。茶でも飲め」

ヤコブはひよい、と指を動かすだけで容器を空中に浮かせ、おれのカップにあのいい香りのする飲み物を注いだ。

「今日はいろいろしゃべって疲れたからな。続きはまた明日、教えてやるよ」

「でも、おれ」

「今日は待て」

有無を言わさぬヤコブの言葉に、おれは口を噤んだ。

「明日の朝、もっぺん来い。リュシフェルには俺様も世話になったからな、多少は手伝ってやるヨ」

「ほんと？」

ぱつと顔を上げると、ヤコブは、お前はゲンキなヤツだな、と笑った。

外で待っていたルウナーと二人、病院へと戻った。

そわそわとしながらも大人しく待っていたシドのところへ行き、報告する。

モーリは次の興行をする予定の街を見に行っていて、いなかった。

「クロウリー伯爵の行方は分かったのですか？」

「うん、分かったよ！　どうも、ヤコブが、あ、ヤコブって今行ってきた教会の神父さんなんだけどね、そのヒトが助けてくれたみたいなんだ」

「……人間じゃない、という噂も本当だったわ」

未だにシヨックを引きずっているらしいルウナーはため息とともに言った。

「ヤコブって、天使だったんだ。ウリエルっていうんだけど、シド、知ってる？」

そう尋ねると、シドは大きく目を見開いた。

「貴方には警戒心というものが無いのですか？」

あ、やべ、シドのスイッチはいつちゃった。

無口そうにみえたシドはものすごく熱血で、頑固で、正直で、まっすぐで……説教魔だった。

「何のためにセフィロト国を抜け出したか、忘れてしまわれたのですか？」

いや、なんとなくそんな気はしてたんだけどさ。

淡々とした口調ながら、よく動くなあとシドの口元をじーっと見ていると、それに気づいたシドがおれに向かっていった。

「聞いてらっしゃいますか？」

「あつ、ごめん、聞いてなかった……」

正直に答えちゃった。

隣のルウナーがバカね、という顔をしていた。

シドはほんの少しさえ表情を動かさなかったが、怒らせたのは確実だった。

藍色の視線が零下まで冷え込んだ。

「ところで」

「あ、はい、なんでしょうか」

思わずシド相手に敬語。

「クロウリー伯爵の行方が分かったとおっしゃいましたが」

「あ、うん、そうなんだ！」

おれはぱつと顔をあげた。

「それ、私も聞きたかったの。ちょっと……驚きすぎて、とても話に参加できなかったもの。同じ部屋にいる事が無理だったわ」

ルウナーがそう言って困ったように笑った。

「……俺も、目の前にしたら平静でいられる自信はない」

シドがぼそりと呟いた。

やっぱり天使って、そういうものなのかな？

「で、グレイス。ウリエルは……ヤコブ」ファヌエル神父はなんておっしゃったの？」

「あのね、ここから一日くらい西へ行つたところに、軍神『アレス』の居城があるんだって。そこにいるんじゃないかってヤコブは言ってたよ」

「軍神アレス、というとオリュンポスですか」

「シド知ってるの？」

「常識です」

おお、常識ときたか。

これは余計な事を言わない方がよさそうだ。

「あら、その街ならいま、モーリが視察に行ってるわよ？」

「え？」

「ほら、今度こそ革命少女リオート」シス「アディーンの舞台を演<sup>や</sup>るっていったでしょう？ その街が、その軍神アレスの居城がある



場所なのよ」

「ほんとに？」

「モーリが帰るのは明日以降になると思うけれど、その報告を聞いたうえで劇団全体を移動させる予定だったのよ。この街に寄ったのはあくまでシドの治療の為だから」

シドは眉を顰めた。

それを見たルウナーが先手を取る。

「ちなみにシドは最低でも一ヶ月は病院から動かない事。それが最低限、私が妥協できるラインよ」

「それはおれも賛成。こんな状態じゃ、おれだってシドを連れていくわけにはいかない」

二人揃って言うのと、さすがにシドは言い返せなかったらしい。きゅつと眉間にしわを寄せて黙りこんだ。

部屋に沈黙が下りる。

その沈黙を破ったのは、大きな足音だった。

「おい、グレイシャー」

ばん、と荒く扉を開けたのは女医のアウラ。酷く不機嫌そうな様子だ。

「あれアウラ、どうしたの？」

「お前、ヤコブを動かしたのか」

「動かす？」

首を傾げると、アウラは大きくドアを開いて部屋に入ってきた。そしてその後ろからついてきたのは。

「いるかあ？ 黄金獅子の末裔」

「あれ、ヤコブ」

先ほど教会で別れてきたばかりの神父だった。

長い金髪の間から深紅の目を光らせて。

「まだいたか。お前ならすぐにでも行っちまいそうだったから心配したんだぜ？」

「明日もう一回会って約束したじゃん」

そう言つと、ヤコブは肩をすくめた。

「何だ、素直だな」

「おれは約束破ったりしないよ」

唇を尖らせてみせるとヤコブは、それは失礼したな、と笑った。

「だが、ちよつとマズい事になつてるのが分かつたもんで、先に来たんだヨ」

その声に真剣味を感じて、おれは思わず声のトーンを下げる。

「何があつたの？」

尋ねると、ヤコブは金髪をさらりとかきあげた。

一瞬だけ整つた顔立ちが露わになる。白い肌に似合う深紅の瞳、おれと同じかそれより若いくらいの歳に見えるが、本当のところはいつたい何歳なのか。すつきりとつり上がった目は深い叡智を感じさせた。

その深紅に鋭い光を灯し、ヤコブは言った。

「軍神アレスがやりすぎたんだヨ」

「何？ どういう事？」

「炎妖玉の息子が弱つてゐるのをいいことに、支配下に置きやがつた」  
ガーネット

「?!」

アレイさんを支配下に?! いったい、どうやって?!

思わず息をのんだ。

とん、とおれの額のリュシフェルの印について、ヤコブは言った。

「落ち着けよ、黄金獅子の末裔。俺様はリュシフェルに借りがある。」

その憑代であるお前を無茶に放り込むわけにはいかねんだ」  
ヨリシロ

どうしよう。

心臓の拍動が速まっている。

今すぐに、アレイさんのもとに行きたい。

「まずは情報を集めてからだな……」

話を続けようとしたヤコブの額に、ぴしゃりと女医アウラの掌がヒットした。

「待て、ヤコブ。話が見えん。私にも、そこで呆けている美人と犬にも分かる様に話せ」

まるで息子を叱るような口調で。

「アホか、アウラ。聞いたら戻れねえぜ？」

「それを言うなら、お前の正体を知った時点で戻れなくなっている、だろうが」

アウラの言葉で今度は特大のため息を吐きだしたヤコブは、先ほどから話についていけないシドとルウナーを見て、肩をすくめた。

「さあ、どうするヨ、黄金獅子の末裔」

「おれが決めるのか?!」

明らかに、ヤコブが殴りこんできて話がややこしくなった形なんだけれど。

「ヤコブ、お前結構、めんどくさいヤツだな」

「んー？」

誤魔化すように口元を笑いの形にしたヤコブを見て、おれはため息をついた。

「でも、ヤコブはおれのこと手伝ってくれるって言ったよね？」

「ん、まーな。正確にはお前じゃなくリュシフェルだが」

「ありがとう、ヤコブ」

それを確認してから、最初に女医に向かって尋ねた。

「アウラは、おれが頼んだら一緒に来てくれる？」

「お前に興味があるからな、ついていつでもいい」

「ありがとう、アウラ」

次に、シドの方を見る。

「シドはどうせ一人でここに留まる気はないんだろう？」

「勿論です」

迷いなく返答した藍色の瞳に秘めた意思の強さは、とても心地よかった。

「ありがとう、シド」

最後に、おれはルウナーに確かめる。

「ごめんね、ルウナー。最初に頼んだのはリュケイオンに入るまで、  
っていう約束だったんだけど……もう少しだけ、一緒にいてくれる  
？」

おそろおそろお願いすると、ルウナーは微笑った。

とても魅力的な笑顔で。

「グレイスはみんな巻き込んだじゃうのね。無口だったシドも、リュ  
ケイオンの人も、人だけじゃない、天使まで」

「ヤコブがいるのはおれじゃなくてリュシフェルの為だよ」

「それでも、よ」

ルウナーが笑う。

「不思議なのよね。自分の事より他人のことばかりで、一生懸命  
で……グレイスを見ていると、放っておけなくなるの。一緒に頑張  
ってあげたくなるの」

さらりと長い銀髪をかきあげて、澄んだ青い瞳をおれに向けた。

「大丈夫よ、私は貴方がウォルジェンガさんと再会して次の目的地  
に向かえるようになるまで貴方をサポートするわ。きっと、モーリ  
も同じ事を言うはずよ」

「ルウナー」

おれは生まれてからこれまで、あまりにも普通とかけ離れた生活  
を送ってきたかもしれない。

15歳まで塔に幽閉され、グラシャ・ラボラスと契約してグリフ  
イス家を滅亡させた。そしてリュシフェルに額の印を刻まれて、レ  
メゲトンになって、戦争に行つて、大切なものをたくさんなくして  
そして、結婚してようやく幸せになったと思つたら全部壊されて、  
子供を遠くへ置き去りにして国境を越えて。

平穏を願つてもかなわない。

それは、身にしている事だった。

でもそれ以上に、おれは周囲のヒトに恵まれている。

「ありがとう、みんな」

大丈夫、おれはまだ戦える。

くじけそうになるたび、心の中で呟いてきた台詞を繰り返した。

「軍神アレスのところに行こう」

これまでずっとアレイさんはおれを助けてくれた。

今度はみんなの力を借りておれが助けに行くよ。

だから、待っていて

SECT・21 老師父

この街から移動するのはモーリが視察から帰ってきてから、とみ  
んなで決めた。

その日の夜、おれはこっそりと病室を抜け出した。

夏が近づいてきている外の空気は、ひやりとしたが寒くはなかつ  
た。空を見上げれば、夏の星座が輝いていた。

さそり座のアンタレスは東の空に。しし座のレグルスは西の空に。  
それを指でなぞる様に手を伸ばし、つないでいく。

「眠れねえのか？」

背後から突然声がした。

はっとして振り返ると、そこに立っていたのは……天使だった。

「ヤコブ」

天使の翼が4枚、夜空に浮かび上がっていた。

金色の髪がふわりと風になびいて、深紅の瞳がちらりと覗いた。  
美しい天使は、おれに向かって手を差し出した。

「どうせ見るために外に来たんだろうが」

「ヤコブは本当にすごいね」

肩をすくめて差し出された手をとると、天使はふわりと翼をはた  
めかせ、空へと飛びあがった。

そのまま、病院のある建物の上まであがると、おれをその屋上に  
下ろした。

リュケイオン特有の小さな窓がはめ込まれた白い積み木の街が、  
寄せ集まる様に遠くへ続いているのが見えた。所々、窓から漏れる  
明かりはまるで夜空の星のようだった。

おれはゆるく包帯を巻いただけの右手を空にかざした。

「アガレスさん」

右手に刻まれた紋章が熱くなり、ばさりと翼の音がした。

金の目をした鷹が爪を立てないよう優しくおれの肩に降りてきた。

翼が頬を撫でて、くすぐったくてくすりと笑った。

「久しいな 幼き娘」

鷹からしゃがれた声が漏れる。

「うん、やっとセフィロト国を抜けたんだ。ずっと呼んであげられなくてごめんね」

それに応えるように、鷹は鼻先をすりよせた。

懐かしい悪魔の気配に、ほっとした。

悪魔を召喚すれば居場所がばれてしまうため、セフィロト国を横断する間はずっと隠してきたのだった。

「炎妖玉の子は 捕われたようだな」  
ガーネット

「うん、いまから助けに行くんだ。アガレスさんも手伝ってくれる？」

「無論」

「ありがとう！」

やっぱりおれは、ヒトに恵まれていると思う。

ヒトだけじゃなく、ヒトじゃない存在にもとても恵まれている。

「そうだ！ ヤコブが手伝ってくれるって言ってくれたんだよ！」

ヤコブを示すと、金目の鷹はぶるる、と首を振った。

「ウリエル 人間になったという噂は 本当だったか」

「お久しぶり、老師父。傷の具合は如何かな？」

「お前を見ると 盲いた目が 痛む」

「それは大変だ」

肩を揺らして笑ったヤコブは、金目の鷹に深々と頭を下げた。

「すまなかった。あの時はああするしかなかった。そうでなければエリヤが老師父を殺していただろうからな」

「ふふ 恨んではおらんよ」

金目の鷹は、ふわりとおれの肩を離れ、空で鋭く一回転した。

瞬きするような刹那、その場に立っていたのはシルクハットの老紳士だった。

「お主まで この幼き娘に 加担するか」

「……俺様はリュシフェルに借りがあるからな」

ヤコブはぼん、とおれの頭に手を置いて柔らかに微笑んだ。

「さて 幼き娘 我を呼んだのは ウリエルとひき会わせる為ではなかるう」

アガレスさんは高貴な笑みを口元にたたえた。

「うん。少しだけでいいんだけど、西の方にある軍神アレスの居城が見たくて」

「千里眼、か」

ヤコブが呟いた。

「幼き娘は 古の黄金獅子と 同等の能力を 有しておるよ 無論 お主にも比肩する」

「俺様はもうだめだ。人間界に来てから、能力はほとんどなくなっちゃった。いま老師父と戦ったら、確実に俺様の負けだ」

ヤコブは肩をすくめた。

「あれ、でもヤコブはサンダルフォンを追い払ったって……」

「サンダルフォンは理由<sup>ワケ</sup>あつて俺様に頭があがんねーのさ」

「そうなの？」

驚いて見せると、ヤコブは楽しそうに笑った。

「お前は素直だな。黄金獅子とは大違いだ」

「黄金獅子っておれのご先祖様の事だよね」

「ああ、そうさ。ヤツは強かった。本来ならヤツが柱になる予定だったんだぜ？」

「柱……」

悪魔が、天使が、何度も口にする『柱』。

ヤコブもきつと、聞いたつてその意味は教えてくれないんだろう。世界の理。柱。分かたれた世界。

おれには分からないことだらけだ。

分からなかったから、アレイさんと二人、ここまでやってきたんだけれど。

「当時の グリモワール王国にとって 黄金獅子が消える事は 考



えられぬ 黄金獅子は 魔界の王と契約し グリフィスの血脈に枷をかけた」

アガレスさんがヤコブの言葉を引き継いだ。

「我は 幼き娘と 炎妖玉ガイネットの子を 擁護する 無論 マルコシアスも クローセルも フラウロスでさえ」

「はは、フラウロスを手に入れたか」

「フラウロスは今でもおれの言う事を全然聞かないよ……アガレスさんもだけどね」

口を尖らせると、ヤコブは笑った。

「契約印を見てもいいか？」

「いいよ、と右手を差し出した。」

ヤコブは右手に巻かれた包帯をするすると解いていく。

「老師父とフラウロス、それにフェネクスにアイム……はは、分かりやすく炎系だな。黄金獅子の血筋らしい」

「グリフィスは炎 クロウリーは風 ファウストは水 長い間 それぞれが 守ってきた」

「へえー」

アガレスさんは物知りだ。

ヤコブもきつといろんな事を知っているんだろう。

孤高の伝道師ウリエル。

このヒトはどうしてリユケイオンの片隅で神父になったんだろう。なぜ、凄まじい力を持つ天使でありながら人間の中で暮らしているのだろう。

ふと気になって、質問が口をついていた。

「ウリエル、どうしてウリエルは人間界にきたの？」

「だからその名を呼ぶなって言っただろ」

とん、と額のリュシフェルの印について。

右手の包帯を巻きなおしたヤコブは背の翼を広げた。

「明日にはここを発つんだからな、しっかり寝とけよ？」

「うん、ありがとう」

そのまま飛び立っていった天使を見送って。

「よし、じゃあ久しぶりだけど、力を貸してね、アガレスさん」

星から方向を決めて、西の方角に狙いを定めた。

アガレスさんの力が全身に満ちる。

神経を集中させると、視覚が、聴覚が、触覚がみるみる鋭敏になっていった。

千里眼

もともと鋭いおれの感覚は、悪魔の力を借りて人知を越えたものになる。

おれの体はここにありながら、ずっと遠くの街に感覚が飛んでいた。

西の地平線に、大きな街があった。この街アクリスと同じように、白く四角い積み木を積んだような、きゅつと寄せ集まった都市だ。しかし、その規模はアクリスの比ではないだろう。

そしてその街の中央には、見た事のない形の建物が構えていた。何だろう？

平たい円柱状の建物だが、大きな柱がぐるりとそれを取り囲むように支えている。夜だから分かりづらいけれど、あれはきっとこの街の建物を創る白い壁と同じ素材だ。

天井部分はよく見えない。

居城というよりは、グリモワール王国にあった闘技場に似ている気がした。

柱に支えられた上部には、見張り塔のような建物が幾つも伸びている。

その小さな窓から中に見えるのは

窓の中を覗こうとしたその瞬間、バチン、と大きな音がした。

「うわぁっ！」

弾かれるようにして目をそらした。

頭ががんがんする。

「アレスに 気づかれたな」

アガレスさんが淡々と言う。

「気づかれた？ この距離で？」

ヤコブの話によると、あの街までは歩きで丸一日かかる距離なのだ。

「用心せよ 幼き娘」

いつものように唐突に、アガレスさんはかすむ様に消えた。

「……軍神アレス」

いったいどんなヒトなんだろう。

アレイさんを支配下に置いた、とヤコブは言った。

いったいどうやって？

助けるって言ったけど、おれはちゃんとアレイさんに会えるんだ  
ろうか？

「……だいじょうぶ」

みんながついてるから。

「待ってて」

もう一度だけ、はるか西にいる彼に呼びかけて。

おれは決意を手にした。

## SECT・22 フォラス

モーリが帰ってくるのが待ち遠しくて、シドの病室の窓から外を眺めていた。

「遅いなあ……」

「さすがにまだかかるわよ」

シドとおれが勝手に抜け出さないよう見張るためなのか、ルウナもずっと一緒にいた。

ベッド脇の椅子に座ったルウナはケルト地方の民族衣装に細かい刺繍をしているようだ。視線を落として器用に針を動かしていた。シドはベッドに横たわって目を閉じていた。

眠ってはいないと思うけれど、はやく回復しようとしているのだろう。

おれも邪魔をしないように静かに待つ事にした。

出窓に頬づえをついて、ぼんやりと街を見渡す。

ここは二階だから、必然的に細長く伸びる道を見下ろす事になるのだが、昼間だというのに人通りが少ないのに驚いた。この街、アクリスはおそらく、かつておれが暮らしていたカトランジェとそれほど変わらない大きさだろう。

でも、店がひっそりと商売をしているせいなのか、どことなく静かな印象を受けた。

昨日見たあの大きな街は、いったいどんな場所なんだろう。そしておれが千里眼で見ている事に気づいたという軍神アレスは、いったいどんなヒトなんだろう。

ヤコブの言い方からして、敵対関係になりそうな雰囲気だったけれど、おれは争う気なんてない。

でも、もし絶対にアレイさんを返さないって言われたら、おれはいったいどうするんだろう。

戦争でセフィロト国に捉えられたライディーンを救出するために

ディファンクタス牢獄を破った時のように、また争いを起こしてしまうんだろうか？

分からない。

胸の中をぐるぐると不穏な感情が回っていた。

「どうしたの、暗い顔して」

気がつくのと、刺繍をしていたはずのルウナーがすぐそばまでやってきていた。

「うん、あのね、軍神アレスと争わずに済めばいいな、と思ってそれを聞いて、ルウナーははっとした顔をした。

「……グレイスは本当にすごいわね。たまにびっくりするわ」「何が？」

「だって、私ならきつとこんな状況で争わずに済めば、なんて考えられないもの。もし誰かが、たとえばモーリを攫っていったしたら、相手を殴り飛ばしてでも取り返そうと思うわ」

「だってまだ会ったこともない相手なんだよ、どうなるかなんて分かんないよ」

「そうよね」

優しく笑ったルウナーは、おれの見ていた窓の外に目を向けた。つられておれも外をみる。

「あら、珍しい。野良犬かしら？」

人気のない道には、いつの間にか一匹の犬が立っていた。

すらりとした体型とつやつやな毛並み。とても野良とは思えない。立派な茶色のコリー犬だった。

「あれ……？」

その犬から、不思議な気配がする。

よく知っているその気配は、おれの持つコインやヤコブから感じる気配と一緒だった。

見れば、その犬の額にはきらきらと光る大きな青の宝石が埋め込まれていた。

その立派なコリー犬は、すっとおれを見上げた。

まるで、こつちへ来いと誘うように。

「賢そうな犬ね。まるで話しかけてくるみたい」

ルウナーが感心している。

当たり前だ。

だって、あいつはおそらく

「ごめん、ルウナー。ちょっとおれ、あいつに用があるんだ」

ぱつと窓枠に手をかけ、出窓に飛び乗った。

同時に窓を開け放つと、外から強い風が入り込んできた。

あの犬はまだ、おれを見ている。

風に目を細めたルウナーがおれを止める前に、おれは窓から飛び降りた。

ルウナーの叫びを背に、ざつと道に着地したとたん、コリー犬は弾かれるように走り出した。

速い！

おれは思わず悪魔の名を呼んでいた。

「アガレスさん！」

金目の鷹がばさりと翼をはためかせ、おれは人間にはあり得ない速度でアクリスの街を駆け抜けた。

何で？

何で、あいつから悪魔の気配がするんだ？

コリー犬のふさふさした尻尾を追って、細い道をかけていく。視界の両端を白い壁が飛び退っていく。

文字通り矢のように駆けていくコリー犬が速度を緩める気配はない。

「待てよ！」

人間の言葉は分かるはずだから、おれの言葉だって分かるはずなのに、全く足を止めようとはしなかった。

「くそっ……」

街を駆け抜け、連綿と続く国境の壁にそってさらに走っていった。いったいあいつは、おれをどこへ連れて行こうとしているんだ？

「はい、すーっぷ」

その瞬間、目の前を人影が横切った。

コリー犬を追うのに必死だったおれは、必然的に転がる様にしてとまるしかなかった。

地面を転がり、ぱつと顔を上げたおれの目に飛び込んできたのは。

「よーお、グレイス。今日もかーわいいねえ」

金髪に黒ニット帽、へらへらとした笑みをたたえた青年が立っていた。

「フェリス　?!」

おれを先導するように走っていたコリー犬がフェリスに寄りそう。

「ありがとなー、フォラス」

すり寄ってきた犬を抱きかかえるように撫でるフェリス。

その犬からは、人間界のモノではないものの気配がするのに。

「フェリス、お前、その犬」

「へへ、いいっしょ？　オレっちの新しい相棒」

犬から離れて立ちあがったフェリスの首に、見慣れた金色を放つペンダントが下がっていた。

何で？

何でフェリスが？

「第31番目のコインの悪魔、フォラスだっ」

その言葉に愕然とした。

「なんで？　フェリス、お前はセフィロト国の人間じゃなかったのか？　なんで悪魔と契約してんだ……？」

「へっへー、びっくりしただろ！」

嬉しそうに笑うフェリスの首には、確かに見慣れた悪魔のコインが揺れている。

それも、二つ。

一つは第31番目の悪魔フォラスだとして、もう一つは？

「オレっち、悪魔を召喚したアレイスター・クロウリーに瞬殺されちまってさあ、シアさんが不憫に思っ、て、悪魔の国から見つけてきたコインをくれたんだ」

「……！」

確かにロストコインの中には、国外へ流出したものも多い。

しかし、セフィロト国は悪魔を毛嫌いしている。特に、天使を召喚する神官<sup>セフィラ</sup>たちはコインを見つければ即破壊するものだと思っていた。

それなのに、コインを保管していた。

それどころかフェリスは悪魔と契約している。

全身が震えた。

金目の鷹がふわりとおれの肩に降りてきた。

「アガレスさん、フォラスさんって、どんなヒト？」

「フォラス 疾風の速度の拳を振るう 強き肉体の拳闘士 用心せよ 召喚者の身体能力を 極限にまで高めるだろう」

それを聞いてフェリスはセルリアンの瞳をキラキラさせて楽しそうに笑った。

「正解っ！ フォラスは強いんだぜー！」

ふさふさの尻尾を振ったコリー犬は、空気に溶けるように消えた。その気配はフェリスを包み込む。

ぞわり、と背中を悪寒が貫いた。

「……やっぱりフェリスは、おれの敵なの？」

「んー、そーだね。シアさんがグレイスの事を殺してほしいと思ってるなら、オレっちはそうするだろうから」

首を傾げながら、フェリスは両手にナイフをずらりと並べた。

「やっぱ、敵かな」

その瞬間に放たれる殺気。

「……っ」

動かない左手を庇って、思わず右手でショートソードを抜きはなっていた。



フェリスは敵じゃないから　　そう言って、剣を収めたのは数日前の出来事だったのに。

「ごめんねー、グレイス」

辺りにヒトがいないのは幸いなのか。

おれはどうにかしてこの場を離れる事を考えていた。

悪魔の加護がない状態でも強かったフェリスだ。片手しか動かない今のおれでは、フェリスを戦闘不能にすることは出来ないだろうから。

「フラウロスさん！」

ごう、とおれの周囲を炎が取り巻いた。

蒼炎にまで昇華した灼熱の炎に巻かれ、周囲の景色が陽炎に揺れた。

現れたのは、地獄の業火を操る悪魔、第64番目フラウロス。灼熱の毛並みをした獣は、天に向かって高らかに吠えた。

アガレスさんもフラウロスさんも、おれが戦争前から契約している悪魔だった。それゆえ、二人の力を借りて闘う事には慣れていた。「うわ！　フラウロスじゃん！　すっげえ！　カッコいい！　初めて見た！」

「そりゃフラウロスさんはカッコイイよ。それに、強いしね」

「いいなー」

「ダメだよ、フラウロスさんはおれと契約してるんだ」

最初はコインの契約で、次は紋章契約で。

戦場で天使のカマエルさんを吸収してからもまだ一緒にいてくれる。

アガレスさんの加護が全身をめぐっているからここに立っているけれど、そうじゃなかったらとてもフラウロスさんの発する熱には耐えられない。

「フォラス」

地獄の底から響くようなフラウロスさんの声。

「天界に　加担する　倒す」

相変わらずのカタコトだったが、どうやらフォラスさんがセフィロト国のフェリスと契約した事を怒っているらしいことは分かった。おれもフェリスに視線を戻した。

「へへ、グレイスもやる気だねえ、オレっちだって負けないよ！」  
にい、と笑ったフェリスは、とんとん、とその場でステップを踏んだ。

来る。

おれは、右手のショートソードを強く握った。

## SECT・23 フェネクス

国境に横たわる壁がすぐ近くに見える。

この一枚を越えるのに苦労したのはつい先日のことだった。

「フェリスはおれのこと、セフィロト国に報告しなかったんだな」

「んー？ だつてオレっち、契約で忙しかったし」

悪魔との契約。

「どうやって契約したの？ おれの方はじいさまが魔法陣をかいてくれたけど、セフィロト国にはそんなヒト、いないだろう？」

「いや、いるよ。魔法陣が描けるヤツ」

事もなげに言ったフェリス。

「え、誰？」

「悪魔の国から来たメガネのおっちゃん」

「ごめん、フェリス。ぜんぜんわかんない」

「あー、えーとなあ……」

首をひねるフェリスは、どうやらおれと同じでヒトの名前を覚えるのが苦手らしい。

「あ、そうそう。メイザースだ。サミュエル・L・メイザース。もともと悪魔の国でレメゲトンしてたって聞いたけど？」

「メイザースさん?!」

サミュエル・メイザース侯爵。旧グリモワール王国のレメゲトンの一人で、戦線に立つ役ではなく、王都の書庫に籠るのが仕事の情報戦担当だった。同じレメゲトンではあったのだが、戦線に立っていたおれはほとんど会った事がない。

確か、メガネをかけた優しそうな人だった気がする。

どうしてそのヒトがセフィロト国に？

愕然としたおれを見て、フェリスが笑う。

不意をついて飛んできたナイフを、間一髪、ショートソードでたたき落とした。

フェリスの攻撃には予備動作が全くない。

「メガネのおっちゃんの本さえ読めればどこでもいいらしいよ?」

おれの疑問に答えたフェリスは、その瞬間、一気におれとの間合いを詰めた。

疾い!

下から切り上げてきた細身のナイフを、炎を纏った手で弾いた。

じゅう、と鈍い音がしてナイフの先が蒸発した。

「うお、溶けた?!」

「フラウロスさんの炎だからねっ」

溶けてしまったナイフをすべて放り投げ、フェリスは素手で向かってきた。

人間にはあり得ない速度で拳が飛んでくる。

半端な速度なら拳を掴んで逆に引つ張りこんでやるのだが、それどころではない。

おれの動体視力でも、目視して避けるのがやっとだった。

鋭い手刀が頬すれすれを掠めていった。

焼けるような痛みと共に、皮が裂ける感覚があった。

「信じらんねえー! この速さで避けるなよっ!」

次々繰り出される攻撃を避けまくるおれに、フェリスはさらに怒涛の攻撃を仕掛ける。

逃げる暇など与えてはくれなさそうだ。

「フラウロスさんっ!」

おれの号令で、灼熱の獣はフェリスの背後から襲いかかった。

気づいたフェリスは体を反転し、その腹に神速の殴打を叩き込む。フォラスさんに強化されたその攻撃は、完全体のフラウロスさんを吹っ飛ばした。

その隙におれはフェリスと距離をとる。

この短い間に息が乱されていた。

全力の戦闘はいつぶりだろう。

闘いたいと願った事などないけれど、戦闘の中に身を置くと高揚

する自分を抑えられなくなってしまうそんな事があるのも否認ない事実だった。

でも、いまはそこどころじゃない。

「ごめん、フェリス。いまはお前の相手をしてる場合じゃないんだ」  
右手の包帯の端を口でくわえ、するする、と解いていった。

そこに刻まれた5つの悪魔紋章。

召喚したアガレスさんとフラウロスさんの紋章は、すでに鈍い漆黒に輝いていた。

「うつわーすげえ！」

紋章だらけのおれの右腕を見て、フェリスが肩をすくめる。

「グレイスはいつたい何人と契約してるわけ？」

「……7人」

おれは、高らかに悪魔の名を呼んだ。

「フェネクス！」

黒々とした魔法陣が発動し、さらに一体の悪魔が姿を現した。

甲高い鳴き声が周囲に響き渡る。

晴れた空に深紅の翼が翻った。

「あつい！ あつい！ あついっ！ やめろ フラウロス！ 死ね

！ 魔界にかえれ！ このバカ！」

炎のような翼をもつ巨大な鳥が、見た目にそぐわない少年の甲高い声でぎゃあぎゃあとわめいた。

不死鳥とも呼ばれる第37番目の悪魔、フェネクス。燃えるような羽根の中に、金色の瞳が輝いていた。

「帰れ フェネクス」

フラウロスさんも負けじとフェネクスに悪態をつく。

地には灼熱の獣フラウロス、空に不死鳥フェネクス。

相性の悪い炎の悪魔同士が睨みあった。

「うわあ！ フェネクス！ すっげ！ フラウロスとフェネクスだ！ すっげえええ！」

フェリスは感動しっぱなしだ。

「フェネクス！ フラウロスさんと喧嘩しないで！ おれだって熱いの我慢してんだから！ フラウロスさんもフェネクスに向かって炎あげないで！」

アガレスさんの加護がなければ、この場に立っていることなんて不可能だ。

フォラスさんの加護を受けているとはいえ、フェリスもさすがに熱かったのだろう。腕で額の汗をぬぐっていた。

「まだ他にもいるんだろー？ ほら、もっとたくさん紋章あるじゃん」

嬉しそうに俺の方に寄ってきた。

フラウロスさんとフェネクスによって出来た炎の渦の中を、何事もないかのように歩いてくる。

その平然とした様子に、狂気を感じる。

フェリスはきつと、快楽を求めてヒトを殺す人間だ。

「来るな、フェリス」

思わずショートソードを突き付けた。

友達になれるかなって思ったのに。

「フラウロスさん！」

再び名を呼ぶと、フェネクスとけん制し合っていたフラウロスさんはぱつとこちらへ駆けてきた。

そのままフェリスを炎の渦に包みこむ。

フォラスさんの加護があれば、フェリスが死んだりすることはないだろう。

「フェネクス、こっち！」

ショートソードを鞘におさめ、天高く右手を掲げると、フェネクスはまっすぐにおれのもとへ降りてくる。

地面すれすれを飛行したフェネクスの背に飛び乗った。

「お願いフェネクス、このまま街の反対側まで行つて」

「りょーかいだよ るーくっ」

かわいらしい声で返事をしたフェネクスは、すぐに高度を上げた。

フォラスさんに空を飛ぶ能力はないはずだ。  
眼下に、フラウロスさんの炎を確認する。

この高さなら大丈夫だろう。

「フラウロスさん、ありがとう！ もうだいじょうぶだよ！」

そう叫ぶと、フラウロスさんの炎が消えた。

魔界へ帰ったのだ。

はるか下に、フェリスがこちらを見上げているのが見えた。

怪我はしていないようだ。

ほっとして全身の力を抜いた。

このまま逃げよう。遠くまで、ここから西に見えるあの場所へ行ってもいい。フェリスを完全にまいてからルウナーたちのもとへ戻ればいい。と、そこまで考えてはつとした。

まさかフェリスはまたシドを傷つけたりしないか？

一緒にいるルウナーは？ アウラは？

さつと血の気が引いた。

再び地上に視線を戻す。

が、そこにフェリスの姿はなかった。

「いったいどこに？」

猫のような細身のセルリアンの瞳をした青年の姿を探してきよろきよろするおれの背後から、突如、声がした。

「油断しちゃだめだよー、 그레이ス」

ぞわりと全身の毛が逆立つ。

考えるより先に抜刀し、刃を横に薙いでいた。

きいん、と金属音が響く。

同時に首筋に痛みが走った。

「ああもう、動かないでよ。もうちょっとだったのに」

振り返った俺の目に飛び込んできたのは、片翼の悪魔

紫の翼

を一枚だけ背に広げたフェリスの姿だった。

一瞬遅ければ頸動脈をやられていた。

首の傷を確認してぞっとする。

「……飛べたんだ」

「オレっちが契約したのはフォラスだけじゃないからね  
空から逃げる事は不可能。」

フェネクスの背から飛び降り、アガレスさんの加護を解いた。

同時に、フェネクスの纏った炎がおれに吸い込まれるように消える。

全身に不死鳥の加護がいきわたるのを確認し、フェリスと向かい合うように空に浮いた。おれの背には炎の翼が広がった。

「おれはもう充分なんだけど」

「だめだめ、逃げるなんてオレっちは許さないよ」

首を横に振ったフェリスを見て、おれは覚悟を決めた。

「今日はおれ、素手じゃないよ？」

「いいよ、オレっちは今日、武器も悪魔も使うから」

平等に、とでも言いたげに。

「後悔するなよ、フェリス」

「それはオレっちの台詞だもんね」

フェリスは、猫のような目をきゅっと細めて笑った。

「第二回戦のはじまりだ」



## SECT・24 シャックス

フェリスは強い。片手では絶対に勝てない相手だ。全快のときだって真つ向勝負で勝てるかどうか分からないのに！

時間をかけることに得はない。

短時間で決めてやる。

フェネクスの加護を全身に廻らせ、右手のショートソードを強く握りしめる。

「今度は最初から全力だ」

「いーねえ、オレっち、グレイスにはそういう表情の方が似合うと思うよ」

片翼のフェリスをしつかりと見据えた。

空中戦はおれの最も得意とするところだった。

ふうえん  
風燕と千里眼。

全力で、一瞬でカタをつけてやる。たとえ、フェリスの召喚した悪魔がどんな能力を持っていようと。

ほんの一瞬でいい。それは、おれにとって一瞬じゃない唇を引き結び、全感覚を集中させた。

その途端、周囲の時の流れが急激に遅くなった。

もともと鋭いおれの五感、悪魔の力を借りて人知を越えたものになる。

全身で風を読み、相手の視線で攻撃を予測し、鼓動で相手の感情を知る。全身から受け取る情報は、時の流れを遅らせるほどに多だった。

千里眼を発動し、おれは一気にフェリスとの間合いを詰める。

斬撃音に脳髓を揺さぶられる前に聴覚レベルを下げると、現実の感覚が薄くなり、まるで水中を移動するかのような感覚になった。

それでも凄まじい速度で空を切ったフェネクスの炎の翼は、一気

におれをフェリスの目の前まで導いた。

その速度に息をのむフェリス。

予備動作のない動きで鋭いナイフの先をおれの眼前に向けた。

普段の何倍にもスローになった攻撃を避けるのは簡単だ。

紙一重でそれを避けて懐に入り込み、右手に握ったショートソードの柄で顎を狙う。

フェリスは体をそらすようにしてその攻撃を避けた。

腹筋の力だけでそらした上体を元に戻したフェリスが、口元を緩ませる。

攻撃を仕掛けてくる、と思ったが、違っていた。

一瞬、間合いを取る。

不自然に途切れた攻撃に躊躇するおれを尻目に、フェリスはゆっくりと唇を動かした。

違う、何かを言葉を口にしたのだ。

その動きを追ったおれの視界が、急に狭まった。

「?!」

ゆっくりとフェリスの唇が動く。

その言葉は？

シャックス

ぞわり、とおれの周囲を悪魔の気配が包み込んだ。

危険。

全身の感覚が一気に冷え込む。

フェリスの背後に浮かぶのは、片翼の悪魔 第44番目のコインの悪魔シャックス。

「ああ、その表情、いい感じだね！ 何が起きてるのか分かんなくて絶望してさ」

聴覚を遮断したはずだったのに、フェリスの声が通常のように聞こえる。

時間の進み方が急激に速くなっていく。

千里眼が強制的に解除された？！

「るーく にげて！ シャックスは ヒトの感覚をうばうんだつるーくが 感覚を うばわれたら」

耳元に響いているはずのフェネクスの声が遠ざかる。

視界が狭まって、音が消えていく。

目の前のにやにやと笑うフェリスが見えなくなっていく。

自分が浮いている感覚も薄れていく。

「うっわ、すっげー！ グレイス、めちゃくちや目えいいんだな！すっげー遠くまで見える」

フェリスがおれの感覚を奪い取っているだって……？

ああ、だめだ。

視界が薄れてきた。

意識ははつきりしているのに、感覚だけがすべて薄れていく。

「るーくっ」

フェネクスの声が消えていく。

どれだけ目を凝らしても、なにも見えなかった。

「ばいばい、グレイス」

ひらひら、とフェリスが手を振ったのを最後に、おれの感覚はすべて消失した。

まるで音のない暗闇の中に突然放り込まれたようだった。

人並み外れた五感を頼りに闘うおれにとって、感覚の消失はそのまま負けを意味する。おそらくこのままフェネクスの加護を失って地面に叩きつけられたっておれは気づかないだろう。

声を出しても、喉を震わせている感覚すらなかった。

悪魔の気配すら感じない。

目の前にいるはずのフェリスの殺気もまるで最初からなかったかのようだ。

感覚がないって、こういう事なんだ。

絶望ともまるで違う、なにも存在しない世界に放り込まれたおれは、茫然となっていた。

感覚をうしなったおれは、いったいどうしたらいいんだろう？

ぞっとした。

鳥肌が立つような感情だったのに、全身の感覚がない今、意識だけが焦っていた。

怖い。

感覚がないのはこんなにも恐ろしい事だということを心の底から理解した。

いま、自分は落下しているのか？

それとも、フェリスのナイフで切り裂かれているのか？

それとも

恐ろしい想像に、頭の中が真っ白になる。

叫びだしている気もするが、そんな感覚は一切ない。

何だ、これは。

いったいおれはどうしたら

その時間がいったいどれだけだったのか、おれには見当もつかない。

しかし、突如、何の前触れもなくおれの感覚は手元に戻ってきた。それまで消失していたのが嘘のように目の前が真っ青な空に染まり、全身が風を切っているのを感じる。

「るーく！」

フェネクスの声ではっとした。

気づけばおれはフェネクスの背で横になっていた。

落としてしまったのか、右手のショートソードは無くなってしまっている。

「ありがとう、フェネクス。助けてくれたんだね」

炎の翼を持つ巨鳥の撫で、周囲を確認した。

フェリスはいったいどうしたんだ？

どうしておれの感覚が戻ってきたんだ？

見渡したおれの目に飛び込んできたのは、くるくると落下していくフェリスの姿だった。

「フェリス！」

全く動かないところを見ると、どうやら意識がないらしい。  
意識を失った事で

フェネクスがやったのかは分からないが、このままでは悪魔の加護もないまま地面に激突してしまう。

「くそっ」

おれはフェネクスの背から飛び降りていた。

「あつ るーく！ あぶないよ！」

フェネクスの声を背に、おれは高らかに悪魔の名を呼んだ。

「アガレスさん！」

黒々とした魔法陣が空中で発動し、おれの金目の鷹がおれに寄りそった。

「あの猫を 助ける気か」

アガレスさんが猫、といったのはフェリスの事だろう。

「だって、あのままじゃ死んじゃう！」

そう言くと、アガレスさんは小さくため息をついたようだったが、全身に加護がいきわたるのを感じた。

「ありがとう、アガレスさん！」

その加護を全身に受けて、おれは真っ直ぐにフェリスのもとへ飛んだ。

間に合うか？！

右手を必死でフェリスに向かって伸ばす。

あと少し！

右手の指がフェリスの腕を捉えた。

力任せに引きよせ、おれは空中に急停止した。

無理をしたせいか、フェリスの腕からごきり、と鈍い音がした。関節が外れるくらいはしてしまったかもしれない。

それでもおれは、地面にたたきつけられる寸前にフェリスを救出する事に成功した。

そのままふわりと地面に着地し、フェリスを横たえた。

「……ん」

地面に置いた振動で、フェリスが目を開けた。

おれを追って地上に降りてきたフェネクスが、おれを庇うように翼を広げた。

「あーやべ、オレっち、死にかけた？」

「そうだね」

「 그레이스가助けてくれたわけ？」

その問いには返答しなかった。

「あいたー。これってめちやくちややりにくくね？ オレっちとしたことが、 그레이スに借りを作るなんてさあ」

フェリスは天を仰いだ。

「借りなんて作るつもり、ないよ。目の前に落下していく人間がいたら助けるもんだろう？」

「そう？ そうかな？ そういうもんかな？」

首を傾げたフェリスだったが、先ほどの殺気は消失していた。おれが無理やり引つ張った右腕がぶらりと下がっている。

やっぱり関節が外れているんだろう。

それに気づいたフェリスは、何の躊躇もなく左手でその関節を押し込んだ。

「ごきり、と鈍い音が響く。」

「！」

見ているだけで痛い。

が、フェリスはまるでその痛みなど感じていないかのように、眉一つ動かさなかった。

「あーあ、今日はもうやる気なくしちゃったもんね。帰ろーっと」

ばいばい、と両手に持っていたナイフをすべて放り投げると、フェリスはすつと立ち上がった。

やる気をなくしたおちうのは本当のようだ。フェリスから殺気が完全に消え去っていた。

おれにとつては願ってもない事だ。

「じゃーね、 그레이스。オレっちはシアさんのところに帰るよ」

「あつ、ちよつと待って、フェリス」

「ん？ なに？」

「さつき何で、シャックスの攻撃を途中でやめたの？ 感覚を失ったおれなんて、フェリスなら一瞬で殺せただろうに……」

そう聞くと、フェリスはセルリアンの目を細めて笑った。

「だってさあ、 그레이スの感覚を共有したら、オレっちの方が参っちゃったんだよ。何なの、あれ？ 그레이スはいつもあんな量の情報の中で生活してるの？」

ああ、そうか。

フェリスの言葉で納得がいった。

おれだって、最初は、千里眼によって受け取る情報の多さに意識を保つのもやっとだったんだ。悪魔の力を使って感覚を奪い取ったフェリスに耐えられるはずなんてない。

「いつもじゃないけどね。たまにだよ、たまに」

「ふーん、すげえなあ。 그레이スも伊達にレメゲトンじゃねえんだなあ」

「……失礼だよ、フェリス」

頬をふくらますと、フェリスはにっこり笑った。

「おかえし、おかえし。オレっちのこと聖騎士っぽくないとか最初に言っただの 그레이スじゃん？」

「そんなの忘れたよ」

「ひっでーなあ」

けらけらと笑うフェリス。

そんなフェリスに、おれはもう一つだけ質問した。

「フェリス」

「ん？」

「もしかしておまえ……痛みに鈍感だったりする？」

なんとなくそんな予感があった。

それは、先ほどの行動でほとんど確信に変わった。

「あつれー、おかしいな、うまく隠してたつもりだったんだけどな  
ー」

フェリスは首を傾げた。

「それこそ隠せてないよ、フェリス」

「やっぱ 그레이스、失礼だぜ？」

「お互い様だよ」

そう言って笑いあつた時だった。

突如、額がひどく熱くなった

「うあつ」

突然額を抑えてうずくまつたおれに、フェリスが寄ってくる。

「どしたの？ 그레이스」

熱い。

額に刻まれたルシファの印が急に熱を持ち始めた。

まるで何かを訴えているかのように。

「なんだ……ルシファ……？」

いったいおれに何を伝えようとしているんだ……？

「なあ。 그레이ス」

フェリスの気配を近くに感じる。

ヒトの気配と、二つのコインの悪魔の気配。

しかし、次の瞬間にはそれと別の気配を感じた。

はっと顔を上げる。

「 그레이스？」

不思議そうにおれを覗き込んだフェリスのセルリアンブルー。

その向こうに、おれは信じられない影を見た。

フェネクスが、アガレスさんが一気に警戒したのが伝わってきた。



額の紋章が焼けるように熱い。

会いたかった

心の底から焦がれる感情がわき上がる。

「……うそ、だろ……？」

おれの喉からそんな呟きがもれた。

首を傾げて振り向いたフェリスも、驚いた表情を見せた。

その視線の先にいたのは

「ティファレトじゃん。いったいどうしたんだ？」

青みがかった銀髪、覗き込む事を赦さない深い群青の瞳。芸術家が丹精込めて創った彫像のように整った顔。

忘れるはずがない。

忘れる事なんてできない。

一瞬で、おれの内をさまざまな感情が駆け巡った。

嘘だ、という気持ちと、会えて嬉しい、という感情がかきまぜられて声が出なかった。

何しろ、目の前に現れたのは、戦争の時におれが加護を奪ったはずの神官<sup>セイラ</sup>の姿だったんだから

SECT・25 ティファレト

心の底から歡喜がわき上がる。

会いたかった、と全身が叫ぶ。

「会いたかったよ、レメゲトン」

おれが思っていたのと同じセリフを、目の前の神官セフィラは口にした。

「おれも会いたかったよ　銀髪のヒト」

セフィラ第6番目ティファレト。

耳を隠すくらいだった髪は肩に届くほどまでのびていて、戦争が終わってから時を経ているのを実感した。

しかし、纏っている真っ白い神官服は戦争当時と同じもので、あの雨の中で左胸の契約印を焼いた時のどうしようもない無力が想起して、心臓が苦しくなった。

そう、おれはあのヒトから加護を引き剥がしたはずだったんだ。

それなのに、銀髪のヒトの全身からは天使の気配がする。

「もしかして……」

一度切れてしまった契約を再び戻す。

おれは、それがいつたい何を意味するのかこの身をもって知っていた。

「ミカエルさんと再契約したの……？」

銀髪のヒトは笑った。

そして、その笑顔に違和感を覚えた。

このヒトはいつたいどっち？

ミカエルさんを召喚しているわけではないのに、このヒトからは双子の銀髪セフィラの両方の気配がした。

雰囲気の違い双子　『光』と『音』。

どうして？

「どうしてミカエルさんを召喚してないのに一人なの？」

「ミカエルに、一つに戻してもらったんだ。僕らはもともと一つだ

ったモノだから、それを戻してもらっただけ」

「ミカエルさんが……?!」

驚いた。

二人の人間を一人にする。

そんな事が出来るなんて！

「ずっと会いたくて仕方なかったよ、グリフィス。それから、リュシフェル」

その言葉で、額の印がかあつと熱くなる。

焦がれる感情が流れ込んでくる。

「君と相對する時をずっと楽しみにしていたんだ」

口調はどちらかというと穏やかだった方のヒトに近いだろうか。それでも、おれに向けた敵意は激しい口調だった方のヒトに近かった。まるでかみつくような激しい敵意が肌に刺さってピリピリする。

ぞつとするような殺気だったフェリスとは違う、純粹で真っ直ぐな 敵意、だった。

「そっかぁ、戦争の時にティファレットを倒したレメゲトンって、グレイスだったんだ」

フェリスが納得したようにぼん、と手を打つ。

「別たれたモノを 一つに戻す そうまでして 魔界の存続を 拒むのか ミカエル」

アガレスさんが淡々と言った。

一つだったモノを二つに。二つだったモノを一つに。

別たれた世界。

天界と魔界。

天使と悪魔。

おれにはもう、なにも分からないよ。

ただ一つ分かる事は、目の前にいる銀髪のヒトがおれに向かって挑む様に敵意を曝している、という事実だけだった。

左手はピクリとも動かない。

額が焼けるように熱い。

銀髪の一トと並んで立つフェリスが戦闘に参加する事はないだろうが、気まぐれな彼の事だ。いつまたおれに刃を向けるか分からない。

どうする？

「フェネクス、また隙を見て逃げよう。上空で待機してて」

そっと呟くと、炎の翼を持つ巨大な鳥は大きく羽ばたいて空へと飛び立った。

「アガレスさん、ありがとう。また呼ぶね」

「無謀は愚行 用心せよ 幼き娘」

金目の鷹が消失する。

全身を覆っていた加護が消え、国境の壁付近の草原におれとフェリスと銀髪の一トだけが残った。

雨の季節になる前の、少し夏を含んだ風がおれたちの間を駆け抜けていった。

春から夏に向かう、一番好きな季節。すべてが始まったあの朝と同じ、銀髪の一トを目の前にして。

「リュシフェル！」

「ミカエル！」

おれたちは、同時に天使と悪魔の名を呼んだ。

国境を越えて、リュケイオン。

天使の国でも悪魔の国でもない場所に、二つの強大な気配が出現した。

ほとんどそっくりの姿かたちをした一対の天使と悪魔。

「ああ、本当に久しぶりだね。懐かしい。あの時もこうして君と向かい合ってた」

「そうだね。本当に」

昨日の事のように思い出せる。

グリモワール王国の天使崇拝の村で育った彼らは、グリフィス家による天使崇拝弾圧の被害に遭い、グリモワール王国を追われた。その後、いったいどういう人生を彼らが歩んだのかは知れないが、セフィロト国でミカエルさんと契約し、神官<sup>セフィラ</sup>の地位を手に入れた。そして、戦場でおれと敵対し、刃を向けられたおれはすべてを終わらせるために

「終わってなかったんだね。あれで終わりじゃなかったんだ」  
再契約。

一度切れてしまった契約を再び結び、肉体の時を止める禁忌の術。おれがたくさんの悪魔とコイン契約を紋章契約として結びなおしたように。

「当たり前だよ、グリフィス。君が生きている限り、グリフィスが存続する限り、『僕ら』はとまらない」

僕ら、という言葉にいったいどこまでが含まれてるんだろう。

双子の二人、という意味か、それとも銀髪のヒトの背後に佇むミカエルさんも含めているのか。

見た目がそっくり同じな、天使と悪魔。

ああ、そうか

どうしておれはずっと気づかなかったんだろう？

当たり前すぎて

「ルシファ」

カマエルとフラウロス。

ラファエルとハルファス。

マルコシアスとグラシャ・ラボラス。

同じ形をした天使と悪魔は、悪魔と悪魔は、みなお互いを求めあって、消しあって、最後には

「ごめん、分かるのが遅くて、ごめん」

今さらすぎるかもしれない。

ミカエルさんを目の前にした時、ルシファから流れ込んでくる感情は、いつだって会いたくて会いたくて焦がれていた。

でも、その感情の裏に潜んでいたのは、消滅させることへの躊躇。

「ミカエルさんはルシファの片割れなんだね」

そう言って振り返ると、ルシファは悲しそうに笑った。

ああやっぱりそうなんだ。

「ルシファもミカエルさんと闘うの？」

「私は 争いを 望んでいません」

いつだってルシファは言っている。

争うつもりはない、と。

そしてミカエルは答える。

今さら何を、と。

銀髪のヒトの背後に浮かぶ美しい天使も、全く同じ顔で悲しそうに微笑んだ。

「崩壊する世界に 慈悲を それが兄さんへの せめてもの餞」はなむけ

鼓膜を揺らす音ではなく、頭の中に直接響いてくる不思議な音で

ミカエルさんは言った。

ミカエルさんは、魔界を滅ぼそうとしているんだ。

なにも分らないおれにも、それだけは分かる。

「ルシファ、おれも戦いたくはないよ。いつも、平和に暮らせたらいいなっと思ってる」

「そうですね ルーク いつも貴方は 平穏を願っている」

「けどもしミカエルさんが魔界を滅ぼそうとしてるんだったら、おれはどうしたらいい？」

「それは 貴方が 決める事です ルーク」

「そう」

おれが決める事。

フェリスと銀髪のヒトを前にして、ミカエルさんはルシファの片割れで、魔界を滅ぼそうとしていて。

戦いたくはない。

ルシファはそう言うし、おれも心の底からそう思う。  
それなのに。

「駄目なんだ、ルシファ。おれは戦いたくないけど、おれの大切なモノを壊されるのは絶対に嫌なんだ」

悪魔を信仰するグリモワール王国のヒトたちも、そのヒトたちが住む大地も、そのヒトたちが育ててきた心も、なにも壊してほしくない。

もしミカエルさんがルシファを倒して魔界を壊してしまったら、そのすべてがもう二度と戻ってこないから。

自分が生まれたから、好きだから。そんな身勝手な理由で誰もが大切なものを選ぶのよ。そして大切にしたいものを守る心が二つ、相反するとき、それは衝突するしかない

いまはもういない育て親のねえちゃんが、戦争がどうして起こったのか、と聞いたおれに言った言葉だった。

ねえ、ねえちゃん、本当にそうなの？

ミカエルさんとルシファは戦うしかないの？

「だからもし、ミカエルさんが魔界を滅ぼすって言うんなら  
ラスはマルコシアスさんと戦わなくちゃいけないの？」

おれは アレイさんと戦う事になるの？

迷いを振り切ると、左手がほんの少し、微かに動いた。

ゆっくりと左手を握りしめると、少しぎこちないながらも指が動いた。

先日貰った傷の痛みはあるが、この手を動かせる、という感覚がようやく戻ってきた。

「おれは、そんな事させない。もしミカエルさんがルシファを消そうとするのなら、おれはそれに抗うよ」

革命軍を編成する、と宣言したサンの強い瞳を思い出した。

仰せのままに、と跪いたクラウドさんはとても穏やかな目をしていた。

おれとアレイさんはそれを承諾した。

今さら、おれの我儘であのヒトたちの想いをなかったことにする事なんて絶対に出来ない！

「もしミカエルさんが魔界を滅ぼすって言っても、おれは絶対にそんな事させない」

右手のショートソードはどこかに落としてしまっていたから、痛む左手を無理やり動かして右腰の剣を抜いた。

「ぜったいに負けないっ！」

「それはこっちの台詞だよ」

「え、ちょっと待って、オレっちは無視？　っていうかミカエルとリュシフェルが戦い始めたら、確実にオレっち巻き添え喰って死んじゃう気がするんだけど」

フェリスが慌てて飛び退った。

「どいててよ、フェリス。すぐ終わる……ミカエル！」

銀髪のヒトは右手の手甲から銀のブレイドを閃かせた。

「ルシファ！」

空っぽだったおれの右手に、漆黒の剣が出現する。

考えるより先に地を蹴った。

先手必勝！

両手の刃をクロス、一気に距離を詰めて閃かせた。

それを、銀髪のヒトが迎え撃つ。

おれは間違いなく全力で、それを受けた銀髪のヒトだって全力だった。

それなのに。

おれの刃は思いがけない方向から弾かれ、ルシファの加護があるにもかかわらず凄まじい勢いで吹き飛んだ。

強い付加がかかって、治りきっていなかった左手の傷が疼く。

ぐっと全身に力を込めて体勢を整え、ざっと地面に着地した。

すぐに顔を上げたおれの目に飛び込んできたのは、おれと銀髪のヒトの間に立つ、聖騎士の姿だった。

「ティファレト、そこまでにしなさい」

「何するの？　ケテル。僕らの邪魔しないでくれる？」

銀髪のヒトの言葉に、おれは愕然とした。



## SECT・26 カインⅡウインクルム

ケテル？ ケテルだって？

驚いたが、そのヒトから感じる気配は確かに天使のものだった。それも、おれがよく知る天界の長の気配と同一だ。

「これ以上リユケイオンの地を荒らす事は僕が赦しません」

涼しげで辛辣なテノール。

きいん、と軽い音で剣を収めた聖騎士からはメタトロンの気配が消失する。いったん息をついた彼は、ちらりとおれの方を見た。

「君がグリフィスの末裔ですか。ずいぶんと幼い。君がカマエルを倒したとは、到底信じられません」

流した金髪に透き通る蒼の瞳。歳はアレイさんと同じくらいだろうか。しかし、黒衣に身を包んだ黒髪紫瞳のアレイさんが悪魔騎士ならば、このヒトは文句なしの聖騎士だった。

純白の騎士服も銀色の装備も、彼の為にデザインされたかのようにぴったりと似合っている。

アレイさんと同じように、騎士だった身分から神官セフィラになったヒトだと聞いている。

何より、おれたちの事を見逃した、とアレイさんが言ったのはつい先日の事だ。

「あなたが新しいケテル？」

「ええ、そうです」

右手を胸に当て、軽く会釈する騎士の礼をしながら、その聖騎士ははっきりと言った。

「元聖騎士団副団長、カインⅡウインクルムと申します……以後お見知りおきを、ラックⅡグリフィス女爵」

「ケテル、そこどいてくれる？」

銀髪のヒトが不機嫌そうに言う。

ところが、カインは全く動こうとしなかった。それどころかミカエルを召喚した銀髪のヒトを辛辣な視線で射抜いた。

「ティファレト、ミカエルを帰しなさい」

「どいてよ、ケテル。邪魔なんだけど」

なおも食い下がった銀髪のヒトにため息をつき、カインは再び剣を抜く。

「……メタトロン」

静かに天使の名を呼ぶと、カインの全身から凄まじい力の奔流が迸った。

戦場以来に感じる天界の長の力はやはり強大で、ルシファの加護を受けているというのにとてもしゃないけれど勝てる気はしなかった。

「命令違反です」

次の瞬間には、銀髪のヒトが地に伏していた。

意識を失わせたのだろう、ミカエルの姿がふっとかき消えた。

「……！」

攻撃が全く見えなかった。

フェリスも同じなのだろう。肩をすくめて口笛を吹いた。

力を失って地に伏した銀髪のヒトに向かってすっと指を向けると、その姿が一瞬で消失した。どうやらメタトロンの力で転送したようだ。

以前のケテルとはけた違いだ、と言ったアレイさんの台詞を思い出した。

「君も今のうちに去りなさい。急がなければ、次はマルクトが出てくるだろう。フェリス、君も早く王城に戻りなさい」

「えっ、シアさんきちゃうの？ やっべー、オレっち、悪魔の契約が終わってすぐ、黙って出てきたんだよなあ。ねえ、ケテル、シアさん怒ってた？ 怒ってた？」

「早く戻りなさい」

二度目の勧告。

フェリスはぶーぶーと言いながらも背に片翼を広げた。紫がかつた翼に、先ほどの感覚の消失を思い出しぞつとした。

「じゃーね、グレイス。シアさんが赦してくれたら、また会えるかもねっ」

黒ニット帽の下のセルリアンの瞳をきらきらとさせて、フェリスは飛び立っていった。

国境に残されたのは、おれとカインの二人だけ。

おれはルシファを魔界へ帰し、ようやく左手のショートソードを収めた。天空に待機していたフェネクスにもお礼を言ってさよならする。

完全に武装を解いたおれをみて、カインは言った。

「君も行きなさい、ラック・グリフィス。こんな国境で燻らず、早く離れなさい」

「……カインはおれのこと、捕まえようとしなんだね」

そう聞くと、カインは少し驚いたような顔をした。

「君も僕の事をその名で呼ぶのですね。ケテル、とは呼ばないのですか？」

「だってお前には名前があるじゃん。おれが前のケテルをケテルと呼んでたのは、本当の名前を知らなかったからだよ。それに何より、おれにとつてケテルは、前のケテルだけだ。ねえちゃんを殺して、おれとアレイさんの平穏をぶち壊した、あいつだけだ」

はつきりそう言つと、カインは微笑<sup>ワラ</sup>った。

その笑顔にどきりとする。

「君も同じ事を言うのですね」

どこか悲しそうな、複雑な笑顔だった。

「僕は、君たちに世界の理<sup>コトワリ</sup>を説く事が出来ないのを齒痒く思いますよ」

「世界の理<sup>コトワリ</sup>……」

天使と悪魔が繰り返すその言葉を口にして、カインはさつと踵を

返した。

聖騎士のマントが初夏の風に翻る。

「行きなさい。そして、世界の理を知りなさい。その後なら、僕は君たちの前に喜んで立ちほだかりましょう」

「カインはやっぱり、敵なの？」

そう聞くと、カインはふっと足を止めた。

そして、ゆっくりと振り返った。

金髪が風に揺れて、澄んだ蒼の瞳が太陽の光を反射した。絵に描いたような聖騎士がそこにいて、おれは思わず見とれてしまっていた。

カインは固く引き結んでいた唇を開いて告げた。

「敵です」

きっぱりと言い切れ、心のどこかがきゅうつと痛む。

なぜだろう、このヒトと敵対したくない、と思った。

「どうしても？」

「もし君が悪魔をすべて捨てるといふなら、喜んで味方になります」

「それは無理だよ！」

「ならば、君は僕の敵です」

それ以上言い返せなかった。

「君の仲間が来ますから僕は去ります。いいですか、すぐに国境を離れるのですよ」

「仲間？」

ふと振り向くと、四枚翼の天使が天から降りてくるところだった。

「冷てーな、ケテル。ここまで来といて俺様には挨拶なしかあ？」

おれの背後に降り立って、肩に手を置いた。

味方。

その言葉通り、おれはヤコブの手にほっとしていた。

フェリス、銀髪のヒト、そしてカイン。

連続して相對したことで、気づかぬうちに緊張していたのだろう。「お前が何も言わずに飛び出していくから、シドは動くしルウナー

はキレるしアウラは呆れるし、大変だったんだぜ？」

「あ、ごめん」

「……ったく」

ため息をついたヤコブは、金髪の間から深紅の目を覗かせ、カインに言った。

「帰るぜ、黄金獅子の末裔。ここはリュケイオンだ。ケテル、お前がここにすることだって本来ならリュケイオンとの協定違反だろう？」

「人間として堂々と領権侵害をしている天使に言われたくはありません」

すぱりと切り捨てたカインは、再びメタトロンを召喚した。

「いいですか、ラック・グリフィス。次に会う時までには、すべてを知った上で僕と戦う決心をしておいてください。それならば、お相手しましょう。アレイスター・クロウリーにもよろしくお伝えください」

そんな言葉を残して、カインはふっとその場から消えた。

片割れ、世界の理、<sup>「トワリ」</sup>柱。

二つに分かれた世界。

おれには分からないことだらけだ。

それを全部知った時、おれはいつたいていどういう結論を下すんだろう？

「ほれ、次は落とすなよ？」

ヤコブが右手用のショートソードをおれに渡した。

空から落としていたのだ。すっかり忘れていた。

「ありがとう」

ショートソードを鞘におさめ、ようやく元に戻った事を実感した。ぎこちないながらも左手が動いてほっとした。

ラーズの声はしなかったし、心臓の鼓動も落ち着いていた。

「さあ、とっとと帰るぞ。みんな心配してんだからな？」

ヤコブの言葉ではっとした。

ルウナーはきつと怒ってるんだろうな……シドも。  
帰った時に聞くであろう二人分の説教を思つて、おれは大きなため息をついた。

ヤコブに連れられて帰った先で待っていたのは予想通りのお説教。昼御飯の時間をおして続けられたそれは、午後にモーリが帰ってくるまで続いたのだった。

「もう二度とこんなことしないでっ」

ほとんど悲鳴を上げるようにして締めくくったルウナーは、最後におれをぎゅっと抱きしめた。

「本当に心配したのよ」

「……ごめんね、ルウナー」

本当にごめん。

おれは反省し、心の底から謝った。

おれが周りのヒトを大切に思っているように、周りのヒトもおれのことを大切に思ってくれているから。

それを絶対に忘れてはいけない。

再びその言葉を心に刻みつけた。

帰ってきたモーリは、ヤコブを見て驚いた顔をしていたが、神父のヤコブ「ファヌエルだと名乗ると、首を傾げてこう言った。

「貴方は人間が好きなんですね」

「……やめるよ、ホズの司祭。ヒトの過去を見んのはあんまい趣味じゃねえぜ？」

「ああ、すみません。癖になっているものですから」

モーリは不思議だから、ヤコブがウリエルだってこともすぐに分かっってしまうだろう。

ルウナーのように驚きすぎて思考停止することはなかったが、物珍しそうにヤコブを見ていたのも事実だった。

そして、そんなモーリからもたらされたのは、ヤコブの言った情報とほぼ一緒だった。

天使に滅ぼされた悪魔の国の騎士が、オリュンポスの軍神アレスに下った。

軍神アレスの居城がある街は今、その噂でもちきりだという。

「ヤコブはどうしてこの街にいたのにそれが分かったの？ 誰かに聞いたの？」

「……いんや。俺様はその街で誰かが噂してんのを『聞いた』だけだ」

「聞いた？ この距離で？」

「あの街をここの屋上から『見た』お前が言うのかヨ、黄金獅子の末裔」

「あつ……」

千里眼。

おれはこの場所にいながら、あの街の様子を『見る』事が出来る。

もしかすると、ヤコブはおれと同じ能力を持っていて、あの街の声を『聞く』事が出来るのかもしれない。

そう、このヒトは『孤高の伝道師』ウリエルなのだ。

「いったいどうしてウォルジエンガさんが軍神アレスのもとに下った、などという噂がたったのか……ウォルジエンガさんの意思なのか、それとも単純にとらえられているのか、それは分かりませんでした」

「もしかすると、アレイさんが自分の意思でそこにいるかもしれないってこと？」

「ええ、その可能性はあります。こうやって噂になってしまえば、 그레이ス、貴方に自分の位置を知らせる事が出来ますからね。現にいま、私たちも噂で彼の居場所を知ったのですから」

「ああ、なるほど」

「はあ？ そんな自らセフィロト国に身を曝すような事、普通するか？」

「アレイさんならやるよ」

あのヒトは、自分の身を盾にしているもおれを守ってくれるから。じゃあ、まずおれは真正面からアレイさんを迎えに行けばいいんだね」

「……一筋縄じゃいかなーと思うがな」

ぼそりとヤコブが呟く。

「うん、でもやってみるのが一番だね。最初はそうしよう」

「そうですね、争わずに済むならそれが一番いいですから」

モーリはそう言って笑った。

「さて、では明日の朝に出発しましょう。今夜のうちに出立の準備を整えます。ルウナー、劇団員全員に連絡を」

「分かってるわ」

「 그레이スはシドと一緒にいてくれますか？ きつと貴方と一緒にシドも無茶はしないはずですよ」

「分かった」



モーリの指示を受けて、おれは頷いた。  
もうすぐアレイさんに会える。  
ときどきした。

今夜はちゃんと眠れるだろうか？

シドの病室から、暗くなっていく町並みを眺めていた。  
白い壁に影があり、少しずつ暗くなっていく。

窓から漏れる明かりが目立ち始め、星空のような転々とした灯りが街中にもる。

「お休みにならないのですか？」

シドがおれに尋ねた。

「もうちょつとだけいるよ」

「そうですか」

シドは出ていけ、なんていうはずないし、必要がなければ話しかけてこないし、余計な事をしなければお説教される事もない。

要するに、とても居心地が良かった。

その雰囲気は少しだけアレイさんに似ているせいもあるかもしれない。

彼は悪魔の国の騎士だから。

と、おれはふと気付いた。

「ねえ、シド」

「何でしょう」

「さっきさ、カイン……ケテルに会ったっていったじゃん」

「……ええ、聞きました」

先ほどその事でこつてり絞られたばかりだ。

シドは、またなにを言い出すのかと構えたようだった。

「んでねえ、そのカインってさ、もともと聖騎士団の副団長だったヒトなんだ」

「ええ、剣の腕はセフィロト国随一であると聞き及んでいます。 2

0代で聖騎士団の副団長になるのは前例がないとか」

やっぱりカインは有名人らしい。

「そのヒトがさあ、なんかすげーシドに似てんの」

「私がセフィラと？ どこが似ているというんですか？」

「んー、頑固そうなところ。あと、口調かな？ 有無を言わせない感じのところが似てる」

カインを前に、敵のように思えなかったのはそのせいかもしれない。

普段は表情があまりないシドの眉間に、きゅつと皺が寄った。

あ、この表情、まるでアレイさんみたいだ。

「また貴方は敵と仲良く談笑でもされたのですか？ 何度も申しあげているでしょう、貴方は警戒心というものが皆無です。それもケテルは神官<sup>セフィラ</sup>を束ねる長、さらにその場にはフェリスもティファレットもいたでしょう」

騎士になるヒトってどことなく似てるのかなあ？

結局はじまってしまったお説教をききながら、おれはぼんやりと考える。

「そもそも、なにも言わずに飛び出していく事があり得ません。私の怪我が完治した暁には、絶対にそんな行動は……」

そう言われてみれば、アレイさんも説教癖があるよなあ。最近ではあきらめたのかあまり長いお説教を聞く事は無くなったけれど。

ぱくぱくとよく動くシドの口をぼんやりと見ていると、シドの視線がおれを貫いた。

「聞いてらっしゃいますか？」

「あ、ごめん、聞いてなかった……」

おれにはどうやら学習能力とかいうものが存在しないらしい。

極寒の視線をおれに投げかけたシドは、大きいため息をついてさらに説教を重ねたのだった。

心の中で、カインもきつと説教魔なんだろうな、なんてぼんやり考えながら。

次の日の朝、おれたちは国境の街アクリスを出発し、軍神アレスの居城があるミウルメクスへと向かった。

リユケイオンに入る時は、モーリとルウナー、そしておれとシドしか乗っていなかった馬車に、ヤコブとアウラが増えていた。

アウラはシドの主治医としてついてきてくれたのだ。

怪我が治らない限り、私の見ている前で動く事は許さん、と言い切ったアウラがいればシドの怪我也完治するだろう。

夕方ごろまで馬車を飛ばすと、ふっと風の匂いが変わった。

「お香の匂いがする」

「そう？ ミウルメクスの街が近づいたせいかしら？」

ルウナーが窓を開けると、真っ赤な夕日が飛び込んできた。

その夕日を背景に、真っ白な軍神アレスの居城が浮かぶ。

さすがのおれも緊張してきた。

グリモワール王国にもセフィロト国にもなかった不思議な円柱形の構造物がおれを迎える。

あの場所にアレイさんがいる。

「到着して宿を決めたりしていたら遅くなるでしょうから、軍神アレスに会いに行くのは明日にしましょう」

「えー、待てないよ！」

「もうすぐ会えるのですから、わざわざ夜中に行って不興を買う事ありませんよ」

モーリが諭して、おれはしぶしぶそれを受け入れた。

リユケイオンで発祥したというお香の匂いがアクリスと少し違っていた。

軍神アレスの居城があるミウルメクスは、落ち着く香りだったアクリスと違い、どこか攻撃的で不安を誘う香りが漂っていた。



そして次の日、おれはルウナーとアウラに連れられ、共に軍神アレスの居城へと向かった。

こんな変な建物は見た事がない。

いったいどこに入口があるのかも分からない。

「この城は、リユケイオンの伝統的な宮殿と闘技場のコロセウムを合わせた造りになっている。年に一度、ここでは大会が開かれ、国中の戦士が頂点を競うんだ」

アウラが煙草の煙を吐きながら教えてくれた。

「ここ、闘技場なの？」

「ああ、外見は神殿を模しているが、中身は闘技場だ。そのさらに上に積み重ねて住む場所があるらしいが……私は入ったことなどない。いったいどうやって上に行くのかも分からない」

「え？　じゃあどうしたらいいの？」

「とりあえず、闘技場の入口に行ってみよう」

アウラは、その大会の時だけ開かれるという、居城唯一の入口へと向かった。

兵団が出入りするのかと見まごうほどに大きな扉は、固く閉ざされている。柱や壁と同じ素材だろう。街をつくっているのも、同じ白い石のような素材だ。

ところがそこには誰もいない。

唯一、扉の真ん中に小さな窓のようなものがあり、開くと中を覗けそうだった。

「軍神アレスはオリュンポスの一人だからな、本来ならそんな簡単には会えんだろう」

アウラが言って、肩をすくめた。

「どうする？　 그레이ス」

「んー、一応聞いてみるよ」

おれは小さな窓に手をかけた。

「あのー、すみません」

中を覗いて、目に付いた衛兵さんに声をかける。

じろり、と睨んだ衛兵さんはシドと同じくらいの歳だろう。

「ええと、すみません、軍神アレスに会いたいですけど」

「何用だ」

さらに睨みつける衛兵さんに負けず、おれは大きく深呼吸。

「ここにおれの大切なヒトがいるって聞いた。だから、迎えに来た」  
衛兵さんは眉をひそめたが、少し待っている、といって先輩らしい衛兵さんに話を聞いていた。

どうやらその扉の中を守っている衛兵さんの中で一番えらいだろうというヒトが出てきて、おれの前に立った。

目線がずいぶん上だ。アレイさんと同じくらいか、それより大きいかもしれない。

「お名前と要件を伺おう」

そう言われて、ほんの少し迷ったが決心して告げた。

「おれはラック・グリフィス。元グリモワール王国のレメゲトンだ。同じレメゲトンのアレイスター・クロウリーを迎えに来た」

「……ここで待っている」

そのヒトはおれを置いて中へと入っていった。

ときどきする。

アレイさんに会いたい。

いま目の前に現れたら、なにも考えずに腕の中に飛び込もう。

そう思っただけでいると、先ほどの衛兵さんが戻ってきた。

さっきと変わらない威圧感でおれの目の前に立ち、こう告げた。

「彼は確かにここにいる。だが、君には会いたくないと言っている。お引き取り願おう」

「え?!」

そんなバカな?!

「嘘だ! アレイさんかそんな事言うはずな」

続けようとしたおれの目の前で、小さな窓がぱたんと閉じられる。危うく鼻の頭をぶつけてしまうところだった。

「何で　?!」

愕然とした。

アレイさんがおれに会いたくないって？

心の底が抉り取られるような感覚に陥った。

「なんで？」

どうして、リユケイオンで会おうって言ったのに。

生きてここへたどり着くって言ったのに。

嫌がったって傍を離れないって言ったのに。

「どうして？　何で？　アレイさんはおれのことキライになっちゃったの　?!」

「落ち着いて、グレイス」

ルウナーの声ではっとした。

「ルウナー、アレイさんは、おれに会いたくないって……」

「歌姫の言うとおりだ、お前はちよつと落ち着け」

新しい煙草に火を付けたアウラがおれの額をぺん、と叩いた。

「ウォルジエンガさんがグレイスに会いたくないなんて、そんな事があるはずないわ。それは、ほんの少ししかウォルジエンガさんに会っていない私にだって分かる事よ。そうでしょう？」

「あ……」

ルウナーの蒼い瞳を覗いて、その真剣な眼差しにようやく少し落ち着いた。

「まあ、軍神アレスかその周囲の人間が隠ぺいした、と考えるのが普通だろうな。まさかヤコブの言葉が本当になるとは……」

「そう……だよ。アレイさんは絶対に約束を破ったりしないもん」  
ヤコブはもしかすると、こうなる事が分かっていたのかもしれない。  
い。

「帰るぞ」

アウラはくるりと踵を返す。

「ここにいてもらちがあかん。帰って対策を立てる必要がある。どうやらヤコブも軍神アレスについて多少知っているらしいから、まずそこからだな。ヤツは気まぐれだから、協力するとか言っても素直に話すか分からんが」

「う、うん……」

おれもアウラを追って、軍神アレスの居城に背を向けた。

すぐそこにいるのに。

ほんのすぐそこにいるのに。

アガレスさんの力を借りて飛べば、一瞬で行けるかもしれないのに。

「アレイさん……」

会いたい。

今すぐ会いたい。

じわりと目の端に涙の粒が浮かぶ。

隣を歩くルウナーに気づかれないよう、こっそり腕でぬぐった。

「まあ、そうなるだろうな」

おれたちを出迎えたヤコブはそう言った。

「やはりお前は分かっていたんだな、ヤコブ」

「んー、まあな」

事もなげに言うヤコブ。

「ねえ、ヤコブ。軍神アレスについて教えて。どうしてアレイさんをとらえたりしたの？ どうしておれが行っても会わせてくれないかったの？」

「ん、その話はおいおいしよう」

「すぐにしてよ！」

そう叫ぶと、ヤコブは首を横に振った。

「駄目だ。とりあえずお前は頭を冷やせ。そんな状態じゃ軍神アレ



スに返り討ちだ、と言わなかったか？」

「でも、でもっ」

「いいからいまは駄目だ」

「……っ！」

頑として動かないヤコブ。

アウラはため息をつき、ルウナーは困ったようにおろおろとしている。

「ヤコブのばーか！」

おれはそう叫んで、部屋を飛び出した。

今すぐにだってアレイさんのもとに行きたいのに、どうしてヤコブは分かってくれないんだろう？

行き場のない思いを抱えて、おれは隣のシドの部屋に逃げ込んだ。

「どうされました？」

おれの様子が尋常じゃないのにすぐ気づいたんだらう。

シドは藍色の髪を揺らして尋ねた。

今日はだいぶ顔色がいい。かなり回復してきているようだ。

「シド……」

ふらふら、と引き寄せられるようにシドのベッド脇に座りこみ、シドを見上げるようにして訴えた。

「アレイさんが、おれに会いたくないって言うんだ」

「……え？」

シドが珍しく驚愕の表情を素直に示した。

「クロウリー伯爵が直接そうおっしゃったのですか？」

「うっん、違うけど……」

そう言うと、シドは小さく息を吐いた。

「それで落ち込んでらっしゃったのですか」

「え？ 分かる？」

「分かりやすいですよ」

苦笑したシドの笑顔が珍しく、思わずじっと見てしまった。

「大丈夫です。クロウリー伯爵が貴方に会いたくないなどおっしゃるはありますがありません」

シドはきっぱりと断言した。

「……だよね」

おれもそう思う。

そう思ってるんだけど、会いたくないそうだと、といった衛兵の聲が耳の中でリフレインする。

絶望が心に芽生えそうになって、左手が疼く。

「それでも、悲しかったんですね」

シドの声にハツとした。

そう。

頭の中で分かっているにしても、心の底から信じていても、どうしても悲しいんだ。

それはきつと、おれがアレイさんのことを世界でいちばん大切に思っているからなんだろうけれど。

相手の事が好きであれば好きであるほど、不安は大きくなるんだ。かつておれが、育て親のねえちゃんの前で泣くのを必死で我慢していたように。

「うん、悲しい」

素直にその言葉が口から滑り出ると、あとはもう止まらなかった。「どうしよう……アレイさんがおれのことキライになったらどうしよう」

鼻の奥がつんとして、さっき我慢した涙がじわりと滲んだ。

「そんな事はありませんよ」

シドの声は優しくかった。

おれは泣き顔を隠すように、ベッドに両手を組んで顔をうずめた。「だってさあ、だって、アレイさんはリユケイオンで会おうって言ったんだよ……？」

直接聞いたわけじゃないから、悪魔を通したメッセージだったけれど。

アレイさんはセフィロト国の注意を全部自分に引き付けて、危険を冒して国境を越えた。

おれはアレイさんを追いかけて国境を越えてきたのに。

「何で会いたくないなんて言うんだよ……！」

アレイさんの言葉じゃない、と信じていても、悲しかった。

胸が張り裂けそうなほどにショックだった。

「会いたいよ……アレイさん……」

一度流れ始めた涙を止める術はなかった。

シドはいつかおれにやってくれたみたいに、おれの頭を優しく撫でた。

「大丈夫です。きっとすぐに再会できます。クロウリー伯爵もきっと、貴方に会いたいと願っていますから……」

たくさん泣いて、ようやくすっきりした。  
またシドに甘えてしまった。

シドの雰囲気のアレイさんに似ているせいだろうか、とても甘えやすいのは事実だった。

「ありがと、シド。ちょっと落ち着いた」

「いえ、私に出来る事でしたら」

シドはさらに藍色の髪を揺らした。

心が折れそうになった時、国境を越える時。

シドはずっとおれを助けてくれた。

「シドがいてくれてよかった。ありがとう」

そう言つと、シドは少し驚いたような顔をしたが、すぐ、嬉しそうに笑った。

こうして笑顔を見ると、シドがまだ10代なのだという事を思い出す。

「その言葉だけで、私は救われます。あの時戦場でなにも出来なかった私ですが、少しでも貴方のお役にたてるなら、ただそれだけでいい」

このヒトは本当に、心根の底から騎士なんだな。

そう思つと、自然に笑えた。

「本当にありがとう」

もう一度そう言つてから、おれは立ちあがった。

左手は動く。

痛みは残っているが、何度も悪魔を召喚したことで傷の治りがかなり速い。もう何日もしないうちに傷はふさがってしまうだろう。

「よし」

「お怪我はもういいのですか？」

「うん、おれはもう平気だ。シドは？」

「私もかなり回復しています……動いたら命はない、と主治医に脅されていますから」

「ほんとだよ！ シドはすぐ無茶するんだから！」

「貴方にそれを言う資格はありません」

すぱりと切り捨てたシドに、返す言葉がない。

唇を尖らせていると、こんこん、とドアがノックされた。

「はい、どうぞ」

シドが答えると、扉の向こうからヤコブが姿を現した。

その後ろからアウラとルウナー、そしてモーリ。

「どうだ？ 頭は冷えたか？」

ヤコブがにやにやと笑いながら聞いてくる。

「ん、もうだいじょうぶ」

自然に笑い返す事の出来た自分に驚く。

確かに、あのままじゃヤコブの話を冷静に聞く事なんて不可能だっただろう。

「じゃ、作戦会議と行くか」

すでに外は夕日が指している。

「こつからは長くなるぜ、その怪我人は大丈夫か？」

「私は大丈夫です」

シドははつきり答えた。

「よし、じゃあ始めるか」

ヤコブがさらりと金髪をかき上げた。

深紅の瞳が夕日を灯して輝いた。

「作戦会議だ」

大丈夫。俺は、俺だけはお前の傍からいなくなったりしない。ずっとここにいます。忘れもしないし、死んだりもしない。隣にいて、一番に助けてやる。もし、お前が嫌がったとしても放さない。何度でも彼が繰り返す誓いは決して嘘じゃないことをおれは知っている。

でも、今回だけはおれが会いに行くよ。  
嫌がっても離れたくないのは、おれだって一緒なんだから。

真っ白な軍神アレスの居城は、夕日を反射して燃えるように赤く輝いていた。

あの場所に、アレイさんがいる。

いつも自分を盾にして、おれを守ってくれるあのヒトを、今度はおれが迎えに行くよ。  
だから、待っていて

## ・ ・ ・ オワリ ・ ・ ・ (後書き)

ここまでお読みいただき、ありがとうございました！  
まだぜんぜん話終わってませんが……orz

再会は、次章「ASCENDANT PRELUDE - head  
-」に持ち越しです。

先に「tail」を完結させてから執筆に入るので、始まるのは夏  
くらいになると思います。

本当に長い話ですが、気が向いたらつきあってやってください(笑

あ、ブログ(<http://lostcoin.blog.shinobi.jp/>)でキャラの人気投票やってるので、気が向いたらどうぞ。パソコン限定です。

今のところアレイさんが独走状態……orz ナゼダ

8月いっぱいでおしまいにしようと思います。

あまりにもぶつちぎったら、何か考えようかな……汗

ではでは、また次章でお会いしましょうノシ

2010・6・27 早村友裕

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2789f/>

---

DAWN OVERTURE -head-

2011年6月19日11時40分発行